

---

# 夜を駆ける～Hello my friend～

伊吹ノア

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夜を駆ける／Hello my friend

### 【Zコード】

Z8669W

### 【作者名】

伊吹ノア

### 【あらすじ】

未来の可能性の一つ、幻想の世界『コーライジア』。その世界の中心、『コーライジア・スクール』。そこで暮らすカズ・カムラルは、スクールの最小学級、『リトルクラス』に通う魔法使いの卵だ。そんなカズはある日、隣の席の少年、マーサー・ヴァーレストに誘われ、街で働くこととなる。だがそれは、魔法のマントと仮面つき＆夜限定の仕事で……。

／＼現代っぽいアイテムや名称が出てくるかもしれない、異世界ファンタジーです。自身にすらひた隠す秘密を持つ、後に『世界の至

『宝』と呼ばれることとなる『カズ』の物語。ある意味勘違い系で、  
微バトル&冒険要素あります。個人的には恋愛要素もあるかなと思  
っています。//

## 1、prologue（前書き）

伊吹ノアです。

第11作目、『夜を駆ける～Hello my friend～』  
をお送りいたします。

一言でいえば、自作の中で最も重要な愛すべきキャラの数多ある  
物語のほんの一幕、といったところでしょうか。

その分、今までのを踏み台にしつつ、これから入れていきたまよー。

## 1、prologue

そこは未来の可能性の一つである世界、『コーライジア』。包み込む暖かい太陽と、深遠なる闇夜照らす月を称え、悠久の縁広がる幻想の世界。

その一角にある、人々の憩いの場、『ライジアパーク』。太陽の光が一番高く、強く輝く時分。

その名の通り、中央にある広場には、黒山の人だかりがあった。誰もが一様に固唾を呑み、瞬きなど皆の昔に忘れてしまったかのように。

一人の人物に注目している。

観衆が注目するには、当然理由があった。

それが、見世物であることは勿論の事。

それを行う演者、群衆の中心に立つ人物が。  
思わず行来の中途で立ち尽くすほどに。  
神に造詣されたが美貌を持つ少女だったからだろう。

これから始まる何か暗示するかのように。

その儂い羽撃きを、風との舞を続ける髪色は金。

太陽の光を浴び、それ自体が光を生み出しているかのようであり、

それは持ち主を包むように、元よりやかに靡いていた。

だが、生きてこる証を示すものは、それだけだった。

彼女はあまりに完全に整いすぎていた。  
着ているものも黒を基調とした、陽の下にそぐわないドレス。  
その様は……気高く清廉とした人形であると称されてもおかしく  
ないだろう。

肌は真雪のようになじみ、どこか一点を見つめたままの紫の瞳は。  
その動かぬ表情のせいか、本物の紫水晶……宝石によつて作られ  
ているのではないかと思わせる。

しかし。

その作り物めいた少女の静寂は、少女自らによつて破られた。

「……」

少女は、常人には届かぬほどに小さく何事か呟き、おもむろに、  
滑らかに、両手を広げる。

まさしく、天を抱くようにな。

その、たった一動作だけで。

観衆の感嘆と驚愕の呻きが、波紋のように広がった。

だが、その波も。

突如として少女の頭上に出現した、炎の塊によってかき消される。

例えるなら、小さな太陽。

太陽は、重力から解き放たれたかのようにふわりと浮かび上がり。そのさらに天上にある、本物の太陽と重なり合いつゝにして周囲を照らした。

それは、不思議な光景だった。

たつた今、ここに来たものがそれを見たのなら、  
その炎の向こうに、本物の太陽があることに気がつかないかもしれない。

そんな炎を、少女は表情のないまま見上げ、再び何やら咳く。

するとその瞬間。

まるで、隠された本物の太陽が、燃え盛る嫉妬の炎を発したかのようだ。

少女によつて創り出された炎は爆発、四散した。

重力の縛めから逃れられなくなつたそれは、そのまま地上に降り注ぐ。

真下にいた少女を中心に、周りにいた観衆をも巻き込んで。

驚き焦り、逃げようとする観衆。

その中の真下にいた何人かが、降り注いでくる炎の塊を見上げたまま、全く動じない少女に気付いた。

声にならない叫びが、辺りにいくつも上がる。

もう間に合わない。

この世のものとは思えない美しさを持つた少女が、炎によって無残にも焼かれる様を想像し、顔を覆うものもいた。

だが。

少女は、やさもきする周囲をまるで気にした様子もなく、再び何事か呟いた。

すると、どうしたことだらけ。

それまでただの炎の塊であったものが。

少女に触れる直前で、炎によって造形された鳥に、蝶に、果ては竜の姿を成したのだ。

まわしく、仕えるべきに仕えるように、愛でるように少女を抱き、包み込んで……。

やがて、霞のじとじと消えていった。

後には、炎の熱氣すらも残らない。

ただ、少女が変わらぬ表情のまま、立っている。

再び、訪れるは嵐の前の静けさに等しい、無音の世界。  
一瞬の膠着。

しかしその静寂は、いつの間にそこへ立っていたのか、少女の傍、従えるよつとして立つ、一人の老人によつて破られた。

「とまあ、魔術を極めれば、自ら創り出した『魔導人形』でさえ、ここまでできるといふことだ。この意味、理解したかな？」

いや、いつの間にではない。老人は最初からそこにいた。初めからそこにいて、目の前にいる少女に、命を下していたのだ。

「……」「苦労。下がつてよいぞ」

老人がそう言つと、やはり少女は表情を変えぬままに、それでいて氣品のある、作り物とは思えない動作で一礼する。

そして、陽炎のように少女の輪郭がぶれたかと思つと。

そこには最初から誰もいなかつたかのように。風に流されるようにして、少女は忽然と、その姿を消した。

「魔法の教義、魔道の資格を欲する諸君。ご用命は、我がカムラル魔法教会まで」

老人がそう締めたその後に。

驚愕と賞賛のどよめきが起るのは、最早定められしもの、だつたのかもしねい……。

(第2話につづく)

## 2、素顔で笑つて いたい

広場での出し物の盛況振りが窺える、広場から建物を挟んだ裏路地。

そこに、さつきまでその中心にいた人物、陽炎のように姿を消したはずの、少女がいた。

「あーあ。また何人騙される」とやう

いや、消えた少女ではないのかもしれない。  
そう思つほどに、先程の見世物の時と、雰囲気ががらりと変わつてこる。

「あー、暑かつた」

苦笑してひとつ、「かる」と、少女はおもむろに、金の髪に触れる。  
どうやらそれは、かつらだつたらしい。  
その中から、長年太陽の陽の下で育まれたかのように瑞々しい、  
栗色の髪がこぼれる。

いや、よくよく見ると、押し込まれるよつて手に纏められて  
いる長い長いその髪は、  
他にも金に紅……三つの色が映えるのがわかる。

それは、彼女が特別にして希少な人物であることを、如実に表している。

同時に、彼女が目を背ける、世界の秘密。世界の礎となる、消せない証拠でもあった。

「いてて、これ苦手なんだよな、外すの」

竹を割つたような、聞くだけでも『やんけや』とこゝに言葉が似合つ、それでも高く甘い声で咳き。

続いて瞳から取り出したのは、紫色一色の薄っぺらい硝子だった。

今まで隠されていた本当の瞳は真の赤色。  
紅髓玉カーネリアンと呼ばれる光輝を宿している。

どうやら先程は変装をし、無機質だが美しい『魔道人形』を演じていたらしい。

今の状態を、見世物の観衆が見たら別人と思えるほど、変わっていた。

変わらないのは、髪と紙一重の、身の毛のよだつ美しさだらうか。

むしろ先程まで演じていた姿より、危うく髪く見えてしまう。

「わて、帰つかな。じつせじいちゃんは入会の手続きで忙しいだ  
らしぃな」

蓮つ葉とも取れる口調で、ひと伸び。

もう、完全にいつもの姿、である。

名はカズ。カズ・カムラル。

『ヨーライジアスクール』を纏める四大勢力の一つ、カムラル家の、たつた一人の跡取り。

このお話は。

その心内に、自身ですら目を逸らし、拒絶する秘密を抱える、カズ・カムラルの生の一片である……。

物語の舞台、ヨーライジアの世界は、世界を司る十一の意思ある根源の力を借り、

媒介として様々な奇跡を起こす、所謂『魔法』と呼ばれるものが定着している世界だ。

ヨーライジアの世界にある四つの大陸。

その一つである、世界そのものと同じ名を冠するヨーライジア大陸には、

そんな魔法、十二の根源に密接に関係する世界と共に存するための

教義の施設、

『ゴーライジアスクール』と呼ばれるものがあった。

ゴーライジアの世界におけるスクールとは、国と同義であり、世界に散らばる諸国家と同等に扱われている。

カムラル魔法教会は、国としてのスクールへの発言権を持つているが、教義の場として見れば、スクールを補助する（有料で）機関もある。

教会専門の建物もあり、多くの会員を抱えるが。

カズ自身は、育ての親であり、祖父であるカムラル老しか身よりはなかつた。

教会の運営に、国の政にと大忙しのカムラル老。

おかげで家計は潤つているどころか、いつも火の車で。

『リトクラス』（スクールにおける最小学級）に入学したてのカズ自身ですら、じつして働きに出る始末。

まあ、半分詐欺めいたところのある仕事だが。

カムラル老の元で魔法を身につけ、高めていくことは、この世界で生きていくことにおいて損はないだろうと、カズは思つてゐる。

「でもなあ」

それでも、カズはぼやく。

カムラル老は、子供のカズから見ても立派な人物だった。家にお金が入ってこないのも、国を支えるために使っているのだと理解しているし、

偉いことだつて分かつている。

こうして仕事の手伝いをすることだつて嫌じやない。

なのにぼやくのは、

カズが、昔のもつと『カツコいいじいちゃん』のことを知つてしまつて、

物足りなく感じているからだろう。

ユーライジアスクール元町にある、冒険者ギルドに所属していた有名な冒険者。

弱気を助け、決して力にこじりることのない、『夜を駆けるもの』。みんなに尊敬されていた、カツコいいじいちゃん。

それなのに、カズはその生き様を、カムラル老本人から聞かされたことは一度もなかつた。

知つたのは、スクールの図書館に所蔵されている過去の新聞を見て、だつた。

カズにはそれがもどかしくて、悲しかつた。

カムラル老の教えてくれることと言えば、日常の生き方や魔法のことばかり。

まあ、それでも。

カズは魔法を覚えるのも勉強するのも大好きで。

両親のいない自分をここまで愛情を持って育ててくれたこと、力  
ズはちゃんと分かってほしい。

愛情云々については、分からざるを得なかつた……やつまつべき  
なのかもしれないけれど。

(第3話ひつじ)

### 3、resistance～マケナイキモノ

カズのたつた一人の家族、カムラル老の偏愛。

カズ自身がそれにはつきり気付かされたのは、

半年ほど前の、コーライジアスクールへと正式に入学した日の事だつた。

カズが入ったのは風組。ヴァタガスト

普通なら、男女一組となつて机を共有するはずが、  
カズの隣は、何が楽しいのか、カズを見て笑顔を絶やさない、の  
ほほん、とした少年だった。

これだけなら、人數が合わなくてあぶれたのだろうと納得できた  
のかも知れない。

だが、カムラル老に、学校へ行くときはこれ以外着てはいけないと、

きつく言われたスクールの制服なのに、他の男子生徒が誰一人そ  
れを着ていなくて。

逆に女子生徒たちが自分と同じものを着ていれば、さすがにおか  
しいと、カズは思った。

そして、そのおかしさを確信したのは、当時（今もだが）クラス  
の誰よりも小さくて、

一番前に座っていたカズに向かって、教壇に立った先生が、  
『ほな、女の子のほうから、自己紹介しよか』なんて、言った  
瞬間だった。

どうやら自分は、女だと思われているらしいと気付いたのはその時。

故にカズは叫んだ。

『オレは男だーっ!』と。

力の限り。

自身で田を背けている嫌な事から、真っ向から対立するために。

クラスじゅうに響いたその声は、ある意味自己紹介のつかみとしては、つまくいっていたのかもしれない。

しかし、カズが未だにその日のことを忘れないのは、それからが酷かつたからだ。

何せ、せっかく『自分は男だ』と宣言したのにも関わらず、その事を先生ですら信じてくれない。

カズの哀れなほど必死な叫びは、冗談か何かだと受け取られたらしい。

だが、先生は悪くないのだろう。

悪いのは、カズに日頃から女物の服ばかり与えていたカムラル老

いや、そのことにすら気付かなかつたカズ自身が愚かだつたのだ。

今は、カムラル老が自分を娘として扱つてゐる理由を知つてゐるから、

まあ仕方ないと自分を納得させているカズであつたが。

その頃のカズは、『魔法を扱う以上、スカート着用が当たり前』なんていうカムラル老の言葉を本氣で信じていたからいただけない。

女子生徒の制服を着てきてしまつた（というか、それしか持つていなかつた）カズは、

自分で『男だ』つて宣言すればするほどドツボにはまつていつて

……。

(今思えば、よくぐれなかつたよなあ、オレつてば)

それからまだ数ヶ月ほどしか経つていないが、そう内心で呟き、苦笑するカズ。

そんな事を考えながら歩いていたり、カズは気付けば我が家へと帰つてきていた。

まず目に入るのは、炎の根源魔精靈、【カムラル】を表わす巨大な『三角架』を掲げる、  
莊厳な建物。

ヨーライジアの世界各地に散らばる、カムラルを祭る教会の総本山と呼ぶべき場所だけあって、

敬虔なる豪邸と称するにふさわしい建物である。

だが、その目の前にある建物は、カズの暮らす家ではない。カズがカムラル老と暮らす家は、その建物に覆いかぶさるよつこ、隠れるように、

ひとつそりと立つ小さな家である。

「思つたより早いな。相当釣れてるんだな。着替えたかつたんだけど、出直してくれか」

だが、その家に入るための入り口は、一つしかなく。よつて、家に帰るということは、目の前の巨大な建物の前を通過していかなくてはならない。

しかし今は、先程の勧誘を見て、カムラル老に教えを請おうと集まつた人がたくさんいた。

カズは、せめて入会料をふんだぐるまでは会員候補生たちにネタをバラすなど言われている。

つまり、未だかつてなしえたことのない、自らの意思を持つて魔法を扱う魔道人形のふりをしていなければならず、ここで姿を見せてしまえば元も子もないの……

結局家にも帰れず、ドレスのままの格好で、時間を潰さなくては

ならなかつた。

カズは、忙しそうにしているカムラル老を見て、複雑そうな笑みを浮かべ、踵を返す。

それは、そんな言葉さえ建前なのだと、カズは心のどこかで気付いていたからなのかもしれない。

現に、カムラル教会の会員の人達で、勧誘の時のネタを知る事となつても、

騙された、という感じで辞めていく人など、まずいからだ。

むしろ、会員たちは、カズの正体を知つてもなお、より可愛がってくれる。

それは、カズがカムラル家に残された唯一の跡取りだということもあるだろうけど。

カズは、そうやつて大勢の人たちにちやほやされたりするのが、ちょっと苦手だった。

他の国で当てはめれば『王族』という身分の同位置にいるのだが、そんな性格もあつて、本来なら据えるべき世話係もカズにはいなかつた。

身の回りのことは自分でやつてきた。

それは、カズなりのせめてもの自己主張だったのかもしれない。

それが、自身で自身の秘密を暴かぬようにと、無意識に行つていふことなどとは、知る由もなく。

大切にされているのも、愛されていることも、もちろんカズにとって悪い気分ではなかつたが。

その実、カムラル老は本当の自分を見ていないんじゃないかつて、カズは思つていた。

どうやらカズは、カムラル老にとつての妻と、その娘にとても似ているらしいのだ。

彼女たちがカズにとつて本当の親であるのならば。  
それは似ていて当然ではあるのだが。

自分を通して、今はもうない大切な人たちを見ているんだらうつて、

幼いながらも聰いところのあるカズは、とっくに気が付いていた。

故に、ささやかに抵抗する。自身の身分を傘に着ず、『姫』であることに抵抗する。

だが、はつきり拒絶しなかつたのは。

それによつて自分を見てくれなくなるんじやないかつて、恐怖心があつたからに他ならない。

きつとカズが、自分を強く主張しようと、カムラル老がカズを見捨てるなんてことはないのだらう。

だが、両親を知らない、存在するかどうかも分からぬカズにとつては、

そう思つても仕方のことなのかもしけなかつた。

そんな事情もあって。カズは暇つぶしの時間つぶしのために、ヨーライジアの街中へ戻ったのはいいのだが。

その姿は、とにかく目立つて仕方がないので、自然と人で賑わつた出店通りには向かわず。

人気の少ない、所謂カズ達王族が住み暮らすような、高級住宅街へと足を向けることにしたのだった……。

(第4話につづく)

## 4、RUSH&amp;DASH！

それからすぐにカズが辿り着いたのは。

背の高い、白磁のアーチ……門構えが備え付けてある、コーライジアスクールの『校門』。

スクールの入り口はいくつもあるが、その間には内外を遮断する天高い壁が伝わっている。

コーライジアの世界で一番の敷地面積を誇るといわれるコーライジアスクールは、

十年経っても全ての場所を知ることはできないんじゃないかと思えるくらいに広い。

カムラル魔法教会も、建物としては相当の大きさだが、  
コーライジア大陸三分の一が、コーライジアスクールのいわゆる  
国土であるから、  
そもそも規模が違う。

現在はこの校門をぐぐり、広大な『グラウンド』に囲まれた中央通り抜けた先に、

各所へと瞬時に移動できる【虹泉】<sup>トランペルゲート</sup>と呼ばれる、  
【金】属性の魔法装置があることで、危険は減ってきているのだが。

コーライジアスクールの敷地内、特に建物を覆うようにしてあるグラウンドには、

野生の獣だけでなく、魔物や魔精靈まで普通にそこに暮らしてお  
り、自然に近い場所でもあつて。

一昔は、課外授業で遭難、行方不明、なんてことも頻繁に起つ  
ていた。

だが、カズにはそんな情報は……興味を引かれる、ということ以  
外の何物でもなかつた。

何故ならカズは、冒険が好きで、未知なる物を知ることが大好き  
だつたからだ。

魔法が大好きなのも、その探求には終わりがないからだし、  
ギルドで『夜を駆けるもの』として活躍したカムラル老に憧れる  
のにも、そんな理由がある。

今は、この巨大すぎる箱庭での冒険がせいぜいではあるが。  
いつか、仲間とともに冒険の旅に出たい。

それが、カズの夢だった。

今はまだ、年齢的にも立場的にも、それが叶うべくもないことは、  
分かつっていたが。

「う、トールの白ネコだ」

今日はどこに行こうか……カズがそんな事を考えていると。  
ふいに、絹のような毛並みの、尻尾の先だけの茶色と、同じ色の  
靴下を履いているのが特徴的な、

小さな白い猫が、虹泉の虹色の渦から飛び出してきた。

首輪をしてはいないが、それが野生のものではないことをカズは知っている。

スクールに入つてからできた友達のひとり、トール・ガイゼルといつも一緒にいる

(どうやら飼い主ではないらしい) 猫で、名をヨースと言つた。

普通の獣が、虹泉から出でることなんてまずありえないことなので、それが何なのか分かるくらいに賢いのか、はたまたトールに従う【魔精靈】なんじやないかなあと、カズは思つている。

「……にやつ？　にやーにやーにやーっ！」

と、カズの呴きはヨースにも届いたらしい。はつと顔をあげたヨースは、まっしぐらにだだだだとカズの元へと向かってきた。

「どうわわあつ！　ど、どうかしたのか？」

カズは、ヨースを何とか両手で受け止める。子猫でまだ小さくて、ふかふかで柔らかくて、抱き心地がよくて。普通ならカズでなくても顔が緩んでしまつところなのだが。カズは実の所、ヨースが苦手だった。

それこそが、魔精靈かも、と思つた理由の一つなのだが。

ほんの僅かに、カズの苦手な……【光】の魔力をヨースは発しているのである。

いきなりで、過剰な反応をしてしまったのはそのためなのだが。

当のヨースは、内心びびつているカズにお構いなしでカズを見上げ、ふんふんと鼻先を近づけてきた。

無意識にのけぞりつつヨースをかわそうとするカズ。ざらざらとしてそうな、舌先が覗く。

「……っ！」

ぞわわ、全身が総毛立ち、思わずカズが、息を呑んだその瞬間。

「おい、馬鹿ヨースっ！　お前いきなり飛び出してつたと思ったら、なにしてんだよ！」

「わわっ」

まるで奪い取るかのように、ヨースを搔つ攫われて。

カズはよろけてそのままヨースと一緒になつて、奪い取ったツンツン頭の少年……

トール・ガイゼルの方に倒れこんでしまった。

ぼふつと、分厚い胸板の感触。

「な、なんだよつ。こきなりひつぱんなよ、トール！」

内心助かつたような気はしないでもないけれど。

カズはそれをおぐびにも出さず、同じ年のくせにでかすぎなんだよ、とばかりに悔しがり、

頭一つ三つぶん背の高いトールを見上げつつも睨み付ける。

その鍛えられた肉体は、とても同じリトルクラスに入りたての子供とは思えない体格をしていた。

いくら鍛錬しても筋肉がつかない自分と比較して、ちょっと歯がゆい気分になるカズである。

「ほんとは可愛らしい顔して危険なやつなんだって、いつもこいつてるだろ」

すると、トールは怒ったようにそう呟き、カズの頭をむんざと掴む。

そしてそのままぽいつと放られる。

「てめつ、ちよつとでかいからつてものあつかいすんなよつー。」

「カズが小さすぎるんだよ、ちゃんと飯食つてんのか？」

見上げている時点で、ちょっとぴり負けた気分に陥りつつ、そう抗議すると。

真っ直ぐ芯の通った黒い瞳で、少しも視線を逸らさず、トールはそんな事をのたまひ、

かと思つたらわしゃわしゃと髪をかき混ぜてくる。

「な、何すんだつー！』のつ、ちょっとでかいからつて調子にのつてー！」

それは、どうやらトールの癖らしい。

きつとトールにとってカズは、ヨースと似たようなものなのだろう。

王族の、しかも決して認めたくない『姫』に対する接し方は微塵も感じさせない。

視線を外さないこと一つとっても。

彼はカズにとって、貴重な存在であるのは確かだった。

(第5話につづく)

## 5、いたずらに命をかけて

それは、数ヶ月前、スクール入学したての頃の話。

出会ったばかりの頃、トールに対するカズは怯えてばかりだった。こう、なんていうか触つたら怪我しそうなナイフのようというか、攻撃的な力が滲み出でていたからだ。

何が気に入らないのか、いつもむすっとしていたのもカズに一步引かせた理由になったかもしれない。

最も、今となってはトールに対するカズの心情は純粹に友情から来る親愛である。

髪をかきませられるなど、それこそ日常茶飯事ではあるが。同じ事をカズにとって特別な存在にされたものならば、ここまで平常心でいられることはなかつたに違いない。

……そんな『どうしようもない』事をつい考えてしまつ自分をすぐさま否定し、

カズはぐわんぐわん振り回された事に目を回しつつも抗議していくと、ぴたつとその動きが止まる。

「うん、あんまいじめると泣くからやめとくか」  
「だれが泣くか……ふぐむっー」  
「おお～、のびるのびる」

やめておくか、何て言い終わるが早く、トールの手はカズの両頬を掴んでいた。

カズの涙腺が弱いのを知つていて、嫌がらせである。

実はその行為はトールの生命的な意味合いで危険を孕んでいるのだが。

トール自身もそれを分かつていてからかつてているので、それだけでも彼の豪胆さが伺えるというものだろう。

「ほら、泣いてんじやん」

「う、うむせーっ、ひきょうだぞーっ、バーク、バーク、バーク

！」

これでコーライジアの王子の一人、なんだか信じられねえと、自分を棚に上げながらカズが涙目で抗議すると。

「いや……いやいやん」「やな、いやーん？」

気付けばトールの肩にいたヨースが、なんだか不満そうな、呆れたような声をあげる。

「う……分かってるよ。だつてカズってからかうと面白くってさ」

「いや、いやにやにやーん？」

「馬鹿、そんなんじゃねーよっ！」

「ううううトールにはヨースの猫語？ が分かるうし」

その、通じ合つてる様を、ちょっとカズが羨ましく思つてゐるど。

トールは何かを思い出しかのように、再びカズに向き直つた。

「あ、そうだよ。こんなことしてゐる場合じゃないんだって。カズさ、タカのこと、見なかつたか?」 「タカ? いや、だつて今來たばかりだし」

話題に上つたタカこと、タカ・セザールは。  
『ここ』とは別の大陸にある、ユーライジアスクールの姉妹校、『ラルシータスクール』の長である、  
ルレイン・セザールの息子である。

しかしタカは、現在ユーライジアスクールに通つていて。  
カズにとつてはトールと同じく、ある人物に紹介され、知り合つた友達の一人だった。

ちなみにトールは、カズと同じユーライジア四王家のひとつ、ガイゼル家の一人息子で。

そんなタカやカズと立場的には同じではあるのだが。

ガイゼル家は代々、この人と決めた主君に仕えることを良しとする古い一族で、

トールはタカのことを主君と決めていたりする。

二人は確か今日、ユーライジアの先生の元で、厳しい訓練の最中だつたはずなのだが。

「タカが修行ぶつちするなんてめずらしいじゃん。何かあつたのか？」

タカは、『ルナカーナ・スピア』と言ひ、いつか現れるであろう巨悪を討つ、とまで謳われる伝説の武器に見合う人間になるために、物心つく前から、それは厳しい修行を続けていた。

ヨーライジアスクールよりも、より実践的なラルシータスクールの『授業行程』カリキュラムを、既に終えてしまっているすごい奴。カズは、そう認識していた。

王族らしくない、年相応の子供っぽい少年だが、トール以上に曲がったことが大嫌いな真っ直ぐな少年で、更に『クラス委員』をなども務めていて。何の理由もなしにそういうた修行を投げ出す人物ではないはずなのだが。

「俺もまだよく知らないんだけどさ、時々あるんだと、こういうこと。

先生が言つには、お母さんを失つた時のことを思い出して、精神が不安定な状態になつてゐるらしい。それで、休憩の時、田を離したらどうかいつちまつて、探したんだけど、みつかなくてさ……」

別にトールのせいではないのだろ？が。

言つて、何だか落ち込んだ様子を見せるトル。

その相手を思つ様は、とても出会つたばかりの頃の険悪さを微塵も感じさせない。

「そつか。それじゃ、オレもさがすの手伝おうか?」

タ力の母親が、「この世にいないうらじ」とは、カズも知っていた。カズも似たような境遇ではあるし、この世界では珍しくないことではある。

故にちょっとはその気持ちも分かるかもしねないと、カズはそう思ったのだ。

「ああ、頼むよ。よく考えたら……俺が見つけるより、いいかもしないしな」

トルにもそれは伝わったらしい。

すぐに、一緒に探すことが決定し、一手に別れ、違う場所へと向かう虹泉へと入り込んでゆく……。

## 6、さよならの記憶

スクールは、とにかく広すぎる場所だった。  
故に今日中には見つからないかもしないな、なんてカズは考えていたのだが。

そんな思惑とは裏腹に、奇跡的とも思える確率で……タカはすぐにつかつた。

### 第三十八中庭。

大きな木の影に寄りかかるよつにしてしゃがみ込み、大きなスピアを抱え込んで、  
うつむいている金髪の少年の姿から、寂しそうで、<sup>くら</sup>昏い、  
どんよりとした空気が伝わってくるのがわかる。

クラスの優等生。希代の天才児。みんなのまとめ役。  
早くもそういう立ち位置を築いていたタカからは、想像もつかなかつた姿である。

もしかしたら、泣いているかも知れない。  
何度も死にかけるほど厳しい修行ですから、弱音一つはかないタ  
カ。

でも、それは表向きのもので……本当はいつだって苦しかつたの  
かも知れない。

だからカズは、そんなタカを見ていられなくなつて、氣づけば声をかけていた。

「タカ？ そんなどこでなにしてんだ？」

「……つ。あ、カズか。いや、ちょっとな。休憩、休憩」

カズの声にはつとなり、『じごじ』こと西田をこすり、赤くなつた銀色の瞳を向けてくる。

口元には笑みを浮かべているが、どうにもぎこちなかつた。

「……だいじょぶか？」

「うん。まあな。悪い。かつこわりいな、俺」

氣を取り直すよつに立ち上がるタカだが、その足取りはおぼつかなく、

バツの悪そうな顔をしている。

やなどこ見られちゃつたな、とでも言つよう。

「お母さんのこと、思い出したんだつて？」

それでもカズはすぐさまそう訊いた。

もう一人の大好きな男友達に対する、純粋な心配。

それが涙など流したことすらなさそうに見える友達とも呼びたく

ない『あいつ』ならば。

多分自分はもつと愚かなほどに取り乱しているのだひつ、なんて  
思いながら。

「……よく、分からぬいんだ。今だつて、母さんが死んだ時の事  
すら、俺は思い出せない。  
でもさ、思い出そうとする、すぐ悲しくなつてくれる。何でだ  
ろ？ わけわからねえや」

「……」

聞くことに躊躇いのないカズに対し、タカは、それにちよつと苦笑  
していたが。

少し考えた後、そんな事を呟いた。

よつほど辛い記憶、なのだひつ。  
そうやって、自分で思い出せなくなるへりこには。

「そつか。…………でもま、オレよりはマシじやねえの？  
オレなんて、両親のこと、これっぽつけも思い出せない。悲しい  
記憶すらないからな」

言い方はおかしいかもしけないが、ちょっと羨ましいとも思うカ  
ズである。

自分には、そう思つ思つ出さらない。  
存在しているかどうかさえ、怪しいものなのだ。

何故ならカズは、『虹泉の迷い子』、なのだから。

そんな自嘲めいたカズの言葉を、タカはどう受け取ったのだろう。

「……ごめん」

「な、なんでタカがあやまるんだよ」

突然そう言つて頭を下げるタカに、カズはちょっとうるたえる。ますます落ち込むような仕草を見せるタカに、カズは頭をかいて。

「ああ、もうー。タカにはそういう暗いのは似合わないって。よし、オレと勝負しろ！  
もやもやの発散、つてやつだ」「え、ええ？」

特に考えたわけでもなく、トールがいつも口癖のようにタカにそんな事を言つていたから、真似して口をついて出た言葉にて、タカも驚きの声をあげる。

「そんな、危ないって！」  
「なんだこりゃ。オレ程度じゃよわづちくで、相手にもなんねえつてか？」  
「いや。そういうわけじゃないけどさ。女の子に手をあげるみたいで、『気が引けるんだよな』  
「……よく言つたあ。その言葉、後悔させへやるー。」

きっとその会話は、予定調和、だつたのだろう。

「おいおい。何してるかと思つたら……」

だから、しばらくしてトルが駆けつけた時。  
お互いぼろぼろで、喧嘩の後みたいな大の字になつて寝こけている  
その光景も。

結果として当たり前にあるべきもの、だつたのかもしれないが、なかつた

……。

それから。

虹泉のある場所で、帰る方向の違うタカと別れ、  
いつの間にかいなくなつてたヨースを気にかけていたら。  
ほっぽつといて大丈夫だ、猫なんだから……なんて言われ。

カズはトールとともに、家路についていた。

トールの家は、コーライジアの町外れにある、大きな大きな樹のある庭付きの、

古いだけあって歴史を感じさせる、ガイゼル式の武家屋敷で。

古い骨董品（金田のもの）がたくさんあり、そういうものが大好きなカズにとって、

来て見て楽しい場所もある。

「おい、いつまでついてくるつもりだよ。言つとくけど、もう家にあるものはやらねーからな」

「なんでだよ、けち、とへんぼくー！」

「なんでだよって、お前に前の前、やつた小太刀、武器屋に売ったる」

「うひ、それは……」

なんだか本氣で立腹な様子のトール。

だが、試しにこぐらで売れるか武器屋に掛け合つてみて、ぶつたまげるほどの値段をつけられ、目がくらんだ、などと言ふはずもなく。

「べ、べつにいいじやん。もうつたオレの自由だろ？」

「いくねーっての。おかげで親父に怒られて買い戻すはめになつたんだからな！」

「い？ そうなの？ そりゃ悪いことしたな。トールのおじさん、こわそだもんなあ。

……オレ、謝つといたほうが、いいか？」

親父という存在がカズの中にはないからなのかなんなのか。  
一度会つたことのあるトールの父親は、毛むくじらの、例える  
なら百獸の王みたいな感じで、  
ちょっとびり怖かった印象があった。  
故にちょっと反省してカズがそう言つと。

「……いや、いって。親父はカズのこと怒つたわけじゃないし」「うなのか？」

「うん、よく分かんねーけど、俺のガイージョとやらがないのが悪いらしい」

「がいーじょ？ なんだそれ？」

「俺もちゃんとは教えてもらつてないんだよな。勇者になるためには不可欠だ、とか言つてたけど」「……ふーん。じゃあ、トルが悪いってことで全て解決？」

「なわけねーだろ？、おかげで三ヶ月ごづかいしなんだぞ、金返せっ！」

さりげなく流すつもりだったが、さすがにトールもそこは捨て置けないらしい。

しかし、そのお金は欲しかった魔術教本で消えてしまつたなどとはやつぱり今更言えるはずもなく。

「……いいじゃん。うづかいくひ。その日の飯に困つてゐるわけじゃないだろ？」

なんて、誤魔化してみたりした。

その言葉と仕草が、相手にどんな影響を与えるのか、なんて一切気付くこともなく。

すると。

「あー そうだな。……つん」

単純な？ トールは効果観面。あっけなく騙されてくれる。  
こいつ、こんな単純でこの先の人生大丈夫か？  
なんて余計なことを考えてみたりするカズだったが。

そこが気のおけない友人として気に入っている所だと言つのも、  
また事実で。

「ま、勝手に売っちゃったのはわるかったよ。むりしないよう  
する」

「ああ、そうしてくれ」

「うん。よく考えたら、トールにもらつた剣売るより、トールの  
おじづかいたかつたほうが早いもんな」

「そうそう……つて、さてよー。なんだそれは、どうしてそ  
なる？」

カズがからかうよつと、上田遣いそう言つと。

案の定、単純なトールは言葉通り受け取つて怒り出すから。

そんなトールに、どこか安心しながらも。  
お金、そのうち返してやるが、なんてカズは考えるのだった……。

(第七話につづく)

## 7、君は歌つてくれた

絶対やらねーからな！ と、卵を守る親鳥の「」とく威嚇してくるトールに。

でも頼めばくれるのかなーなんて苦笑しつつ。  
カズはトールを家に送り届ける形で、今度は自らの家へと踵を返す。

別にわざわざ送らなくちゃいけないようなタマではないけれど。そもそもカズも、暇つぶしでトールについていったわけなので、まあ、当初の目的は達成した、と言えるだろう。

「さて、そろそろいいだろ？」

今や、夕日の色は深い橙を携え、カズは自分の好きな時間帯がやつてきてこることを実感する。

逢魔が刻。

カズの想像しえない何かが起きてもおかしくない、そんな時間帯。

その、何かが起こるかもしれない、という期待のせいなのか。この時間帯になると、気分が高揚してくるカズである。

どんな些細なことも見逃さぬよう」と、自然と神経が研ぎ澄まされていくのが分かるのが、

また面白かった。

「……あ」

と、その瞬間。そんなカズが待ち望んでいたもの。  
びゅうと吹く夏の始まりの生温かい風の中に、  
風音とは異なるもの……歌が聞こえた気がして、立ち止まる。

いや、気がした、ではない。

間違いなく、その歌は、風の中に潜んでいる。  
何故ならそこに、魔力の息吹を感じたからだ。

生まれつき、人より魔力の感知能力が高いカズにとって、  
それを嗅ぎ取るのは造作もないことだつただろう。

しかし、それをつぶさに感じられたのは、その歌を、声を、【風】  
の魔力を、

カズが魂に刻むがごとく、知っているからに他ならない。

何においても特別であつたからに他ならない。

現にカズの鼓動は、それを聞いたとたん早鐘を打ち、  
心は何か暖かいものに包まれたかのように、すでに捕らわれてい  
た。

カズは夕闇の中、引き寄せられるように、逃さぬよつこ、それに向かつて走り出す。

やがて辿りついたのは、涼しげな草花の香る、ある家の庭先だつた。

カズはその家を知つてゐる。

その歌を知つてゐると同じように。

庭先で気持ち良さそうに歌つてゐる、一見どこにもいそうな、それでいて、絶対無二の神の声を持つその少年のことを、よく知つてゐるのと同じように。

少年……マーサー・ヴァーレストは。

カズがユーライジアスクールに入つて、初めて仲良くなつた少年だつた。

『男だ』なんて宣言しながらも、たくさんの友達ができたのも彼のおかげだし、

カムラル老に騙されぐれかけたカズを、カズ・カムラル一個人として、

初めて認めてくれた人物でもある。

初めてのクラスで、隣で楽しそうに笑つていた少年。

少年にとつても、カズにとつても、そこが初対面ではなかつたせ

いもあるだろ?」<sup>ナビ</sup>。

クラスの誰一人、『男である』と言つカズの言葉を信じてくれない中で、

少年だけは既に、カズの内面そのものを見ているような節があつた。

「カズは面白そつだし、カズの隣がいいな」

少年自身は少年の誇りを取り戻す、という理由もあつただろ? し、何気なく言つた一言だったのだろ?。

だが、そんな何気ない一言がカズを救つたこと、おそらく彼は知らない。

カズはカズのままでいい。

そう言われたような気がして。

少年がカズに興味を持つように。

カズが少年、マーサーに興味を持つのに、そして時間はからなかつた。

それが……いずれカズ自身を追い込む事にならうことなど、知る由もなく。

「おーい、カズ? カズつてば。また氣絶しちゃったの?」  
「へ? あ、あれ?」

深く考えすぎていたせいか。

気づけばマーサーの歌は終わっていて。

泣き顔なんて想像すらできない『へらへらした』笑顔の、カズより頭一つ分くらい背の高い少年が、カズの目の前でひらひらと両手を振っていた。

「だああーっ、またかよつ。やめろつってんだろー。なんなんだよ、お前の歌はつ。いつのまにか吸い寄せられてるしつー！」

我に返ったカズは、早くなる鼓動と熱を帯びる頬を必死で誤魔化しつつ、そうはいくか、とばかりにじばつと聞合を取り、目の前の少年を威嚇する。

これで何度目だろうか。

数えるのも億劫なくらい、その歌に引き寄せられてしまふ自分に、カズは戸惑いを隠せなかつた。

おそらく、セイレーンとか人魚とか、そういうつた類のものが使う、依存性、常習性のある歌と同じものなのだろうし、その歌が、『風』<sup>ヴァーレスト</sup>の根源魔精靈から派生した、【音系】<sup>サウンド</sup>という魔法の中の一つであるだろうことは、分かつている。

カズが元々その属性に極端に弱いたち（実は体に合わない苦手な属性が多い）なのかななんのか、

「ひして、いつでもどこでも、あつとつらわれてしまつのだ。

だから、むやみに歌うんじゃねえと、きつく言い聞かせたいのに。目の前の、何が嬉しいのか笑顔を絶やさない少年は、一向にのれんに腕押し状態で。

「あ、よかつた。氣絶してたわけじゃないんだね。これで僕の勝ち、かな？」

案の定、話を聞いているのかいないのか、勢いの殺がれる自分本位な笑みを向けてくる。

「いちこが根に持つやつだな。もう大丈夫だつて。まだ憶えてんのかよそんなこと」「もちろんだよ。こんな屈辱生まれて初めてだ、ってやつだからね」

「言葉の使い方、間違つてる気、するけどな

呆れたようにカズはそう言つが。

言われてみればマーサーの言つていることは遠からず近からずだなあと、カズは考える。

もちろんカズだって、その時のこと一度たりとも忘れたことはない。

言わせてもうらぶるなら、カズにとつても面倒、とこつてもここの  
かもしれない。

それは、マーサーとの初めての出合この日のことだ……。会つなり  
氣絶させられてしまったのだから。

(第8話につづく)

## 8、getting started

それは、カズがコーライジアスクールに入学する少し前の日。

ふと入学前に学び舎が見たくなったカズは、カムラル老の目を盗み、コーライジアスクールの探検に出でいた。

そうして、何気なく訪れた中庭。

そこにマーサーがいた。

今みたいに歌を歌つていて。

手を伸ばせば届きそうな位置で、カズは無防備にもその声を聞いてしまった。

……後で聞いた話によると、それは『光<sup>セザール</sup>』属性に類する、【ヴァルサド・ボードウェル】と言つ名の、正真正銘の音系の魔法<sup>サウンド</sup>で。

入学前の子供に扱えるはずのない、弱いアンデッド等なら一撃で消し去ってしまうようなものだつたらしく。

マーサー曰く、『一節もいかないうちに、泡吹いてばたりと倒れたのが、あまりにも面白くて大笑いした』らしい。

後でそう言われたカズは、もちろん殺意てんこもり芽生えて。『火』<sup>カムラル</sup>の魔精靈と親密なる抱擁の刑に処してやつたわけなのだが。

その時の衝撃は、とにかく物凄かつたとカズは記憶している。全身の毛といふ毛が総毛立つは、涙は鼻水は止まらないわざんざんで。

心失するほど強い衝撃を受けたのに。激しく氣分が高揚して、嬉しいのやら楽しいのやら、くすぐったいのやら、カズにはよく分からぬ……でも、もう一度聞きたいと思えるような、でもそつ思ひひとと自体が悔しいやらもじかしい気持ちでいっぱいになつて。

気付けばカズは、マーサーを見れば、足蹟のひとつもしたくなるような、

そんなわけの分からぬ感情に捕らわれていたのだ。

故にムカつくし、歌うな！ と常々思つてゐるのだが。

その一方で。

内心、しょうがないかなあ、なんて気持ちになる自分に、

いつもカズは首をかしげるしかなかった。

それが何を意味しているかなんて、気づかないふりをしたままで。

ひとしきり笑ったマーサーは。  
それからうんともすんとも動こうとしないカズに、たいそう慌て  
たらしい。

勝手に忍び込んだスクールの中で（それはカズも同じだから人の  
ことは言えないが）、  
人を殺してしまった、なんて思つたらしいから、  
いくら能天氣そうなやつとはいえ、その時の心中お察しする、と  
言つ感じである。

しかも、彼にとつての歌は、彼にとつての誇りそのものだつた。  
自分の歌は全てものを癒し、心を穏やかにする、  
なんて、子供のくせに変な自尊心を持つていたようだ。

カズがそれから目を覚ました時、  
(マーサーが運んでくれたらしく、スクールの『保健室』に寝かさ  
れていた)

笑顔で顔を覗き込んできたマーサーに、『この借りは必ず返すからね～』なんていきなりわけの分からぬことを言われ。

それから入学式があつて、お互いの名前を知つて。初めてのクラスでひと悶着あつて。  
なんだか一緒にいる時間がが多くなつて今に至る、というわけである。

「でも、僕、あの時すつしぐ怒られたんだよ?」

確かにそれはそうなのだろう。

これもカズは後で知つたわけだが。

そんなマーサーも、ヨーライジア四王家の一つ、ヴァーレスト家の長男であり、

相手も四王家の人物だと知つて、下手すれば国家問題になりかねないと、

マーサー自身散々絞られたといつのは聞いていた。

「オレだってそうだよ。まあ、おかげでお前と仲良くなれたようなもんだし、いいんじゃねーの」「それは……そうだね、うん

たとえ傷つけたことの償いか何かだったとはいえ、おかげでカズは救われたのだ。

マーサーにとつてはなんてことはないのかもしれない。  
でもカズにとつては大事で、同じくらいの気持ちがあるかどうかはカズには分からぬけれど。

マーサーがそうやつて頷いてくれるから、なんだかそれだけで一日がよかつたな、

なんて気持ちになるカズである。

「ところで、今日こつもの『仕事』だったの？ 夜会用の高そつな服着てるけど」

「ん、ま、まあな

カムラル教会の仕事の事は、当然マーサーも知っている。だが、女性用の服を着てマーサーのすぐ傍にいる自分の事を今更ながらに思い出し、ちょっと焦るカズ。

「着替えたほうがいいんじゃない？ 凄く目立つよ。何かぼろぼろだし」

「そうか？」

言われてみれば、タ力と友情を確かめるがごとき喧嘩をして、そのままだつたことを今更ながらに思い出すカズ。

「そうだよ、ほら、早く」

そう言つや早くぐいぐいと引つ張るマーサー。

そんなマーサーの突然の行動につぶたえ、為すがままのカズである。

「あ、そうだ。ついでにシュンとイツキにも会つてってよ。カズに会いたがつてたからさ」

「シュン？ あれ？ ちょっと前、会わなかつたっけ？」

「うん。前に会つたのは弟のショーンだよ。昨日の夜かな、妹のほつのショーンが出てきたから、

ちょうどいいと思つて」

「あー、そんなこと言つてたつけて。じゃあ、イツキつてのも?」

「うん、ミズキやヒロの弟だよ。滅多に出でこないから、久しぶりなんだ」

唐突な話題振りだが、マーサーには、六人の弟妹がいる。

だが、常に一緒にいられるのは一人だけ。  
謎かけのようだが、『レスト族』がそう言つ種族なのだから仕方がない。

一般的にレスト族と呼ばれる彼らは、一人の肉体に複数の魂を持つ種族だと言われている。

一番目の弟のショーンには同じ名前の妹が。

一番目の弟のミズキには、ヒロといつ名前の妹と、イツキといつ名前の弟がいて。

マーサー自身には、マニーと言つ妹がいるらしい。

それが何かのきっかけで入れ替わり、人格どころか姿形まで変わつてしまつのだという。

「じゃ、これ着替え。ミズキのでおつきくないよね?」

「当たり前だつづーの」

なんてことを考えていると、そのまま家の中に通され。

マーサーのただいまの声とともに、おじやおしますと書つや和や

密室のような部屋に案内されて。

すぐに去つてすぐに戻ってきたマーサーが、弟のものらしーシャツとズボンを持ってき夕力と思つとそんな事をのたまつた。からかいの気持ちなど微塵もないその口調に、ぶすくれながらカズがそれを受け取ると。

「お茶飲んでつよ。イシキとシユンも待つてるから」

そんな不機嫌にもまるで気付いていない様子で、マーサーはさつさと部屋を出て行つてしまつた。

「……とゆくせんうに見える割に、変に強引だな、あいつ

最初から、そのつもりだったのかもしれない。

カズがそう呟きながらも、今さつきまでの不機嫌もビリへや。

当たり前のようないマーサーの氣遣いに。

によによと笑みの浮かんでいる自分にも気付かぬまま、カズはすぐに着替えて部屋を出たのだった……。

## 9、Such a lovely place

カズが着替えに宛がわれた部屋を出ると。

すぐに香ってきたのは、おいしそうなクッキーの匂い。

それを巡つて、マーサーの家の中でも一際広い間取りを取つているらしい一室、

居間へとお邪魔せんと、ノックして扉を開けると。

「はじめましてだよ。あいたかつたー」

空色ウエーブの長い髪の小さな女子（それでもカズのほうが小さい）が、扉を開けきる間もなくそのままんだかと懸つて、こきなり飛びついできた。

「うわ、またかよつ、ちよ、ちよつとっ」

「すつ」「べすつ」「くわいーーー、きれい、やわらかーー、いいに  
おいーーー！」

まるでぬいぐるみ……いや、お口様に一寸噛りされたぽかぽかの枕に鼻を寄せるかのように、  
擦り寄つてくる青い瞳の女子。

なるほど、確かに変わつてゐるらしい。

見た目以上に、少年のシユンのほうが、落ち着きがあつたなって、カズは思い出す。

「えへへ。シユン兄の中にいる時からずっと楽しめたんだよ。」

「いやつてお話しするのー。」

「はは。本当に別人なんだな」

されるがまま、苦笑して呟くカズ。

これなら長兄であるマーサーが、男だらうが女だらうが関係なく、その個人を見るようになるのも、妙に納得がいくカズだった。

ちなみに、マーサーたちの両親は健在だが、今は、世界の平和を守る【ステュー『ナンツ】として、世界中を飛び回っている。

自分たちでその口暮らし、と言つたおいてはカズと同じ。いや、弟妹の面倒を見ているマーサーのまづが上かもしれない、と思つたりするカズである。

「こっちも初めまして、でいいんだよな。ま、これからもよろしく、シユン」「うんっ。よろしく~」

嬉しそうに飛び跳ね、元気よく答えるシユン。

そして、そのままぐるっと振り返ると、たたたつと駆け出し、それまでマーサーの背中に隠れるよつとして、恐る恐るとこつた感じでカズを見つめていた少年を、

ぐいぐいと引っ張る。

「ほらあー、イツキもあこせつ、はやくさ  
「え、あ……」

焦げ茶色の髪が片目にかかり、見るからに氣弱そうで大人しそうな少年は、人見知りする性質なのか、なんだかひどく緊張しているように見えた。

「イツキ、カズだよ。僕の一一番の友達」

そんな背中を押すよつこ、マーサーがそんな事を言つ。

その言葉は、カズのとつて最良であるはずなのに。ズキリと胸が痛む。

暴いてはいけない秘密の扉を開けそうになり、全てを押し込め、誤魔化すようにカズは言葉を返した。

「ま、まあ、そんなトコだ、よろしく  
「はははっ、コイツ、照れてやがるぜ。笑えるー」

俯きつつの言葉で、誤解されたのかなんなのか。不意に降ってきた、そんな言葉。それは、イツキが発した言葉ではなかつた。

実の所、カズにとつてそいつは天敵みたいなもので、今の今までずっと視界に入れないようにしていたのだが。そこまで言われて黙つてはいられなかつた。

「ん？ なんだ、おいちょつと？ 暴力反対つ」

カズにがつしと掴まれて、ばたばたと暴れるのは、手のひら程の大きさの蝙蝠のような翼を持つた人、だつた。

名前はルッキー。

銀髪赤目のそいつは、これでもれつきとした魔精靈である。しかも、本名はルフローズ・レッキー、というらしい。

それは、世界を創つたと言われる十二の根源魔精靈……そのうちの、

【氷】の根源魔精靈と同名であり、もしかして本人！ なんて最初は思つたりしたカズであるが。

「ルッキーうるさい。このまま燃やされたいか？」

カズが握つた手にちょっと魔力を込めてやると、途端にガクガクブルブル震えだす。

その怯えた様子がなんだか可愛いというか、憎めなくて。さすがにこんなのが神の一人なわけないだろうなあと、思う今日この頃である。

そんなわけで苦笑してカズが手を離すと。

しめたどばかりにぱつと飛び上がるルッキー。

「へんつ、バカめ！　甘いんだよつー！」

マーサーの背中に隠れるよつこにして張り付き、ベートと叫び出す。さすが、この家で一番安全な場所を分かつてゐるらしい。

後で覚えてるよ、なんて思いつつ、カズは改めてイツキを見やる。そして、なるほどと、内心唸つた。

マーサーには、ルッキーのことをひづのペッドだよ、なんて紹介されたが。

カズの見る限り、本名はハッタリだとしても、ルッキーが相当高位な魔精靈であることは間違いないんだわ。

彼がいるから、マーサーたちの両親も家を空けていらっしゃるんじやないかとカズは思う。

しかしルッキーがここにいるのは、それだけではなく、どうやらイツキの魔力を抑えるためにいるのだと、カズにははつきり分かった。

イツキがどこか怯えるように緊張しているのは、自分の力を上手く制御できぬせいもあるのに違いない。

「そんな構えなくてもいいぜ、イツキ。とにかくよひじくな」  
「あ……よ、よろしく」

そう言つてカズが陽気にイツキの肩を叩くと、ますます縮こまる

イツキ。

お前の魔力が暴走しても平気だつてことを伝えかったのだが、そ  
うつまくはいかないらしい。

「あははっ、カズ姉すっごい美人さんだから、イツキつたらきん  
ちょーしてるんだね」

「あ、あねきつ」

なんて思つていたが、それはカズの勘違いだつたようだ。  
赤くなつて抗議するイツキに、シウンはケラケラと笑みをこぼし  
ている。

「……」

これはよくない兆候だと、カズは思った。

それは秘密を守るために、許容してはならないもの。

「いいかお前ら、よく聞けえ！ オレは、オレは男、だあーつ！  
美人とか可愛いとか絶対禁止、わかつたか！」

故にカズは、そう宣言する。

一瞬だけ辺りがシンとなり、ちょっと優越感に浸つたカズであつ  
たが。

「「ええええええ！」」

見事にハモリを聞かせて、同じようなびっくり顔で、シュンヒイツキが叫ぶ。

「いや、その。そんなに驚かなくとも。つーかマーサー、それぐらい教えとけ！」

「えー？ 別にいいじゃん。カズはカズでしょ」

「うー」

マーサーのお決まりの台詞に、思わず言葉を失うカズ。言われてみればそうかもしない。相手にどう思われようと、自分は自分なのだと。男とか女とか、くくつてるのはむしろ自分の方ではないかと。

「そつか、そうだな。オレはオレだ」

「うんうん」

しみじみと頷くカズに、相槌を打つマーサー。

なんだかとつてもいい気分で、話しが纏まつた気がしたが。

「おい、マーサー。面白いから黙つとけって、オレに言わなかつたか？」

「わつ、ルッキー。しーつ、だよつ」

「……」

そんな、なんだか氣分がさいてえになる一人の内緒話は。

聞かなかつたことに対する、カズなのだつた……。

(第10話につづく)

## 10、ワスレグサ

それから。

なんだかんだで新しく出来たショーンやイッキたちとも、打ち解けといったのだが。

「これで、オレが会ってないの、あと一人だけだな」

何気なく言ったカズのそんな一言で。

賑やかだったその場の空氣に、ひびく氣ますい雰囲気が流れる。

しかし、その空氣に気がつかないのか。

「そうだねえ。僕も会ったことないから、会ってみたいなあ

しみじみと響く、マーサーの声。

言われて、カズははつとなつた。

マーサーのもつ一つの人格であるマーティ。

彼女はショーンたちやイッキたちのように、お互いの意思疎通ができない事を思い出したからだ。

つまり、マーサー自身、弟たちからは彼女の存在を聞かされてい  
るが、

マーサー本人は話したこともなく、顔も知らないのだ。

ちょっと前に、弟のショーンに、マーサー兄が気にするかも知れないから、  
マニー姉の事は言わないで欲しいと言われたばかりなのに。

カズは自分自身の失言に呆れてしまった。

「わりい、なんつーか、オレ……」

「何でカズが謝るのさ？」

思わず謝るカズに、本気で首を傾げているマーサー。  
マーサーがマニーのことを知らないことに、ショーンもイツキも、  
いたたまれない気持ちを抱いているのが分かるのに。

マーサー自身はなんでもないことのように振舞っている。  
そう思つからこそ、余計にいたたまれなくなつて。

「そ、そりだよな。ほほほっ。あ、もう口も暮れてるし、帰るわ、  
オレ」

そんな風に誤魔化すしかなくて。

また明日と、逃げるよつてその場を後にする自分がちよつと嫌になるカズである。

と。

「ちよっと待て、カズ」

ヴァーレスト家の玄関を出て庭を出で、カズが思わず深く溜息を

ついた時、

後ろ手にかかる声があった。

振り向くと、茄子紺の夕闇に晒されて、表情の見えないルツキーがそこにいる。

「なんだよ」

ちょっと不機嫌に、カズが答えると。

「あいつの名を呼ぶな。呼ばれて出でこられたら、困るんだよ」

ある意味、氷の魔精靈らしい、冷たいそんな声。どういつ意味だと聞こいつとしたカズであったが。

そんなカズの返事などどうでもいいかのよつて。後は自分で判断しろ、とも言わんばかりに。

ルツキーは、ふいと背を向けて、家の中へと戻つてしま

う。

「……なんなんだよ、一体」

マーサーが、自らの別人格である、マーマーと言ひ少し女の存在を知らない理由。

それは。

カズが思っているよりも、何か大きな意味があつて。  
重大な秘密が隠されているのかもしね。

だからこそ、そんなルッキーの忠告めいた言葉が、  
むしろ逆効果になるつてことを、カズ自身ですら、気付く事はな  
く……。

次の日。

カズはいつものように、余裕を持つて早起きをして、朝食の支度  
をしていた。

マーサー程ではないが、カムラル家の家事全般をこなしているの  
はカズ自身なので、  
たとえ気分が乗らない朝でも、その習慣は変わらない。

カムラル老と朝の挨拶を交わし、自らの作った朝食、  
パンにサラダに玉玉焼き、と言った定番の朝食を口へと運ぶ。

だが。

目玉焼きを齧った所で、カズは思わず顔を顰めた。

「うつ。裏、まつくるこげだ」

「ふむ。何か悩み事かの？ それとも、誰かと喧嘩でもしたかね？」

「いや、そういうわけじゃないけどさ」

遠からず近からずなカムラル老の言葉に、カズが曖昧に言葉を濁している。

「よければ話してみなさい。お前が火加減を間違うのは、深く何かを考えている時だ、そつだろ？？」

作り直そうとするカズを制し、カムラル老は焦げも気にせず目玉焼きを平らげると、

優しく暖かい光の灯る瞳で、カズを見つめてくる。

スクールでの授業の時や、教えを請う会員たちには決して見せないその表情。

カズは、そんなカムラル老に促されるように、昨日のことを話した。

マーサー本人だけが知らない妹、マニーの事。

その事を当のマーサーよりも、周りの弟妹やルッキー達が、心配したり気にしている。

マーサーがマーイヤのことを知らない、あるいは忘れていることを、悲しんでいたりも、カズには見えた。

「出でたら困るつて、どうことなんだろ？」

マーサーが忘れているのも、その辺に原因があると黙つただけ  
ど

「ふむ。魂の入れ替わりし種族については、未だ謎の部分が多い  
からのお。

難しい問題じゃな。ただ、知らないのではなく、忘れているのな  
らば、見えてくるものもある」

「それつて？」

なんだろうと、カズ自身も考えながら、カムラル老の次の言葉を  
待つ。

カムラル老は一つ頷き、教えを説くかのように、口を開いた。

「『忘れる』という行為は、そのものが生きていぐのに不可欠な  
要素だと見える。

人には、知識や情報を溜め込むには限界があるからの。

他に優先すべきものがあり、そのものが不必要だと判断されれば、  
その記憶を忘れてしまう。

また、その情報が生きていぐのに支障をきたす様な場合も同じじ  
やな」

「じゃあ何？ マーサーひとつてのマーイヤって」

「不要なもののか、排除すべきもののか、どちらかにはなる  
んじやうつな」

せつぱんと、カズが言葉にできなかつたことを口にするカムラル  
老。

もしそうなら、それはとても悲しい事だと思つ。

どうにもやりきれない気持ちでいると、しかしカムラル老は、だ  
が、と言葉を付け足した。

「それは、あくまで本人の意思で忘れている場合じやがの」

「あ、そつか。マーサーじゃない他のヤツが、マニーの事についての記憶を封印したつて可能性もあるんだ。つて、までよ。何でそんなことする意味があるんだろ？」

「そればかりは、その当の本人に聞いてみなければ、分からんのう」

しみじみと、カムラル老にそう言われて。

この事は、ただここで考えていても、これ以上進展がないんだろうなど、カズは悟つた。

知るために、知るための、行動を起こさなければならないのだ、  
と。

(第11話につづく)

## 11、勝利の笑顔

『会つてみたい』と言ったマーサーの言葉を信じるとすれば。弟妹たちがマニーのことを知っているのに、マーサーが彼女を知らないのは、やはりどこのか、他のものに意図が介入しているのではないかとカズは思った。

記憶を封印したと過程した場合、一体誰が、そんな事をしたのか。

昨日、意味深な発言をしていたルッキー？  
あるいは、何か理由があつて両親が？  
それとも、マニー本人と言う可能性だつてある。  
どうすればその答えを導き出せるのか。

なんだか一層、興味が沸いてきた。  
なんて考えるカズであつたが。

「じゃが、あまり深入りするでないぞ。誰にだつて知られたくない秘密はある。

カズ、お前がそれを知ることで、今の関係が壊れることだって、あるのかもしれないのだから

「……うん、わかってるよ」

カムラル老が真剣な眼差しでそう言つた。

自分の中の熱が、すっと冷えるのを自覚するカズ。

それは、いつもの事。

カムラル老の、カズを思つての言葉。

今の関係が壊れるなんてこと、根拠のない齧しのようなものだ。でも、それが最も効果的な抑止であることは、間違いなくて。

だから余計に冷静になつた頭で思つのだ。

それを知ることは、カズ自身にとつて何か危険を伴つたうな何かがあるんだろう、ということ。

「なんて、いろいろ勝手に悩んでんの、馬鹿みたいだな……」

結局、なんだかもやもやしたままの気持ちで、朝の登校時間。カズはいつも、スクールまでの道のりの途中にある小さな公園で、マーサーと待ち合わせてスクールに向かうのを日課としている。そこに他の友人達が加わり、一日が始まるといった寸法だった。

案の定、カズが待ち合わせの場所に辿り着くと。

背中からでも分かるくらいに、何も考えていないさそつな、陽気で能天氣な、鼻歌を口ずさむマーサーがそこにいた。

歌の上手い人間特有の、嫌味なほどに正確に調子つ外れなその歌を耳にしていると、

思わず呟いてしまつた通り、勝手に考え込んで悩んでいた自分が馬鹿らしく思えてくるカズである。

「つづーか、なんかハラ立つてきた」

理不尽な苛立ちを、カズはそのまま口元にして、カズは足音と気配を殺して忍び寄り……。

「ちよーつぶー」

体当たりまがいの『フライング・クロス・チョップ』をかまそつとしたが、当のマーサーは、全くもつて自然な動作でひょいと体を逸らし、足だけをその場に残す。

「つわづ、うわわあーつー」

虚をつかれたカズは、ものの見事にマーサーの足に引っかかり、そのまま前のめりに地面とお友達になりましたが、転がつていつて。

「どわはははっ」  
すぐに聞こえてくるのは、心底楽しました、といった風のマーサーの笑い声。

「……つ」

仕掛けたのはこっちが先なのだから、結果こうなってしまったのは仕方ないと言えば仕方ないことなの

だが。

どうしてかその時カズが感じたのは、怒りや悔しきの混じった、でもなんだか別のものだった。

思わずさそ、と睨みつけるカズ。

「怒らないでよ～。先に仕掛けたのは、そっちでしょ？」

だが、マーサーはそんなもともと罵詈とともに、見ただけで百年の怒りもお構になしな、随分とひどい氣の殺がれるよつた笑みを浮かべるばかりで。

「あ～あ、ほこつだらけだ。まー、泥だらけになるよつはいいけど」

咳きつつカズを立たせると、それが当たり前のことであるかのように服の埃を払い、髪を整える。

多分、マーサーにとってカズは、弟妹たちと対して変わりはしないのだろう。

それは、癪な事ではあったけど

はたかれて舞う埃と一緒に、昨日のもやもやした気分とか、今さつき感じた怒りのようなそういうよつた、変な感情もどいかへ飛んでいつてしまうから、不思議だった。

ついでに、触れられている所からどんどん熱を帯びてくる。

「よけるんじゃねーよ、バーカ！」

「だつたらせめて、襲い掛かる前の掛け声やめればいいんじゃないの？」

につこうと、マーサーは笑う。

それなら避けないで食らってやるひつとも言いたげに。

「おぼえているよ」

カズのそんな咳きが、届いているのかいないのか。  
それでもやっぱり、マーサーは笑顔のままで……。

それから。

他の友人達とも合流して、いつもの授業が始まつて、今は昼休み。  
いつもなら、マーサー通じて仲良くなつた他の友人達も一緒になつてお昼を食べるのだが、  
都合が合わず、カズは随分と久しぶりに、マーサーと一人きりでお互い自作の弁当をつづいていた。

「ねえカズ、この前、仕事したいって言つてたよね？」「ん？ ああ。そういえば言つたっけか」

何気ない雑談の合間に、不意に発せられるマーサーのそんな言葉。

「やりたいのは山々なんだけどよ、ギルドのほうに、じいちゃん手を回したらしくてさ、

顔見ただけで、『遠慮ください状態なんだよなー』

カムラル老はとにかく過保護だつた。

カズに女装させたがる以上に、カズに周りにある危険を排除：  
…いや、

そういうものに興味津々で近付きたがるカズに、最早職権乱用の域で目を光させていた。

だから、町の喫茶店で給仕をする、なんて『ぐく普通の仕事ですら断られる始末。

できる仕事といったら、恥ずかしい女装姿での、  
カムラル老の仕事の補佐（詐欺まがい）しかなかつたのだ。

「それなんだけども、僕、いい」と思いついたんだ。放課後、ち

よつといい？

「別に、いいけど？」

マーサーから、こんな風にカズだけが誘われるのは初めてのことだった。

大抵カズが引っ張り回すか、他の友達と一緒に、歌に釣られてよつてくるとか、

そんなことばかりだったから。

「なんだ、いい案つて？」

「後でね。直接そこで説明したほうが早いこと思つて、ちょっと準備がいるんだ」

なんだか悪巧みを思いついたかのよつた、笑顔を見せるマーサー。もつたいぶる感じが、余計に気にかかるのも確かで……。

(第1-2話こじらへ)

気もそぞろのまま、午後の授業を終え、そして放課後。

カズとマーサーは、ユーライジア元町にある冒険者ギルドの建物、そこに行き来する、仕事を委託する人、仕事を受けに来る人たちがよく見える場所へとやつてきていた。

「わかった？　いい案でしょ？」

「わかるか！　いきなりそりゃねーだろ！」

それを見ながらいきなりそんな事を言われ、当然カズには訳が分からなかつた。

すかさずついつことでやると、マーサーはすくと首を傾げて、それに答える。

「ほら、よく見て。残念そうな顔して出でてくる人、結構いるでしょ？」

「ふむ」

「僕、ちょっと話聞いてみたんだけど、ギルドって、全ての人のお願い、

聞いてるわけじゃないみたいなんだ。やって欲しい仕事をお願いしても断られること、

結構多いんだって。うちで引き受けのほどの仕事じゃない、とかなんとか。だから……」

微妙な言い回しではあったが、マーサーの言いたいことはわかった。

つまり、ギルードで受けたもじらえなかつた仕事……残念やつに肩を落とし、

帰つてゆく人たちに声をかけ、交渉を持ちかかる、やうこいつとなりのだからう。

「やのギルードのやつらが受けなかつた仕事を、横からかいつらひちまおうど、

つまりはやうこいつ」とだな?」

「うん、そり」

「オイオイ、あつれり頷くなよ、なんて内心思つカズであったが。事実言葉通りと言えばそつなのかもしれない。

しかし、確かにいい案ではあるが問題はいくつかある。

ギルードがその仕事を断つたということとは、大なり小なりその仕事には断つた理由があるということだし、やつぱりカズ自身の顔が割れてしまつていて、下手に動くとカムラル老に自分の行動が伝わつてしまつ可能性もあつたからだ。

自分から櫻を飛び出すよつた行為をしてゆく、元せへむことにしてござるが。

少なくとも、その点においての安心がなければ、いへり興味深い

マーサーの『いい案』とはいえ、

そう簡単に頷けるものではなかつた。

だから、それについてどう考へているのか、マーサーに聞いてみると。

「最初はさ、ひとつも話は聞くけど、それだけで仕事を引き受け  
るわけじゃなくてや、

仕事の内容を聞いてみて、受けれるか受けないか判断しても遅くは  
ないんじやないかなって思うんだ。で、二つの問題点について  
なんだけど、さつき、準備するつて言つたでしょ。

ほら、僕、これ使えばいいかなーって思つたんだ」

そう言つて取り出したのは、初夏のこの時期、少し暑苦しい氣も  
しないでもない、

大きめの夜色マントと、一風変わった夜会にでも使いそうな極彩  
色の仮面だつた。

それらには、ほんのわずかだが、魔力を感じ取ることができる。

「なんだ、それ？」

「家にあつた魔法玩具だよ」

カズの問いに、ちょっと見ててねと呟き、マーサーはマントを羽  
織り、仮面を取り付ける。

「これで、声色が変えられるんだ。後ね、マントに軽い『視覚補正』つてやつがかかるって、

これ着てれば、背が大きく見える感じによ?」

「うおつ?」

いつも聞き慣れたマーサーの声とは違つ、低く芯の通つた、耳ではなく胸に直接響くようなアルトの声が届き、カズはあまりの変わった音に思わず仰け反つてしまつた。

マーサーの歌声も、胸というか、心に直接触れるような声ではあるが、それとはまた違つた趣の、一度耳に入れたらずっと残るような声色である。

「ね、結構変わるでしょ?」

「いやつさ、驚いた。『風』<sup>ヴァーレスト</sup>の魔法の中にそんな魔法あつたのは覚えてるけど、

これ、おもちゃつてレベルじゃねーんじゃねーの? 普通に高やうな魔法具<sup>マジックアイテム</sup>に見えるんだけど、

使用目的とか、効果は置いておくにしても。

これは魔法屋に並んでいる魔法付加の施された品に匹敵するんじやないのかつて、カズは思つた。

少なくとも、一般人がおもちゃ感覚で扱えるシロモノではないだろ?。

売つたらいくらくらいになるんだろ?。

なんてことを内心思いつつも、カズは言葉を続ける。

「ま、それは後でいいや。確かにそれ、使えそうだな。仮面つて  
いうのはちょっと怪しい気もするけど」

「しょうがないよ。正体バレたらだめなんだし。後は、カズの交  
渉次第じゃない?」

そう言つて笑い、マントと仮面を取り外し、カズに手渡す。

「あ、でも、一つしかないんだな。それはどうするんだ?」  
「ん? どういうこと?」

カズがそう言つと、言葉の意味が分からぬのか首を傾げるマー  
サー。

「や、だからさ、一つしかなきやどっちか変装できなくて困るじ  
やん」

「えーっと、ああ、そつか。言つてなかつたけ? 僕、これから  
別の仕事なんだ……一応正規のやつで」

「な? てめつ、聞いてねーぞつ!」

てつきり、二人でこの『いい案』を決行するつもりだったカズは、  
そんなマーサーの言葉に思わず憤慨する。

それを聞いたマーサーは、珍しく困った顔をして。

「うめんね、カズ。実は前々から今日は『白猫亭』で歌を歌うこ

とになつて……

そりだよね、いくらなんでも一人でやるなんて嫌だよね。いつたん出直す?

明後日なら空いてるよ?「

本当に真撃な声色で、謝つてくるマーサー。

それだと逆に、カズのほうがいたたまれなくなつてくるといふか、別にマーサーはそういうつもりで言つて居るわけではないのだろうが。

初めから一人でやると思い込んでいたことも含めて、カズは、自分がマーサーと一緒にじゃなきゃ何もできないヤツに思えて……

なんだかそれは、癪に障つた。

「いや、別にいい。それならオレ、一人でやる」

「そう? ジャあ、気をつけてね。明日、どんな仕事したのか、教えてね」

「ああ」

むすっとしてカズがそう言つと。

マーサーは優しい笑みを浮かべ、大きく手なんぞ振りつつ、その場を去つていつてしまつ。

そんなマーサーに軽く手を上げ見送りながら。

自分で思つて居る以上に、マーサーに依存しているのかもしけないなあ、

なんて、年不相応なことを考えてしまつカズなのだった。

その感情の正体に……未だ気付くことができないままに。

(第1-3話について)

### 13、フォーカス

さて、その後。

マーサーの『いい案』を、早速実行してみたカズであったが。

世の中、思った通り簡単にいくはずはないと。

長期戦になるだろうな、なんて覚悟したのも束の間。

すぐにギルドの赤いレンガ造り入り口から、いかにも仕事の引き受けを断られたと分かる少年が姿を現した。

「くそつ、頭の固い奴等めつー。」

何やら不満たらたらで、ぶつぶつ呟きながら歩き去って行くのを見た  
カズはしめたと思い、いきなり声をかけても目立たない裏通りの方へと回りこみ、  
背中越しに声をかけてみる。

「そこの、『ハイクラス』のお兄さん、ちょっといいかい？」

「……っ」

首に紐を通し、何か黒い箱のようなものを抱え持っていた少年は、名乗つてもいないのに自分のことを知られているような気がして、ぎょっとなつて振り返る。

「だ、だれだつ、ビリして俺のことをひ」

振り返つてみれば、そこには派手派手の仮面、夜色マントの怪しい人物がいる。

よほど豪胆なものでもない限り、驚き警戒して間を取るのは当然のことだろう。

だが、少しでも自分のことを知つていると匂わせ、一いち方に興味を持たせる、

そんな策は、成功したと言えた。

少年がユーライジアスクールの、カズたちより二階級上のハイクラスに所属している人物だと分かつたのは。

その胸元に光る、ユーライジアスクールにおいて、ハイクラス以上のものが身につけることを許される、『ライジア・バッヂ』が目にに入ったからで。

よく観察すれば分かりそうなものだが、相手はカズの都合のいいように反応してくれているので、カズはそのまま話を続けることにする。

「初めまして。オ、私は……そうだな。『夜を駆けるもの』とでも呼んでもらおうか。

しがない『何でも屋』さ」

せつかくだし、別人に扮してみるのも悪くない。

カムラル老との仕事で演じることに比較的慣れていたから、早速氣分を入れて会話してみる。

名乗った名前は、自然とカズの口をついて出たものだつた。

それは、いつか「一代目『夜を駆けるもの』として活躍したい、何て思つていたせいもあるだろ？

「お兄さん、先程ギルドに仕事の引き受けを断られていたらう？」  
もし良ければ、何か手助けができるんじゃないか……やつ、思つてね」

カズは第一の策として、相手に冷静に状況を考える暇を『『えず』』に、自身の意図を一気に畳み掛ける。

仕事の引き受けを断られた、ということについても、普通ならその様をつぶさに観察してゐる奴がいる、などとは考えないだろうから、どうして知つているんだ？ ところどころになるだろ？

それで、誘いに乗つてくるかどうかは、後は賭けだった。これで断られるのなら、それならそれでいい。

しつこいのも逆に怪しまれるだけだし、ドキドキするような冒険の気分が味わえるような仕事とか、してみたいとは思うカズであるが。

何が何でも、とがつ正在中いるわけでもない。

駄目なら駄目で、次を当たればいい。  
その程度の気持ちで、カズはいた。

「なんだあんた。そんなことまで分かるのかよ……そ、そうだよ。  
せつかくこの俺が、世紀の大発明を使って紙面を盛り上げてやる  
うといつのに！」

と、そんな無欲がよかつたのか、それとも誰かに愚痴を聞いても  
らいたかったのか、  
少年はちょっと怒った様子で語りだす。

「紙面？　ああ、スクールの新聞部の人なんだね」

「おお、そうだとも。俺はこの広大なスクールにおいて、  
生徒達みんなが面白おかしく、興味深い、平等で公平な情報を得  
られるようにと邁進している！」

だからこの大発明『キヤメーラ』で、建国祭会場視察のために、  
お忍びで滞在しているという噂の、他国の麗しくも美しい姫君た  
ちの御姿を激写しなければならないのだつ！」

知らない人だと思つていたが。

そう言えば、コーライジアスクールにそんなが部あつたなあと思  
い出すカズ。

スクールに入学したばかりの頃、その人たちが、なんだかよく分  
からないけどバレバレ身の隠し方で、周りにたくさんいたのも思  
い出したのだ。

彼もきっとその一人なのだろう。

彼が言つ通り（カズもスクールのいろんな情報とか噂話が好きだつたから）、

来年行われる、コーライジア、サントスール、アーヴァイン、ガイアツトの四国同時主催の『建国祭』の顔合わせ兼打ち合せために、各国の王族たちがコーライジアスクールへとやって来ていることはカズも知っていた。

「流石新聞部。情報が早いね。そのことは、一部の王族しか知らないはずだが」

「まあな！　俺はコーライジア四王家とも強い繫がりを持つているのだ」

本当かな、と思つたが、口には出さない。

四王家には、彼のような人はいないはずだった。

もしかしたら、カムラル教会の会員生、という可能性はあるかもしねいが。

「この繫がりを駆使し、いつか俺は彼女のうつった『絵』を手に入れるのだ！」

喋つてゐるうちに熱が籠つたのか。

手に持つ黒い箱を掲げながら何やら叫んでいる。

本当に強い繫がりとやらがあるのなら、ここまで傾いた人物のこと、

知らないはずないと思つカズであつたが。

それよりも、彼の持つてゐるその黒い箱は気になった。

少なくとも、世界の英雄一歩手前……候補生であるハイクラスの生徒であると証明しうるそれは、カズの目から見て、今身につけている仮面より、強い魔力を秘めたマジックアイテムであることがわかる。

おそらく、それがさつき彼が発明した、と言つたキャメーラなるシロモノなのだろう。

「それがお兄さんが発明したと言つキャメーラなのかい？」

「一体それは何をするものなのかな、よければ聞かせてくれるかい？」

「ああ。」  
「ああ。」  
「これはな！『光』<sup>セザール</sup>の魔精靈の力を借りて、この『田』に映つたものを、まるで絵画のように切り取ることができるものなんだ！」

「それは……すごいな。どうやって使うのかな？」

「よし、実践してやる。ちょっとあんた、持つてみてくれ！」

思わず感心してそう呟くカズに。

青年は、得意げな様子でキャメーラを手渡すのだった……。

(第1~4話につづく)

「よし、実践してやるー。ちょっとあんた、持つてみてくれ」

言葉通りのものならばと、感心して声をあげるカズに。得意げな様子で青年はキヤメーラを手渡す。

「裏側の真ん中、上辺りを覗き込んでみてくれ、『田』によつて、反対側が見えるだろ?」

「お。本当だ」

言われた通り覗き込むと、確かにキヤメーラ越しに少年の姿が見える。

「で、左の角の巻きでピントを……つて、それは今はいいか。あなたの田で、俺の全身が『田』の中に入るようにして、右の赤いボタンを押してくれればいい」

「分かった」

カズは、言われた通りの動作をこなしあもむろにボタンを押す。すると、ピカッとキヤメーラが発光し、しばらくすると箱の下の部分から変な音がして、

ひらりと一枚の紙が出てきた。

そこには彼の言葉通り、まるで空間を切り取つて縮小したかのよ

「うん、

彼自身と、その背後にある周りの景色が写っていた。

「……す」「いね。これをお兄さんが発明したのかい？『シャレード』や『ズイウン』にも匹敵する大発明じゃないかい？」

人の何倍も早く走れる、魔法移動機械の『シャレード』。  
鳥のように空を舞うことのできる『ズイウン』。

『金』属性の魔法技術により、マジックアイテムの種類も効果も、  
格段に進化してきているが……それらの中でも、大発明と言われる  
ものと比べても遜色ないものに、カズには思えた。

おそらく、このキャラメーラは、これから爆発的に世間に広がつて  
いくだろう。

そう考えて、正直に賞賛したカズあつたが。  
言われた当の本人である青年は、あっけに取られたようにぽかん  
としていた。

「はは、そんなこと言われたの、初めてだよ」

そして、とても嬉しそうにそう呟く。

「お兄さん、名はなんて？ 良かつたら教えてもらえないかい？」  
「カワダ。カワダ・フレンツだけど」

その名をカズが知ることによって、それがカムラル老に伝わり。

カズが思つた通りに。

キャメーラがコーライジアの人たちにとつて当たり前のものになるなんてこと、

その時はお互に思いはしなかつただらう……。

そして。

お互に不思議なほどに打ち解けて、当初の本題である仕事の話になつた。

「それで、このキャメーラでギルドに何を頼むつもりだつたんだい？」

「ああ、さつきも言つた通り、祭りのために各国からやつてきた、一般人では話すのもままならないお姫様たち……じやなかつた。王族、それぞれの国の、祭りの代表者たちの姿を取りたかつたんだ。

それを新聞に載せれば、みんな興味を持つて新聞、見てくれるだろう？

だが、そうは言つても相手は王族だ。コレのことを理解してくれる人は少ないだろうし、

よくて門前払いがオチだ。だから、ギルドに頼もうと思つたんだけど」

理解されしてくれず、結果はこの通り。  
つまりはそういうことなのだから。

だが、ギルドの言い分も分かる。

このキャメーラが未だ知らない人にとって得体の知れないものである以上、

下手をしようものなら国際問題になる、なんてこともあるかもしれないからだ。

まあ、ギルドもそこまで考えた上で断つたわけではないだろうが。

ならば逆に、同じ立場の者同士が話し合えば？

今、カワダがしたように、ちゃんと使い方を説明すれば？

この時を止め、空間を切り取った『絵』を、どうせでもらえるかもしれない。

いや、その時カズは既に、キャメーラの魅力にとりつかれていて。この仕事、やってみないと、そう思っていた。

「ふむ。 そうか。 それなら……もし、良ければといつ提案なのだが、

この仕事、私に任せてみたいかい？ これは私のお願ひだから、当然お金はいらないよ。

まあ、お兄さんの大切なキャメーラをこの私が預かるといつことをお兄さんが許してくれれば、だけれどね

「つて、どうやって？ 王族の人たちはスクールのどこにいるのかも分からぬんだぞ？

しかも、普通の奴が……つて、あんたはそれ以前の問題だけど、会わせてくれるだろうか」

「その点については問題ないよ。 場所は宛がある。 私なら会つ」とも可能だ

「本当か？」

「本当だとも

自信たっぷりのカズの言葉。

その自身には実は根拠はあまりなかつたりするのだが。自分も一応王族みたいなものだし、場所の目処もついている。会わせてもらえなくとも忍び込めばいいじゃん、くらいにカズは思っていた。

カワダはそんなカズに戸惑つていたが、やがて顔を上げて。

「あんたは俺のキャメーラを認めてくれた初めての人だ。あんたになら、預けてもいいと思ってる。お願ひしても、いいかな？」

駄目もと、くらいに思つていたカズの予想に反して。

カワダはそんな事を言つて、キャメーラを手渡してきた。

こんな、顔も正体も隠した怪しい奴に、よくもまあそんな気になつたなあと、自分自身で思わなくも無いカズであったが。

それでも、信用されてると思えるのは、なんだか嬉しかった。ぜひこの仕事を成功させて、その信用に報いたいと、カズは思う。

「ありがとう。その信頼に、全身全霊を持つてお答えするよ

だからカズは、そんな意思を持った言葉で。  
カワダの仕事を引き受けることを、承諾したのだった……。

(第15話につづく)

## 15、Twinkle，Twinkle

そして、その日の夜。

カズはあつさりと、スクール内に侵入していた。

思い立ったが吉日、ということですぐさま行動を開始したのは、今日がちょうどある、カムラル老が家にいない日だった、ということもある。

国の仕事か何かで、今頃は大陸ひとつぶん離れた『ラルシータスクール』に向かっているはずで。

スクール内への侵入方法は、実に簡単なものだった。いや、それは侵入というのとは少し違うのかもしれない。

カズは、カワダと別れた後、すぐにスクールに向かった。そして、普通に仮面を外し、カズ自身ヨーライジアの生徒として入り、そのまま帰らなかつた。それだけなのである。

とはいえる、校舎内に残っていたならば、下校時刻になる頃には誰かに見咎められただろう。

だがカズは、校内の敷地内、そのうちの、監視の届かない場所、野生の動物や魔物たち、果ては魔精靈の棲まう場所……今では『虹泉』があつて、

実習でもない限り、特にリトクラスの生徒たちなんかは危ないから行つてはいけない、

『グラウンド』で待機していたのだ。

行つてはいけないと言われれば行つてみたくなる。

そんなお約束の感情とともに、カズは冒険と称してすでに自分の庭であるかのように遊んでいたので、もう慣れたものである。

下校時刻が過ぎ、常勤の者や、校内の施設で一晩過ごすもの以外が家路につく頃を見計らい、

カズは、仮面とマントを再び纏つて、降り始めたばかりの闇に紛れながら、校舎へと近付く。

カズが、これから向かう場所は決まっていた。

カズ自身、他国の王族たちがどこにいるのかは知らない。

だが、それを間違いなく知っているだろう人物の居場所は知っていた。

そこは、『生物室』と呼ばれる場所。

そこにいる主は、この学校の主みたいなもので。

分かる大人でもあるから、事情を話せば、それに乗ってくれるだろうと、カズはふんでいた。

グラウンド地帯から校舎のある区画へと続く虹泉をくぐると、その足ですぐさま生物室へと向かう。忍び足で音を立てずに近付き、それでも堂々と生物室の扉を叩く。

返事は無かつたが……何かの気配はあるようだった。

幸い鍵がかかっていなかつたので、カズがゆっくりと扉を開けると。

まず目に入つたのは、たくさんの櫻。

魔物や魔精靈たちを閉じ込める、魔法の櫻だ。

そのうちのこくつかの櫻の中には、カズの気配に気が付いて顔をあげ、

鳴き声をあげる『獣型』の、種々様々な魔精靈たちの姿が見える。

スクールの敷地内にあるグラウンドは、基本的に自然のままにしておくのが基本ではあるが。

それでも大怪我をしたものとか、いろいろ問題のあるものが、一時的にここに置かれていると聞かされていた。

ただ、別にずっとこのままではなく、元気になればグラウンドに帰れるし、

相性が合うものがいれば、自分の従属魔精靈パートナーとして引き取っていく生徒もいるらしい。

炎トカゲのラルマンド。

癒しの術を使う海月みたいなリカバースライム。

毒をもつ大ネズミのナクテス。

カズが近付くと、みんな寄つてくるので、一声かけながら部屋の真ん中を歩き、

そのまま奥にある、一番大きな櫻の所にやつてくる。

それは、他の檻とは魔法耐久レベル一ひとつでも桁の違ひ、強力な檻だった。

物理的にも、魔法の力によつてでも、カズにとつては到底破れそうもないシロモノである。

その中は、ちよつとした祭壇のよつになつていて……さらにその奥に、

『虹泉』の虹色の渦があるのが分かる。

祭壇のよつなものの真ん中には、複雑な魔法文字の刻まれた、それ自体も強力な結界となる絨毯があり、その魔あるものを封じ込める結界の上で、

無防備にも寝こけていたのは、瓜二つの姿をした、水色の髪の少女たちだった。

双子であるらしいその少女を見分ける術は、髪に巻かれた色違いのバンダナのみ。

「おーい、アオイ、ヒスイーっ！ そんなとこで寝てたらカゼひくぞー！」

カズはちょっと呆れたように、大きめの声で、そんな二人の声をかける。

とはいえ、内心ではここにいてくれて一安心な部分はあった。

もし部屋に戻られていたら、この広大なスクールの中、目的の人たちを自力で捜さなければならなかつたからだ。

「……ん？ あ、カズちゃんだよ～」

「ふわあ……おはようございます、カズさん」

呼ばれた少女たちは、同じような仕草で起き上がり、そこにカズがいるのを知つて、にっこりと笑う。

「おはよーじゃねーぞ。いてくれて助かつたけど」

二人……アオイとヒスイに知り合つたのも、当然スクールに入つてからではあるが。

一見、人の姿をしている彼女たちは、正しくは人ではなく、『人型』の魔精靈である。

その中でも彼女たちは、かなり高位の魔精靈だった。

おそらく、その意思さえあれば、この檻から出ることも、簡単なことなのだろう。

だが、彼女たちが自らの意思でここにいるのは確かだつた。

ヨーライジア四王家筆頭である、エクゼリオ家の跡取りである、マイカ・エクゼリオ。

魔精靈の最高位、根源に次ぐ、『神型』と称されてもおかしくない力をもつた、魔精靈の少女。

そんなマイカのために、彼女たちはここにいるのだと、カズは知つていた。

「こんなところで遅くまで何してたんだ？　マイカはもう、部屋に帰ったのか？」

「ううん。いまね、マイカさまね、他の国の王族のひとたちにあいにいつてるよ」

「それで、マイカさまの力をおさえる必要があつたので……」

カズの問いにアオイは首を振り、説明するように、ヒスイが付け足す。

カズにはみなまで言わず、二人の言いたいことが分かつたので。

「二人は疲れて、ここで寝ちゃつたってわけか」

なんて、相槌を打つと、二人は同じ顔をして……はにかんだ。  
人の姿を模すことのできる魔精霊なのだから、年齢的にも二人のほうが上なのだが、

見た目とか雰囲気のせいもあり、どうも同じか年下のような感覚を受けるカズである。

そんな一人が寝こけていたのは、それが正しく彼女たちがここにいる理由であると言えるだろう。

それは、マイカ・エクゼリオと言う少女が、この檻の中と、田の前にある虹泉の向こうにある、

『理事長室』でしか暮らせない体质にあった。

昔はそつじやなかつたし、どうして暮らせないのか、までは聞いていないが。

しかしそれでも彼女は一応このスクールの最高責任者であり、

「どうしても外に出なければいけないこともあります。

その時に、高位の魔精靈であるアオイとヒスイに頼み、  
外に出るにじとのできる強力な『魔法』をかけてもらうのだとう。

それは、カズがいまだ知りえない、たゞ強力なものらしく、  
おかげで一人は疲れ果てて……気付いたら寝てしまつた。  
つまりはそういうことなのだ。

「アオイとヒスイは、それでマイカがどこに行つたのか聞いてる  
のか？ ちょっと用があるんだけど」  
マイカが他国の王族の人たちと会つてゐるなら、ひょいとよか  
つた。

そう思つて、カズが聞くと。

「どうしようもない女つたらしのおやじと、くまみたいな男女に  
あいにじくつていつてたよ」

「ちよつとアオイちゃん、それじゃ分からぬよ。たぶん、お密  
様用の部屋のある区画にこりりつしゃると思ひますけど……」

おそらく、マイカの言葉をそのまま覚えて反芻したらしごアオイ  
と、

それを補足するよつこ、答えてくれるヒスイがいて。

「教えてくれてありがとな。んじゃちよつと見てくるわ」

カズは礼を言い、またな、と声をかけて、部屋を後にする。

「……」の仮面、バレバレなんじゃねーのか？」

別に「マントも仮面も外していないのに、どうも自分が筒抜けりしことに、首をひねりながら……。

(第1-6話つづく)

そうして、カズが目的地……来賓用の居住区、密室に向かう途中。

「ん？ 何か外がさわがしいな」

ふいにざわつく気配に気がついて。  
もうすっかり闇に染まつた校舎の外を廊下脇にある硝子窓から見  
やるとい。

全身を縁の鱗に覆われた、巨大な生き物……『ビリティアン・ド  
ラゴン』が三四、

地響きをたて、見下ろす硝子窓の向こうを通り過ぎていくのが分  
かった。

ビリティアン・ドラゴンは、スクールの敷地内に生息する魔物の  
中では特に危険な魔物であり、  
いくらでキドキや冒険が好きなカズだと黙つても、それらと無茶  
無謀が別物であることは分かつている。

ただ、校舎の中にいれば魔物たちが入つてこないことも分かつて  
いたので、

「のまま」ことれば無用な危険は回避できるわけなのだが……。

「なんでこんな時間に外出てるんだよっ！」

思い切り自分を棚に上げつつ、カズは踵を返して出口へと走った。その理由は口にした通り、誰か……少女らしき人物が、そのビリティアン・ドラゴンに襲われているのが分かつたからだ。

転がるように校舎外、背の高い草の生い茂る荒れ果てた庭に出ると。

それらに視界を隠され、悪戦苦闘しながらも、駆け出しつつ魔法詠唱のための呪を紡ぐ。

「『火』 よ！ 幻想の徒に仮初の息吹をつ…………【フレア・ミラージュ】 つ！」

そして。  
力込められた言葉が生まれ出た瞬間、突然闇夜に小型の太陽が出現し。

ボン！ と音を立ててそれが破裂したかと思うと。  
そこから炎を纏いし三つ首の犬が、一つ目の巨人が、八つの頭を持つ大蛇が次々と飛び出した。

いや、飛び出したというのは物理的におかしいかも知れない。  
何せ、その一体一体が、ビリティアン・ドラゴンのゆうに一倍はあるのだ。

「ギギツ！」

その大きさに圧倒されたのか、ビコトトイアン・ドリゴンたちは、  
その意識を炎の幻獣たちへと逸らす。

「いひちだ、早くつ！」

カズはその隙に、ぽかんとしている少女の手を取り、  
その手のひらの感触に不思議な違和感を覚えつつも、その足で校  
舎へと戻つて……。

「大丈夫か？」

あらためて、カズはそう声をかけてみる。

「え？ あ、うん。ボクはだいじょぶけど……あれ？」

自分のことよりも、ドリゴンと炎の幻獣たちの戦いが気にかかる  
らしい。

だが、校舎に戻り、窓越しに覗くと、そこには幻獣たちの姿はな  
く、  
ドリゴンなしに視線を彷徨わせ、きょろきょろとしているドリゴン  
たちだけがそこにいた。

「あれ、もうやられたの？」

「……違う、そもそもあれはただの幻だ」

危ない目にあつた、と言う感覺はあるでないらしい。

予想していた反応と異なる様子の少女に、カズはちょっと困惑い

つとも、

憮然とした口調で言葉を返す。

あの炎の幻獣たちは、カムラル老と詐欺まがいの仕事の時に使つた魔法と同じである。

炎が生き物の姿を象り、意志を持ち動いているように見えるが、実際は熱すらほとんど感じられない、はつたりの魔法であつた。

「まぼろし？ なんだ、にせものこと？ つまんないのー」

まるで夢の世界から出てきたかのような白一色の夜着を包むのは、長い、腰ほどまでもあるカールのかかつた亞麻色の髪。

気高さと儂との同居した立ち振る舞いの少女だが、少し生意氣…  
…というか、口が悪い気がする。

ついでにその話方もどことなく不完全といつか、個性的な感じが滲み出でていて。

本来なら全力で自分を棚に上げて売り言葉に買い言葉、そこまで  
言つなら本物を呼んでやる、  
なんて気分にもなるカズであったが。

それより何より、目の前の彼女にはカズが大いに興味を引かれる  
点があった。

「つまんないってお前自身だつてにたよななものだろ?  
初めてあつたな、お前みたいな触れられるほど強力なゴーストは」

校舎内に明かりがなかつたこともあり、窓から届く月明かりに、  
目の前の少女は見事なまでに透けて見えていたのだ。

「『』、ゴーストじゃないつ、 ゆーたいりだつ、 してるだけだもん  
…………あつ」

すると、ムキになつて否定してきたかと思つと失言してしまつた、  
といった風に、慌てて口元を押さえる少女。

「ゆーたいりだつ? つて、『死靈術』の?  
すげえなお前、そんな高度な魔法、使えるのか?」

『闇の根源に類する、死靈術。』

ヨーライジアでは、あまり知られていない種類の魔術、あるいは  
魔法だが、  
その魔法は生き物の魂を扱うことに長け、死者を操つたり、  
無機物（人形とかぬいぐるみとか）に魂を宿らせ動かしたりする  
ことができるものである。

その中でも、『幽体離脱』は……特にレベルの高い魔術だといえ

よつ。

自らの……あるいは他人の魂を肉体から剥離し、自由に移動できるようになる力。

しかも、彼女は幽体でありながら、触れることができるほどに具現化している。

年のころは、カズと同じくらい、だろうか。

その事に、カズは、感心して声をあげるが。

「あ、あの、今の聞かなかたことじてよ、お願ひ！……じいに怒られるよ！」

少女は、とても焦った様子で、そう言つてくる。

その言葉は嘘ではないのだろう。

そんな少女に妙に親近感のわいたカズは、こくりと頷いて。

「それはべつにいいけど……お前、このままじゃ、すぐに気付かれるぞ？」

さつきから気になつていたことがもう一つあったので、カズはそういう言葉を返した。

それは、彼女が全身から絶えることなく沸き立つ、魔力の奔流である。

『幽体離脱』のことは詳しく分からぬが、そんな煙や湯水のように、元の魔力を放出しちゃなしにしている人なんて、普通の人間にはありえないことだからだ。

魔力を放出しちゃなしにしている人なんて、普通の人間にはありえないことだからだ。

彼女を最初、ゴーストだと思ったのもそのせいだし、  
ドラゴンたちが彼女を追いかけてきたのも、彼らの繩張りに、そ  
んな状態で足を踏み入れたからなのだろう。

スクールに入つて、最初の実践授業の時に、マーサーがいきなり  
歌いだして、  
似たようなことをやつていたので、カズはそのことを充分すぎる  
ほど、身にしみて分かつていた。

「え、え？　何の」と……？

しかし当の少女の方は、言われている意味が分からぬようだっ  
た。

もしかしたら、その魔力の奔流が見えていないのかもしれない。

しかも、心なしか、透けている度合いが増しているような気もす  
る。

マーサーの場合は、口を塞げばするんだろうけど、彼女自身がそれ  
を意識していない以上、  
自分でそれを止めるのは難しいのかも知れなかつた。

「仕方ねえな、ちょっと待つてひ

カズは一つ溜息をつくと、とりあえず仮面を取る。  
そして、後ろにくくつてあつた目の前の少女よりも長い髪から、  
三角架を模した髪留めを外し、少女に手渡した。

「うれ、やるよ。魔力の制御の力が込められてる」

本当は、『お前は人より魔力が多いから』と、昔カムラル老にもらつたものだが。

別にこれ一つではないし、魔力の制御ならもうお手の物だったのでも、友達にあげた、ということにしておけばいいかな、くらいの気分だった。

「ふ、ふわあ」

だが、目の前の少女は、それを受け取りもせず、ただぽかんとカズのことを見ている。

というか、じいっと視線を固定して、外してくれなかつた。

「な、なんだよ……」

気圧されて、カズがそう言つた。

「す、す、す、す、きれい！　ボク、あなたみたいなきれいな子、はじめて見た！」

嬉々とした様子で、そんな事を言つてくる。

「ち、ちょっと待て！　オレは男だつ！　男に向かつてキレイとか言つなかつ！」

「えー？　そなの？　別にいいじゃん。きれいなものはきれいな

んだし、うは、もて帰りたーい！」

「うおひ、ちゅ、やめひ！ あ、あだだだつ！」

言つてこむ」とはマーサーと回じよつに思えなくもないが、意味は大分違つらし。

獲物を捕らえるかのよひに、田にも止まらぬ速さでカズをぎりりとさば折り……

いや、抱きしめたかと思つと、その華奢な腕で易々とカズを振り回す。

知らないやつ同士だから面を外してもいいだらつと油断したのがいけなかつたのか。

「…… もゆひ」

見た目には微笑ましい光景に見える中。  
カズが強烈な圧迫と回転に田を回して、そのまま意識を手放すのに。

さほど時間はかからなかつただひつ……。

(第17話にづく)

## 17、ラ・フィエスタ

「……」

一体どれほど意識が飛んでいたのか。  
はつとなつてカズが目を覚ますと。

ちゃっかり髪留めを付け終えている少女の申し訳なさを含んだ笑  
顔が、目の前にあつた。

「『』めんね？ いつもよく怒られるんだよねボク。お気にのおも  
ちやとか、すぐこわしきやうの」 「な、何！」

その言葉に青くなり、カズはがばつと起き上がり慌てて胸元に  
ある『キャマー『ラ』』を確認し、

とりあえずどこも壊れていなさそうなのを見て、ほつと息をつく。

気に入られたものがカズ自身であることに、気づいていないのが、  
カズらしいといえ巴カズらしいのかもしれないけれど。

「ね、それなに？」

「これか？ これはキャマーラつていうマジックアイテムで……」

カワダから説明されたのと同じ説明をカズは少女にしていく。  
すると、少女の表情がぱつと明るくなつて。

「それ、すげくおもしろそう！ ねね、ボクもとてよ！」

「だ、ダメだって、コイツは使用回数に制限が……って、までよ。お前、もしかしたら、ガイアットの姫、とかじやないよな？」

カズはそこでようやく当初の目的を思い出した。

確かに『死靈術』は、ガイアット王国に広く広まっているものだから、

もしかして、と思ったわけなのだ。

「ううん。ちがうよ。ボクはサンツースールから来たの。あ、そだ。ボクまだ名乗ってなかたね。

ボクはナナ。ナナ・サンツースールっていうんだ。ガイアットじゃなくて、サンツースールのお姫さま、だよ」

そんな、思いもよらぬ答えが返りてくる。

つまりこれは、期せずしていきなり目的を果たせてしまつといふことになるわけで。

「ホントか？ なら話は早いな。オレはお前に用があつてここに来たようなもんだからな」

「そうなの？ えと……」

「あ、悪い、オレはカズ。カズ・カムラルだ」

ナナに倣つてカズも名乗ると、ナナはその名前に覚えがあつたらしい。

「カムラル？ つて、ユーライジア四王家のカムラルさんだよね

? じゃ、カズちゃんもお祭り参加するの?  
何だか嬉しそうに、そんな事を聞いてくる。

「お祭り? ああ、『建国祭』のことか?」

「うん、その中で、コーライジアと、サントスールと、ガイア  
ツトと、アーヴァインの四つの国の代表の子供で、『魂の残滓』集  
めのお祭りあるでしょ。ボク、サントスールの代表、なんだよ!」  
「へえ、すげえじやん。それってすげく名誉なことなんだろ?」

しかも、その『お祭り』の相棒として、神と称される『神型』の  
魔精靈を特別に呼ぶらしい。

カズでなくとも、是非参加したい、建国祭の最大の催し物である  
のだが。

「そういうや、コーライジアの代表って誰なんだろうな? 少なくと  
も、オレじゃないと思つけど」「え、そつの? そつかあ……」

もしさうであるのなら、とっくにカムラル老あたりからその話を  
聞かされていいはずだった。

そうでないということは、他の三家の誰か、なのだらう。

その辺も、マイカに聞けば分かるかもしれないけれど。  
思つた以上に落胆している様子のナナが、少し気になつたカズで  
ある。

「……どうかしたのか?」

「ううん。カズちゃんが代表さんならもしかして、アーヴァインの代表のひとが誰か知ってるかなておもたの」

三つの国の中で、ユーライジアから一番遠く、大きな山を越えた先にあるという魔精靈の楽園、アーヴァイン。

カズは、知識としては知つてはいたが、ユーライジアと虹泉で繋がつていないので、詳しいことは知らなかつた。

「そつか、悪いな。オレ、ユーライジアの代表者も誰だか知らないからなあ。

というか、オレの耳に入つてこないつてことは、まだ決めてもない可能性もあるけど……

その、アーヴァインの代表者が、どうかしたのか？」

「あ、うん。その……もしかしたら、ボクが小さいころ、助けてくれた王子さまかもしれなくて……だからうれしいから」

カズの問いに、はにかんだよつに答えるナナ。

しかし、すぐにまじめな顔になつて。

「だけどね、ボク、もともと身体弱いんだ。でも、代表者になれる子供はボクしかいなくて……

ほんとは今、お城のベッドから動けないんだけど、その、王子をまたどうしても会いたかたの」

だから、幽体離脱などという高度な魔法を使ってまで、ナナはここにいる。

つまりはやうこつりとりしき。

ナナしかサントスールの代表がいないのなら、  
国としての体面、ところのもあつたのかもしれないが。

それでも、こいつてここのいるナナをすうじと、カズは思った。

「……あ、このこどじいしか知らない秘密だたのに、言つちゃった。  
でもいーか。カズちゃんになら」「そ、そうなのかな?」

そう言わると、照れくせいやうやうのカズではあつたが、  
言われて悪い氣もしないのも確かである。

そんなナナに、何かしてやれる」とはないものか、カズはそう考  
えて。

「あ、やうだ。ナナはそこいつの見た目とか名前とか、知らないの  
か?」

「えとね……名前は聞けなかつたんだ。でも、すうぐかこよかた  
の覚えてるよ」

ある意味子供らしいナナのそんな言葉に、それじゃあ何も分から  
ないのと同じだと思いつつも。

なんでそいつはかつこよくて、オレはキレイ、なのかと、一瞬へ  
こたれそうになるカズであつたが。

そこでカズに、ナナのためにもなつて、自分の仕事もこなせる、

いい案が浮かび上がった。

「そうだ、よし。」の『キヤメーラ』でナナの姿をとれぱいんだ。

その王子をまつてのは、ナナのこと知ってるんだろう?」

「うん、たぶん……」

ナナはそれにはちよっと自信なさそうにしていたが。

「オレも、これから他の国の人たちと会つつもりだからね、ナナのうつりてる『絵』を持つて、その王子をまつてやつ、それがしてやるよ

そんなナナを励ますように、カズは僅かばかりの胸を張つてそう言った。

「ほんと! ありがとう、カズちゃん!」

「あでででつ、だーからそれはやめろつてー。」

無拍子のサバ折りに、カズは半泣きでそう訴える。

「あは、『ごめんね、カズちゃん。ボク、女の子のお友達ではじめてだから、加減わかんないんだよー』

「……お前、さつきまでの話、聞いてなかつたら」

条件反射でぶすくれるカズであつたが。

その時のナナの笑顔は。  
そんなカズでさえ嬉しくなつてくるくらいに嬉しそうだったのが  
印象的で……。

(第18話につづく)

そうして。

首尾よくカズはナナが「書いた『絵』と、ナナと自分が一緒に『書いた』『絵』を手に入れて。

ほくほくなまま、校舎の中、客人用の宿泊施設のあるところまでやつてきていた。

抜き足差し足で闇の中、廊下を歩くのも慣れ、しばりすると、誰かがそこにいるのか、明かりの漏れ出す一室を発見する。

カズはその、暗い廊下に光を落とす硝子窓から中を覗きこんでみる。

見た感じ人の姿はないように見えたが。

(マイカ、近くにいるな……)

バレバレなんだよ、とでも言いたげに、カズはほくそ笑む。

何しろ彼女は、スクールの『理事長』というおそらくはカムラル老よりも偉い肩書きを持っているだけあるのか、存在感というか、潜在魔力が半端じゃないのだ。

マイカ・エクゼリオ……闇の根源魔精靈と同じ名前だけあり、

近くにいればその強い闇の魔力を、すぐさま感じ取ることが、力<sup>ズ</sup>にはできた。

扉の取つ手に手を伸ばすと、鍵はかかっていないようで。隠れて、脅かすつもりなのかもしない。

よし、のつてやるか、とばかりにカズは、音を立てずにこっそりと部屋に入る。

そこは、一人部屋ではあるが、スクールに内設されている客室の中では最上級に類する一室だつた。

マイカの、カズにとつて比較的好きな部類に入る闇の気配は。部屋備え付けの、バルコニーのほうから漂つてくるのがわかる。

カズは、迷うことなくそつちの方へ一步踏み出して。

チャキッ。

僅かな鶴鳴り音のような、金属の軋む音と、襲い来る背後からのぞつとする心地に、

そのまま動けなくなってしまった。

「動くな。動けばその魂、刈られると思え」

まだ幼い声色ではあるが、しつかりと凄味のきいた少年の声がある。

まさかマイカではない第三者が潜んでいるとは夢にも思わない力ズである。

というか、マイカの力に紛れたせいなのか、カズに気取られないくらい気配を消すがうまいのか、

その少年の存在に、カズは直前まで気付くことはできなかつた。

首筋近くに添えられているのは、湾曲する刃のようだ。

その言葉の通り、それはおそらく、魂を刈るために作られた所謂『死神の鎌』であろう。

産毛が逆立ち、冷たいものが背中に落ちる。

なるほど、カズの細く頼りない首など、容易く刈つてしまえるだろう圧迫感が、そこにあつた。

「ははっ」

カズは、そのベタベタな危機状況に、思わず笑みをこぼしてしまう。

恐怖から来る部分も全く無かつたと言えば嘘になるが。

危険な場所に潜入して危機に陥る、なんて、ある意味憧れていた

……

言い方はあれだが、カズが求めていたものが、そこにあつたから

なのかもしれない。

「……中々の度胸ではないか。今の状況、分かつていなければあるまい」

「……が、勝氣で自信満々で、それでいてちょっと高圧的な、そんな言葉。

「あるまじって、ガキのくせにおもしれーしゃべり方だな、お喋り方がこまつしゃくれて面白くて、カズは余計に笑みをこぼしてしまつ。

「お前こそ、全く持つて不釣合いな、興味深い喋り方をするではないか。

はつ、まさか、お前もそんななりで、『男』だ、なんて言うのではあるまいな！」

「……だったら、どうした？」

カズにしてみれば、すゝぐ、すゝーく引っかかる言い方ではあつたが。

いきなり初対面で『男』だと認められたのは始めてに近かつたので、ちょっと気分のよくなるカズである。

だが、それからすぐに羽交い絞めにあつた状態、

その頭上で、今まで感じたことのない魔力、魔法が発動する気配

を感じ取り、カズは硬直した。

マイカとグルだと思つて強気だつたが、そうじやなかつたのかと。前方は刃に包まれて逃げ場はないし、実はほんとに命の危機なのかと、カズは内心焦つたが。

「ほつ、良かつた。……本氣で人生嫌になるところだつたぞ」

なんてわけの分からぬ、妙に安堵したよつな声がかかり、カズは突然解放された。

「ふむ……お前、名をなんと言ひ」

振り向いた先にいたそいつは、言ひなれば全身縁、だつた。髪も、瞳も、服装さえも。

いかにも王子、といつた風合いだつたが、思つていたよりも嫌味を感じさせない雰囲気がある。

「名乗るときは聞いたほうが先、つて言いたいとこだけど、めんじくさいから名乗つてやろう。オレはカズ。カズ・カムラルだ。……お前は？」

「ケイ。ケイ・ガイアットだ。先程はすまないこととした。これでも一国の王子、何かと狙われやすい性質なものでね」

年のことと同じくらいだらうか。

「この年で、常に誰かに狙われるかもしね、なんて普段から考  
えていふとは、

大変なんだなあとしみじみ思つカズである。

ガイアットは、そうこうしたイザゴザが多い国らしい、  
そういう意味でも自分は恵まれているのだらう。

「あ、そう言えば、さつきの魔法、なんだつたんだ？」

「あ、ああ。【魂見】<sup>（ンカル・シーカー）</sup>と言つてね。

かけたものがオレ様に対し、害あるもののかどうか……なんて  
ことを知ることができるのだ」

「ふーん。……で、オレはどうだつたわけ？」

カズはからかうように見上げて（やつぱりケイも、カズより背が  
高かつた）そう言つと。  
ケイはおそらく同じような顔をして。

「……少なくとも、オレ様の命を狙う女密偵、じゃないことは分  
かつたよ」

言葉通り、からかいをからかい返すような、それで ire 何故か  
不快と感じさせない態度で、

そんな事を言つ。

喋り方といい性格といい、面白い奴だ。

お互いの最初の印象は、そんなところだったのかもしれない。

それが、一生ものの恋に付かぬまいといひながら、やまつおの匂に  
に知る由もなかつたが。

(第1-9話につづく)

## 19、Complete Darkness

……と。

「あれ、誰かと思つたら、やつぱりカズだつた。こんなところでこんな時間になにしてゐる? よばい?」

唐突に声がかかり、返事する間もなく目に痛いほど桃色のフリルつきドレスを着た、ブロンドボブの女の子が無遠慮に割つて入つてくる。

深い色合いを出す瞳はエメラルド。  
そこには……見た目の幼さとは裏腹に、長年生きてきたものだけが見出せるような陰影があった。

その少女の名は、マイカ・エクゼリオ。

このスクールの最高責任者であり、これでもカズの十倍は軽く生きている、らしい。

マイカの言では、人間だったらカズと同じくらいだよ、とのことだが……。

なんと言つか、いろいろな意味で何かを超えたお人であった。

「よくわからんねーけど、違うとだけ言つとくよ、マイカ」「また、またあ。頭でっかちのおませさんのがせこー」「言つてろよ……」

「ぬおつ？ よ、呼び捨て？ カズ……つてもしかして、マイカ様の知り合いなのか？」

いつものお決まりのやり取りを一人でしていると、  
ケイが田を白黒させて、そう聞いてくる。

カズに対しても、ひょっとして失礼な口を聞いてしまったのでは、  
といった反応をしているケイであるが、そうなってしまふのも、  
仕方のない事なのかもしれない。

カズだって、カムラル老より田上で年上の者に対し、  
同年の友人のような扱いをするのはいかがなものかと自分で思つ  
たりするのだが。  
マイカ本人がそのほうがいいと言うのだから、仕方がなかつた。

「知り合いつて言うか、友達？ そう言つちゃつていいのかよく  
分からんけど」

「あたしとカズは『らぶらぶ』、なんだよ~」

「そ、そうなのですか……」

一人のやり取りに、ケイの呆けたような咳き。  
その様子だと、大層混乱してるんだろうなとカズは思つたが。  
意外にも早く復帰して、ケイはカズに向き直る。

「カズ・カムラル……カムラル、そつか。コーライジア四王家の。  
だが、だったらどうしてこのような時間に、しかも、密偵のよう

な真似をして

「あ、だからそれはあたしも知りたいよ？ 何かあったの？」

そう思うのもつともなのだろう。

カズはこれで本題に入れるな、とばかりに、ここに来た理由を話すこととした。

マイカには元々話すつもりだったし、ケイはそもそもカズがここに来た目的の人物だといつていいだろうからだ。

そんなわけで。

カズが、ナナの時と同じように、今回の仕事を説明すると。

「ふーん。おもしろいね。いいんじゃないの？」  
「オレ様も、かまわないぞ」

二人は快く頷いてくれて。

カズは既に慣れた手つきで、自分やマイカは別に必要ないことも忘れ、

三人で書いたものをとつたり、一人で組み合わせを変えたり、一人でとつたり、何枚も何枚もとつしていく。

思ったより調子に乗ってしまったのは、

ケイがマイカやカズをさりげなく、それでいて自然と盛り立てているせいもあったのかもしれない。

そんな風にしばらくとり続け、このくらいあればいいかな、なんてカズが思っていると。

「ねえカズ。よかつたらさー、これからしばらくケイたちの遊び相手になってくれない?」

「うん? ああ、いいけど」

ふいに思いついたように、マイカがそんな事を言ってくる。

それは、ケイだけでなく他の国から来た代表者の子供たちも含めてのことだろう。

カズは、あわよくばそのつもりでもいたから、それにはただ頷いて返す。

「マイカ様……すると、父上は?」

「あ、うん。いつたん帰つてもうひとつこじたよ。

しばらくあたしたちで面倒見るつて言つておいたから。

それで、コーライジアの土地に慣れるためにも、案内役が必要でしょ? カズなら適任だろ? からね」

ケイの問いか珍しく、まじめな口調でマイカがそんな事を言つ。実の所……現在、お互いの国同士、険悪といつほどでないが、仲がいいとも言えない状態なのは、カズも知っていた。

これは、その緩和の措置なのだろうと、カズはなんとなく考える。

「それじゃ、みんな連れてどこかへ遊びにいつてもいいってこと?」

「うん、すぐつてわけじゃないけど。ケイたちにはしばらくここ

にいてもりつことになると思うから……どつかいいとこ、ある?」

「……そうだな。やっぱり、ライジアパークだろ。今さ、世界のマジックアイテム展、やつてるんだ。確か、一番の田舎は……マジックアイテムで作った動く世界地図、だつたか」

「さすがカズ。これなら任せてもよさそうだね」

カズが思いつくままに楽しそうな遊び場をあげると、マイカは感心したように手を叩く。

しかし、ケイは思ったより反応が薄いようだつた。

まあ、それはそうかもしれない。

今のは、カズが行きたいところ、なわけなのだから。

「あとは……大迷宮とか……あつ、そうだ。『サークス』！  
南方から魔法と魔精靈のサークスが来るって言つてたな  
「サークスか！　いいな、それ」

窺いながらカズがライジアパークの出し物をあげていくと。お気に召すものがあつたらしく、ケイの顔が興味津々なものに変わるのがわかつた。

「じゃ、サークス見に行くぞ、約束だ」

「ああ、よろしく頼むぞ」

ちょっと偉そり言つてケイ。

カズはそれに苦笑しつつも、それにしっかりと頷くのだった……。

(第20話ひづく)

その後。

カズは、最後の一国……アーヴァインの國の人たちに会うために、マイカからもらったカンテラを持って歩いていた。

マイカは初め、ついてくるつもりだったようだが、外に出ていられる時間がもうないとのことなので、カズは丁重にお断りした。

ケイには、こんな時間に出歩くなビ王族のすることではない、なんてカズをからかっていたけれど。

カズにはナナのためにアーヴァインの代表者を確認する必要があつたし、

どうせなら他の三国全ての人たちに会つて、仕事を全うしたい、というのもあつた。

ただ、クマのような男女に気をつけろ、

なんてマイカの「冗談半分の言葉が気になるといえば気になつたが

……。

カズはそれから迷うことなく、再び明かりの漏れた、別の部屋

の前へとやつてきた。

今までお忍びだつたが、もはや公認みたいなものなので、気分的に楽なのもあつただろ？

カズは、その光の漏れる扉を叩いた。

「お母さん、遅いよ。……って、だ、誰？」

「きなり扉が開いて、びくつとなるカズであつたが、驚いたのは向こうも同じだつたらしい。

細かなウーブのかかる、長い長い黒髪。

曇りのない黒一色の大きな瞳の中には、惑い、そして、多少の恐怖も含まれているかもしれない。

といつより、出会い頭でいきなり泣きそうだつた。

「お母さんじやなくて悪かつたな。オレはカズ、カズ・カムラルだ。お前はアーヴァインの……」

王子か？ と聞くといつとして、カズは息をのむ。  
おやうく、カズと同じくらいの年頃なのだろうが。  
やこじこじゆのはじう見ても女の子としか言いようがなかつたからだ。

「の頃の年代の子供は、えてして中世的であると言えぱやうだらうが。

そんな見た目よりその態度とか仕草とか、女の子らしここいつた  
ほうが、  
しつくり来るような気がする。

だが、だったら別に言いよどむ」とはないはずなのだ。  
なのに、どこかひつかかる。

なんだか似たもの同士を見ているかのような、そんな気分になつ  
てくるカズである。

「あ、ぼ、僕は……ダイス・アーヴァイン、です……」

礼儀をわきまえているのか、突然やつてきたカズに対し、怯えな  
がらもきちんと挨拶をしてくる。

なのに、一度似たもの同士、なんて思つてしまつたせいなのか。  
そんなおどおどした態度が、なんだかしゃくにさわるカズである。

とはいって、勝手にやつてきたのは確かなので。

そりや戸惑つこともあるだらうつて納得し、カズは言葉を続ける。

「ダイスって言つたよな。お前、今度の建国祭の代表者か?」

「あ、はい。そうですけど……」

「んじゃ、この子のこと、知つてるか?」

「ええと……うーん、『めんなさい。知らないです』

早速本題に入つてみたカズであったが、期待空しくダイスは首を  
ふる。

「あのさ。ちょっと聞きたいんだけど、アーヴァインの王子で、この子にあつたヤツいると思うんだよね。ナナっていうんだけど」

この際、ダイスが男だろうが女だろうが一の次だった。

ナナの言つていた王子をまは、祭りの代表者じやないのは残念だつたけど、

代表者に選ばれたダイス自身だつて、それなりの地位なのは間違いないだらうから、

ダイスの兄か弟か、ナナを知つてゐるやつが分かればいい、なんて考へてのカズの言葉だつたのだが。

「アーヴァインの王子？　ええと、その、あの……それつて、僕のことかな？」

「え？　だつて、ナナのこと知らないんだろ？　お前、兄弟とかいないのか？」

「はい、いませんけど……」

どう見ても王子には見えない、なんて心情は自身の首を絞めかねないので。

カズは心のうちで留めておくことにした。

つまりどうこうことなのかと、考へる。

ナナは確かにアーヴァインの王子と言つてゐたけれど、ダイスは覚えがないといふ。

ナナが勘違ひをしていたのか、それともダイスが忘れてしまつているだけなのか。

ただ、ナナ自身も、名前も顔も覚えてないのだから……

ダイスだつて忘れている可能性のほうが大きいかもしれない。

これは、直接会つて話したほうが早いんじゃないのかつて、至極当然な答えに行き着くカズ。

それでもまあ、その事をだしにしてナナにも『キャメーラ』を使わせてもらつていたし、  
こうなつたらダイスにもお願ひしておくか……なんて思い立つち  
やつかりなカズである。

「そつか、じゃあ仕方ないな。それよりさ、ダイスにお願いがあ  
るんだけど、入つてもいいか？」

ただ、キャメーラは、光の少ないとこらだと、うまく効力を発揮  
しないというのをカワダから聞かれていたので、目的を達成する  
ためにはまず、明るい部屋に入れてもうひとつが必要だったのだが。

「あ、ええと……それは、  
ダイスはどうかと思つよひ、曖昧な言葉を口にする。

「何だ？　だめなのか？」  
「あ、いや、駄目つていうか……その」

ダメならダメでしようがないといつわけでもないが、はつきりし  
ない、  
煮え切らないダイスのそんな態度に、なんだか腹がたつてくる力  
ズである。

「その……あの、こんな遅い時間に余所様のお嬢さんを部屋に入れるわけにはいかないから」

「それをお前が言つなあ！ オレは男だつづーのつー！」

いかにも、紳士な大人が言いそうな台詞を、世界一似合わない自称王子が呟いたのを見て。

同属嫌悪つてやつだろ？

そんな良くな分からぬ感情に押されるままに、カズは思わず声をあげてしまった。

今までは、こんな風にたくさんの人と出会つなんてことがあまりなかつたから気付かなかつたが。

これから自分は、会う人会う人に、ずっと同じことを主張していかなければならぬのかと思つと、何だかやり切れないカズである。

かといって、カムラル老の望み通りに、抵抗せずにそのまま流れていくのも嫌だつたのだ。

「うわわっ？ つて、きみ、男の子だつたの？ え、何で……？」

嘘だらうといつよりも、何を世迷言を言つてこるんだとつた雰囲気が、

ダイスの口ぶりから伝わつてくる。

「てつ、てめーだけには言われたかねーぞつ、こひやうーつー。  
「わつ、わあつ」

カズはダイスに組み付き、襟元を掴みあげて揺さぶろうとする。ダイスは情けない声すらあげているが、カズの力がないのかダイスの力が強いのか、

頭一つ分しか違わないダイスはびくともしなかった。

端から見れば、カズがダイスにじやれているようにしか見えないだろう。

「……」

事実、その様を見ていたダイスの相棒にして忠実なる従属魔精靈は。

それを見て主が襲われている、とは思わなかつた。

むしろ、何だか楽しそうだから自分も仲間に入れて欲しい、なんて思つたくらいで。

カズが、その存在に気付いた時にはもう、それはカズの足元までやってきていて……。

(第21話につづく)

## 21、Mother Rhythm

「……つ！」

瞬間、カズを襲つたのは総毛立つ嫌な予感。まるで、マーサーの歌を至近距離で聴いてしまつたかのよくなゾクゾク感がする。

しかし、その存在に気付いた時にはもう、それはカズの足元までやってきていた。

ぎょっとなつてカズが視線を下に向けると。

そこには青銀色の毛並みが柔らかそうで美しい、筒みたいに細長い体をした、齧のような小動物がいた。

いや、それはただの動物ではない。

全身から微弱に放たれる『光』<sup>セザール</sup>の魔力。

カズは、すぐにそれが希少だと言われている光の魔精靈……しかも、『』多分に漏れず相当高位な存在であることが分かつた。

「まつ、まさか、コーミール・ヴァンクル？」

氣位が高く、人の前に滅多に姿を見せない魔精靈。それが、こんな所にいるなんて信じられないが。

それより何より、カズは『光』<sup>セザール</sup>の根源に類するもの全てが、

何度も言つたが、大の苦手だった。

もともと大好き、というわけではなかつたのだが。  
それがマーサーとであつて最近とみに強くなつていて。

その、内心のカズの怯えを、それは感じ取つたのかもしれない。  
琥珀色の瞳で、じつとカズを見上げたかと思うと。  
氣のせいだと思いたいカズの心の内を見透かすよつこ、ニヤリと  
笑みを浮かべているのが分かつて。

「……っ

それに……カズが思わず息を呑んだ瞬間。  
まるで木に這い上がるヘビの「」とく、それは長い体を生かしてカ  
ズの取り付き、  
ぐるぐる回りながら肩越しにまで上がつてきた。

そして、カズにぎりぎり見える位置でがぱつと口を開けて……。

「ひやうっ？ ちよ、やめひつ、う、うわああああーっ！

べるん、と、身体の割りに大きな舌がカズのほほを撫で上げたか  
らたまらない。

「…………はふん」

力尽き、氣の抜けた声を漏らし、ばつたりと倒れるカズ。

「ああっ、ナオッ！ 何してるの？」

その後に、ダイスの慌てたようなそんな声が聞こえたような気がしたが。

その時にはまたしても、カズの意識はそこにはなくて……。

「何でもかんでも拾つてくれるんじゃないって、いつもいつてるだ  
る」

「ち、違つよ、お母さん。カズは自分でやつてきたんだって

「お前、ナオの時だって同じこと言つていたじゃないか」

「だから、そうじやないんだってば～」

とても野太い、頼りがいのありそうな声と、ダイスが困った様子で会話をしている。

何だか、その微妙に不穏な感のある会話に、カズは何とか埋もれていた意識を引っ張り上げ、田を覚ました。

すると、田の前すぐのところに、青白い小動物の顔があつて。

「う？ うあああ、く、くわれる、た、たすけてーっ！」

我ながら情けないなと思うカズではあったが、すでに心のダメージと化していよいよ、勝手にそんな声が出た。

「ナオ。カズが怖がってるから、じつちにおいで」

すぐ近くから、ダイスのそんな声。

すると、どうやら仰向けにベッドに寝かされていたカズの胸元に陣取つていたらしい、

ナオと呼ばれた光の魔精靈は、ちょっとだけ残念そうに鳴いた後、言われたとおりダイスの元へと駆けていき、その頭の上でうずくまる。

やはりナオは、ダイスの従属魔精靈のようだ。

契約してなければ、あそこまで人の命令を聞き、懐くなんてことはないだろう。

カズ自身、周りに結構そう言つやつが多かつたりするのであまり実感がなかつたりするのだが、

逆に言えば、カズと同じくらいの年頃で、すでに高位の魔精靈と契約しているすごいヤツ、といふことになる。

さすがに祭りの代表者に選ばれただけはあるなあと、カズが妙に感心していると。

「大丈夫かい、お嬢ちゃん。息子たちが迷惑かけたねえ」

「……つーあ、い、いえ」

マイカがクマみたい、と言っていたのはこの人のことなのだろう。やや気圧されつつも、野太くて暖かい声のほうへ身体を起こし、向き直る。

そこには……カズの何十倍の体格はあるんじゃないかなって思えるくらいに威圧感のある、

鍛えられた筋骨隆々の身体を持つ、大柄な女性がいた。

ダイスのことを息子と言っていたのだから、この人がダイスの母親なのだろう。

まるで似ても似つかないが、細かいウェーブのかかった長い髪が、それでも一人が親子なんだろうなってことを連想させる。

「え、えっと……あなたがダイスのお母さんですか？  
えっとあと、オレ、カズ・カムラルっています。

マイカ……じゃなかつた、理事長から話、聞いてませんか？」

お嬢ちゃん呼ばわりされることを訂正する余裕もなく、  
カズにはもともと不法侵入している自覚もあつたりしたので、直感的になんか怒られる！

なんて思つてしまい、あたふたしながら自分がここにいる理由を主張しようとして試みる。

よく考えれば、カズがマイカに他国の王族の子供たちのお世話係

に任命されたのは、

ついさっきだつたわけで、田の前の女性がそれを知りうるはずはないわけなのだが。

それでも、何かしら話が通っていたのか、ああ、とひとつ頷いてくれて。

「ああ、あんたがアリスの子か！ そうかそうか。……マイカ様からは話を聞いているよ。

アタイはミリカ。見ての通り、こいつの母親さ。ふーん。そうかいそうかい。

マイカ様の言つた通りだねえ。ほんとにアスカ様によく似てる」

しみじみと懐かしそうに、ミリカと名乗った女性はつぶやいた。

カズは、会つたこともなかつたけれど、その名前はよくカムラル老から聞かされていた。

カズは、祖母、カムラル老にとつて妻である女性によく似ていると。

「お母さんとばあちゃんのこと、知ってるんですか？」

その女性、アスカ・カムラルは、健在であつた頃、みんなをまとめるとても偉い人だつたらしい。

カズが、マイカのことを呼び捨てなのは、カズにアスカの面影があつたから、というのもあるのだろう。

だが、マイカもカムラル老も、一人のことをあまり話したがらなかつた。

特に、母親であるアリスのこと、父親のことは、ほとんどと書いてほどに教えてもらえなかつたのだ。

と言うより……『虹泉の迷い子』であつたカズには、本当はそんな人たちはいないんじやないかつて、そう思つていたくらいである。

この人なら、何か知つていて……もしかしたら教えてくれるかもしない。

だからカズがそう聞くと。

「ああ、よく知つてゐるさ。特にアリスはね、あたしの永遠の好敵手だつたから、

若い頃はよくやりあつたものさ。まだ、その時の傷が残つてゐるくらいだよ」

そう言つて、豪快に見せてくれる、肩から背中にかけての火傷の跡。

この人とやりあえる母親つて、一体どんな人だつたのだろう。

家にある肖像画で、なんとなく分かつたつもりでいたが。これは思つていたより大分想像と違う人、だつたのかもしない……なんてことをカズは思つ。

「こじれも何かの運命なのかねえ。あんたがこじつのよき相手になつてくれれば、これほど嬉しいことはないねえ。そう、拳で語り合つたりなんかして」

「お、お母さん」

「……ははは」

カズの頭ほどもある拳で構えて見せながら、やつぱり懐かしそうに、そんな事を言つゝ力。

ダイスは当然のようにおどおどと困惑ついていて。

そんなダイスと視線のあったカズは、苦笑で返すしかない。

どう客観的に見ても、田の前の女の子みたいなこじつと殴り合いなんてありえない。

たぶん、お互にそんな事を思つていて……。

でも、そんな風に一緒にいるんでいくのは何だか悪くない気もあるカズである。

それに、もともとマイカにお世話係頼まっていたし、似たようなもの？ だらうと。

だからカズは、マイカに頼まれたこと、『キャメーラ』のことを含めて、

そんなミソカの言葉に肯定の意味で、一通り事情を説明した。

「そうかそうか。あんたがこいつの面倒見てくれるってかい。

マイカ様にこの子を置いていけって言われたときはちょっと心配

だつたけど、

これなら安心できるってものだよ。……よかつたな、ダイス」

「はい。カズ面白いし、良い人みたいですから」

「おいおい、いきなり買いかぶりすぎだつて。……つて、ミリカ  
つちくるなつ！」

ミリカとダイスの言葉に思わず照れるカズ。

するとそこには、ぱつと跳躍してナオが飛びついてくる。

カズは、一度と食らうのかと、ナオから必死に逃げ回った。  
どうやら、怯える様も面白いらしく、たいそう気に入られてしま  
つたらしい。

だ、

魔性の女と書いて魔女つてやつかねえ」

カズがミリカの背に隠れると、ミリカは楽しげに豪快に笑い、  
この大きな手で簡単にナオを捕まえてしまひ。

最初はむずがっていたナオだったが、その大きな手の中が心地いいのか、  
すぐに大人しくなり、ついには寝てしまった。

ミリカが言うには、ナオは人を識るらしいとのことで。  
こいつがこうやって懐くってことは、よっぽどなんだよ、と、や

つぱり豪快に笑うミリカ。

だから買いかぶりなんかじゃないと、そう言いたいのだろうが。

「んじゃ、キャメーラのほうも、お願にしていいかな？」

カズは、そんな風に言つて、誤魔化し笑いを浮かべることしかできなかつた。

そうやつて持ち上げることがくすぐつたい、といふこともあつたのかも知れなけれど。

初めて感じる、カズの知らない母と言う存在に。  
どこか戸惑つていたせいも、あつたのかもしれない……。

(第22話につづく)

## 22、明けない夜が来ることはない

その後。

残ったキャメーラに内蔵された全ての魔力を使い、ダイスやミリカの姿を数枚の『絵』に留めた後。

カズはまたの約束をして、早々にお暇をした。

実は帰り、どうやって出ようか考えていなかつたのだが。  
校門に駐在する守衛の人には話しが通ついたらしく、特に問題なく帰路につくことができた。

カズは、家までお送りしましようかと、親切にしてくれた守衛さんの心遣いには丁重にお断りを入れ、一人、月明かりに照らされた夜道を飛んでいく。

飛んでいく、と言つのは実際に飛んでいるというわけではない。

カズは今、どこかの家の屋根の上にいた。

それは、カズが憧れていた、やつてみたかった事の一つ。

颯爽と星空の下、屋根の上を駆けていく。  
まさしく、『夜を駆けるもの』のよひに。

なるべく音を立てずに、屋根から屋根へ、風を纏つて飛ぶように、カズは駆ける。

それは、何だかドキドキして、楽しかつた。

これは下手したら、病み付きになるかも知れない。  
カズが、そう思った時。

そんなカズの行く手を塞ぐように、そこに彼女は、いた。

月明かりを受け、それ 자체が発光しているかのような、薄い檸檬色に輝く長い金髪。

心まで見透かされそうな、赤みがかかった漆黒の瞳。

月と見紛うばかりの白い肌。

これから、どこかの夜会にでも出席するかのような、少し派手目な桜色のイブニングドレス。

カズのマント姿とあいまって、まるで舞台の一幕を切り取ったかのようだな、

またしき、カズと対比しても申し分ない……神秘性すら漂つ少女。

「カズ、みーつけた」

「……」

桜色の唇から紡がれるのは、恋しいものを思ひようにも、長年追っていた仇敵を見つけたようにも聞こえる、それでいてカズの心に、頭に、魂に、直に響く声。

カズには予感があつたのかもしれない。

自分がそんな場所にいて、目の前に彼女がいることを。

だから、そう言つた彼女が楽しそうに笑みをこぼし、こちらに向かって手のひらを向け……

そこから、色とりどりの魔力を秘めた光球が生まれ出て、それが一寸違わずカズに向かつて飛んできても、カズは自分でも驚くくらいに落ち着いていた。

「【風】よつー！」  
ガーレス

それを避けるように、一息吐いて風の魔力を解き放ち、そのまま風に巻かれ、彼女のいるほうへと跳躍する。

交錯する視線。

カズが彼女の頭上を飛び越えて、ただ彼女は笑っている。ただ、楽しげに。

カズが間合いを取つて再び屋根に降り立つと。

目標を見失つた色とりどりの光球は、互い互いがぶつかつて……。

凄まじい音をたて、爆発する。

爆風が荒れ狂い、少女の髪を、カズの髪を乱暴に撫でる。おそらく、あの球一つ一つが、圧縮され、閉じ込められた魔力の塊なのだろう。

直撃を受ければ、カズ自身ただではすまなかつたかもしれない。手加減できないのか手加減する気がないのか、どちらにしろ、厄

介な相手らしかつた。

「よけたらダメだよ~」

言葉とは裏腹に、嬉しそうな笑顔。

「アホか。よけなきや死ぬだろ？が」

カズも言葉を返し、にっこり笑う。  
いきなり襲われて、笑い事ではないのだけど。  
楽しい、と思つてしまつたのだ。カズも。

ほんの一瞬だつたけど、身の毛のよだつほどに死の近い、ギリギリの感覚。

同級の友達とも、喧嘩めいた力のやり取りなどをするのだが、  
それはそれでどこか一線を引いていると言つか、遠慮している所  
はあつた。

しかし、目の前の彼女は、楽しそうにしていながら、  
こちらの命を奪いかねないほどの本気を感じた。

なら、いつも本気、出していいんじゃないかな?  
それが礼儀じやないかつてそう思えて。

カズは、左手に全神経を集中する。  
やがて生まれるのは、漆黒の炎。

それを見た少女は、怯むどころか一層楽しげに微笑みをこぼし、右手のひらを広げ、再度色とりどりの光球を生み出す。

互いに構え、お互いを見つめあうように対峙する。お互いの瞳には、邪で淀んだものは何一つなく。

だからこそより残酷に美しく、お互いを瞳の中に映して。それは喻えるなら、二人だけの世界に入ってしまったかのような、そんな感覚。

そのことにカズは苦笑して。

戦いの火蓋を切つて落とそうとした、その瞬間。

急に周り、下のほうが騒がしくなり、カズははっと我に返った。

よく考えれば当たり前のことではあるのだが。

「ここが一人だけの世界だなんてことは勿論なく、辺りに住む人たちが何事かと集まってきたらしい。」

カズは慌てて炎を引つ込め、ついでに仮面をかぶつてその場を去ろうと踵を返しかけるが、

周りの状況に気付いていないのか、それともどうでもいいのか、そんなカズを攻撃せんと、手のひらをこちらに向かっている少女の姿が目に入った。

「ちょっと待て！ 今は撃つなつて。そんなことしてる場合じゃねーだろ。早く逃げないと！」

「え？ わ、わあつ、な、なんで？」

「なんでって、お前のせいだろが、バカつ！」

カズたちの存在に気付き始めた人もいるようで、いざれば『風紀』（町の治安を取り締まる人たち）がやつてくるのも時間の問題だらう。

声をかけてやる義理なんてなかつたのだが。逃げている時に打ち落とされてはたまらないので、とりあえずそう忠告し、後は知るか、とばかりにカズはその場を離脱する。

確かにお騒がせはしたが、何か被害があつたわけでもない。咄嗟に顔を仮面で隠したし、風紀の物だつてそれほどじつこく追つてくることはないだらう。

そう、思つていたのだが。

「カズ～まーてーっ」

どうしてか、少女の方は思いのほかしつこかつた。

「待てと言われて待つヤツがあるかーっ！」

なんで追いかけてくる、と言つかそれ以前に。

なんで襲い掛かってきたのか、あんな所にいたのか、どこの誰なのか、

思わず場の空氣に流されるといつてあつたが、何から今まで摩訶不思議な少女だつた。

何より問題なのは、こゝちは知らないのに向ひまほひちのことを知つてゐることだらう。

しかも彼女は、カズを狙つてゐるといつよりも、カズの持つてゐるもの、

持参した布包みにくるんで抱えていた、『キヤメーラ』とキヤメーラで撮つた『絵』を狙つてゐるよつとも見える。

何のつもりかは知らないが、これは大事なもの……物として残る思い出だつたから、

そう簡単に失うわけにはいかなかつた。

だが、少女のほうもやけに真剣なのは確かで。

しかも所構わざ魔法を放つてきて、かなり性質が悪かつた。

一瞬でも楽しい、なんて思つたこと、後悔し始める頃には、すつかり町外れまできてしまつていて。

既に空が白けており、新しい一日が始まつとしていた。

「おい、もう諦めりつて。もつ口も昇つてきてるぞ。いい加減、面倒くせえんだけど」

言つてもどうせ聞いてはくれないだろうけど、カズは疲れた声で、目の前の少女の声をかける。

しかし、それを聞いた少女は、辺りをきょろきょろと見回して。

「あ、ほんとだ。もう朝だね。うーん、楽しかった。それじゃ  
帰るよ、またね、カズ」

本当に、ただ遊んでいて、家に帰るかのよつな気安い雰囲気で、  
そんな事を言うと。  
カズが返事をする間もなく、さつさと身を翻し、かと思つたらい  
きなり忽然と姿を消した。

その瞬間、完全に太陽が顔を出し、辺りが明るくなるのが分かる。  
それは、まるで夜にしか存在できないかのようにも見えて。

「つて、んなわけあるか！」

カズは、くたびれた声色でひとりごちる。

あれは魔法だ。

朝になつたから消えたのではなく、おそらく【時】属性の高位魔  
法。

まあ、今更そんなことに気付いてもどうしようもない、といえば  
そうかもしねない。

結局、訳の分からぬまま追い回され、勝手に満足して帰つてい  
つてしまつて。

名前すら聞きそびれてしまったのだから。

「ま、またひで言ひてたしな」

きつと、また会えるのだね。ひ。

全くもつてくたびれ損しかないわけなのだが。

それも今日結ぶことのできた約束の一つだと思えばいい。

そんな感じに、自分自身を無理矢理納得させて。  
カズは長い長い一日を終えるのだった……。

(第23話につづく)

そして、次の日。

カズは予め決めてあつた時刻に、昨日と同じ場所でカワダと落ち合い、

借りた『キャメーラ』とその戦利品を手渡した。

結果、カワダはとても喜んでくれて、見合つた代金を払う、とまで言つてくれたのだが。

元々タダのつもりだつたし、何故だかカワダは他の『絵』よりも、カズ自身の『写つた』ついでと言つかオマケにとつた『絵』に対しういたく感動していく。

なんとなくノリで仮面をつけたままだつたカズは、まさか本人だとも言えず、結局のところ、報酬をもらひつゝことはしなかつた。

曰く、この本人が撮つたかのような角度が素晴らしい、とか、知り合いなら是非紹介してくれ、なんて凄まれて。変に恥ずかしかつたり、罪悪感とかがあつたからである。

だが、報酬を貰わなかつたことがさらに効果的だつたのか。タダよりも高いものはないというか、仮面の凄腕冒険者？ の噂は、

後日販売されたコーライジア新聞（カズ自身の『絵』が満載で、これまた恥ずかしかった）などから広まり、探さなくてもそんな力ズを頼つて、いろいろな仕事が舞い込んでくるようになった。

まあ、そこまではある意味予定通りと言えば予定通りなので、うまくいったと言えればそうなのだが。

連日「じぞつてカズを頼る人が絶えなくなつてくると、さすがにギルドも黙つてなかつた。

カズは、一応それでもギルドに引き受けでもらえなかつたものを選んでいたわけなのだが、ギルドにとつてはあまり気分のいいものではなかつたらしい。

カズが、すっかり荒稼ぎしてそろそろ自重したほうがいいかな、なんて思い始めた頃。

彼女はやつてきた。

「誰かと思つたら、やっぱりカズやんか。ちょっとおいたがすぎるので」

「つ！」

最近よく聞くようになった独特的の訛り言葉に、カズはギクリとなつて硬直する。

そもそも何かしら手を打つてくるだろう、なんて思つていたカズであつたが。

ギルドのその手は、カズの想像の遥か上をいつていたらしい。

まさかもうバレているとは。

なんて内心焦りつつも、カズは自分は呼ばれてませんよ、というふりをする。

しかし、背後に嫌な間隔で立つその人物は、やはり一枚上手だった。

「あーっ、マーサーがリカバースライムの大群に襲われとる！」

「何いつ！ 今助けつ…………はつ？」

いや、ただカズが単純なだけだったのかもしれない。

素直なカズの反応に、後ろ手に纏めた赤銅色の髪の小柄な人物、カズのクラスの担任であり、カムラル教会の会員生第一号でもある女性……ラネア・キャンベルは、お腹を抱えて笑い出す。

「あはははっ、リカバースライムが人襲うわけないやろ、単純つづーか、なんてーかもう、カズちゃんたら！」

「うぐぐ。卑怯なり」

アホなひつかけにまんまとはまつてしまつたカズ。  
しかしまあ、ここが潮時だつたのだろう。

バレた以上、無駄な抵抗はやめようと、カズは仮面を外す。

「あかんで、カズ。お師匠様心配させちや」

「だつて、ずるいじやん。オレだつて仕事したいし。

オレだつてじいちゃんみたいな人の役に立つこととか、冒険とか、したかつたんだよ」

ラネアとは、付き合いも大分長いので、

カズにとつては年の離れたお姉さん、といった感じでもあつた。

だから、じんな普段口にしないで内心で秘めているような、愚痴もついついこぼしてしまつ

それを聞いたラネアは、優しく微笑んで。

「でもな、カズ。お師匠様が駄目言つんだつて、ただ駄目や言つてるわけやないんやで。

今んといつまくいつとぬみたいやからええけど、カズが思つとる以上に、この世には悪意が満ちとる。カズが思いもよらん危険だつてある。そういうものから守りたいつて気持ち、察してあげな、あかんよ」

「わかつてゐる、わかつてゐるけど」

カムラル老がカズのことを思つて大事にしてくれることは。でも、本当はそこに自分の妻や娘を重ねてるだけじゃないのかつて、カズは思つてしまつのだ。

確かに、いつやつて外に出ていくことは、まだ子供のカズにとつて、とても危険なことなのかもしねい。

だけば、言われるまま何もしてなかつたら、今感じている楽しい気持ちとか、ドキドキとかを味わえなかつたんじやないかつて思つのだ。

だからカズはラネアに、思つまま心情を吐露する。  
ラネアはそれをただじつと聞いてくれていて。

「さよか。カズもそんなん考える年になつたんやな。  
でもま、今までみたいな仕事の仕方は、よしこいたほうがええな。  
相手の素性も目的も分からん、じゃ、何か起きてからじや遅いし  
な。

そんなんに仕事したいんなら、ウチがいいの、紹介したるよ?  
「え、ほんと? それじゃお願ひするよ、ラネア先生!」

ラネアからの仕事なら、カムラル老に心配させることはないのか  
もしれない。

今までみたいに、自由気ままに、とはいかないだろうナビ、それ  
ならそれで断る理由はない。

といふか、むしろ大歓迎なので、カズは二つ返事でそれを快諾する。

「そか、ほなら今からお願ひしてもええか?」  
「え? 今から? ま、いいけど」

ひょつとして、最初からそのつもりだつたんじやあ、なんて思つたが。

「もちろん、報酬はもらえるんでしょう？」

「当たり前やろ、仕事なんやから」

ラネアはそう言つていい笑顔。

何か、あまりに簡単に話が展開するので、何か裏がありそうな気がもしたが。

報酬が出るならまあいいか、なんてカズは、考えていて。

「で、仕事の内容はなんなの？」

それから……（ラネアと連れ立つて（どうやら一旦、学校に向かうらしい）その道すがら。

やつぱり仕事内容くらいは聞いておいたほうがいいと思い立ち、ちよっと前を歩くラネアにそんな質問をする。

「あ、うん、『アリオパンツァー』の町までの、行きと帰りの護衛……やな」

すると、ラネアは振り返り、そんな言葉を返してくるのだった……。

## 24、ロスト

今回カズたちが目指す場所、アリオパンツァーの町は。ヨーライジア大陸から西方に位置する四大陸のひとつ、『ターオイル』にある。

通常なら、相当な距離があり、そのぶんだけ日数もかかるが。スクールを経由すれば、アリオパンツァー行きの『虹泉』<sup>トラベルゲート</sup>がある。故に、日帰りで行つて帰つてこられるため、思つたよりも簡単な仕事なのかもしない。

なんて思つていたカズであつたが。

「護衛？　まさか先生に護衛が必要なわけじやあるまいし、他に誰かいいるのか？」

それより何より、気になるのはそのことだった。  
けれど、それを聞いたラネアはなんだか言い辛そうに、  
「うん、まあ……な。ラルシータのお姫様も一緒や」  
なんて事を言った。

「ラルシータ？　それつてもしかして、セリアつて子？」  
「なんや、知つとるんか？」  
「うんまあ、名前だけは。タカから話は聞いてたから」

カズは、その時のタカの」と、タカとの出合つたばかりの頃を、ちょっとと思い出す。

『ルナカーナ・スピア』と呼ばれる伝説の武器に適う人間になるために。

とても辛い修行を受けていたと言つタカ。

その辛いこと、やりたくないのにやらされれば、誰だつていつかは嫌になる。

それが、母親を失つたという記憶と重なつて、塞ぎしむりとも多かつたんだろ?。

そのことについてはつい最近知つたことではあるが。

だからマーサーに友達だと最初に紹介されたとき、ひじりじした暗いヤツだなんてカズは思い込んでいて。

いつだつたか突然、そんなタカは変わつた。

数日前みたいに、たまに落ちるときはあるみたいだけれど。今の人々のまとめ役で、中心で、真っ直ぐなやつに。

『オレが守らなくちゃいけないやつがいる。だからオレは強くならなくちゃならないんだ』

そう言って笑うタカに、今まで気づかなかつた本当のタカを見た

のは確かで。

ちょっととかっこいいじゃないか、なんて思つてしまつたのは、カズの正直なところで。

その、『ガラガラなくちゃいけないやつ』の名前が、セリアだつたはずだつた。

いつかラルシータへ遊びに行くときがあつたら、是非会つてみたい子だつたから、

ちょうどいいかもしない。なんてカズが考えていると。

「さよか。お互ひ会つたことはないが、知つとつたわけやな。それはそれは好都合、や」

ちょっと意味深な、ラネアの言葉。  
カズは首を傾げ、さらに問いかける。

「どうじうこと？」

「いやな、今日のこの仕事、ラルシータのセザール家と、アリオパンツァーのヴルック家共同で考案、開発するつちゅーハナシに関連してんねん」

「ほんと？ それって、『魔法を自らの意思で操り、人と変わらない魔道人形を創る』ってやつ？」

まさか、そんな国家主導級のものだとは知らず、カズは素直に驚きを隠せない。

魔道人形のふりなら、カムラル老との仕事でさんざんしてきたカズであるが。

人と変わらない、なんてレベルのものは、未だ完成には程遠いと言われていた。

それが本当にうまくいけば、歴史に残る快挙だろ？  
当然、それに関連しているといつこの仕事も、大きなものに思えてくる。

「そいや。でな、そんな魔道人形を創るにあたって、  
どうせならその原型となる人物をお互いに出そう、ってことにな  
つたらしいんや」

「ふむ。……じゃ、そのセザール側の原型に選ばれたのが、セリ  
アってこと？」

「せや、しかも彼女自身で志願したらしいんやけど……」

ラネアはそこで、言葉を切り、こつからが本題で問題なんだとばかりに、カズを見た。

「ほんまなら、ラルシータの長であるルレイン様か、それこそタ  
力なんかが一緒に来るはずやつたんやけど、ルレイン様はラルシ  
タを離れられないみたいで、タ力の方も、時期悪く用事が入つても  
うてな、まあ、その代理兼案内役を頼まれたんが、ウチなんや」

タ力の用事というのは、カズもなんとなくは知っていた。  
確か、トールとともに、『試練』と証した、ルナカーナ・スピア  
に適うものになるための修行のために、もう何日もラルシータにあ  
る洞窟にこもっていると。

ここ数日、一人とは会っていないし、さつとまだ帰ってきていないのだろう。

「で、まあ……ジブンの意思でコーライジアにまで来たはええけど、急に一人が怖くなつたんやうな。もう出発せなあかんのに、密室にこもつたり出てくれへんのよ、これが」

「なにそれ、自分で行くつていつたんだろ?」

しかも、魔道人形の原型として選ばれたつてことは、魔道人形が生まれる瞬間に立ち会えるわけで。

自分だったら一人の心細さより、わくわくする気持ちのほうが断然大きいだろうなあ、なんてカズは内心思つ。

「ま、そつなんやけどね。セリアにはセリアなりに理由、あるんよ。

……彼女な、自分がこの世界の存在じゃないって思つてるみたいなんや」

「……え?」

だけど、ラネアのそんな思いも寄らない言葉に、カズはぽかんとなる。

「何や、そこまで聞いてなかつたんか? 彼女な、『虹泉の迷い

子』、なんよ」

「……」

虹泉は、今までこそ便利な魔法装置であるが、実は分かつていないことが多い。

入り口と出口の間……その空間は、異世界に繋がっているとも言われており、

両親も、元住んでいたところも分からぬ者が、ふとこのコーライジアの世界にやつてくることがあると、カズはよく知っていた。

「そんな彼女を最初に見つけたのがタカ、らしいで。

でもって、身よりも帰る場所も無い彼女を、ルレイン様が養子にした。

だから……彼女はどこの誰とも知れない自分を最初に受け入れてくれた二人を特別に思つてゐる。

ち一ゅか、それ以外の人にはまだ慣れてないつちゅーか、心開けないんやろな。

カズなら、その気持ち、わかるやろ?」

「……ああ、そつか。だからオレの出番、つてわけか」

確かに、その気持ち分からぬこともない、なんて思うカズ。ラネアも、同じ年頃で同じような境遇のやつがいれば、安心できるだらうと、そう思ったのだらう。

この仕事が自分に任せようとしているのに、ようやくカズは納得がいった。

何故ならば……当のカズも、『虹泉の迷い子』だったのだから……。

(第25話につづく)

## 25、女友達

つい先日、ミリカに話を聞くまで。

『虹泉』の迷い子であることに對し、カズもセリアと似たような考えでいた。

カムラル老は、自分を傷つけないように、たまたま自分がアスカと似ていることをいいことに、

本当の孫だと……嘘を吐いているんじゃないかって。

その嘘が優しくて、本当の自分をさらけ出すようなこともなかつた。

ただ、自分を受け入れて欲しくて……必死だつた。

「ま、そうゆーことや。カズの言葉なら……わがままお姫様も出てきてくれるかもしれんやろ?」 「そう簡単にいくかなあ?」

境遇は確かに似ているかも知れないが。

だからといってそれで受け入れてくれるかどうかは別問題なんじやないかなって、カズは思う。

なのに、ラネアは何かを企んでいそうな、カズが微妙に不安になる笑みを浮かべて。

「大丈夫やつて、初めに言つたやろ。会うんは初めてでも、セリ

アcate カズのこと知つとるから、そんなカズの言葉なら聞いてくれるんと違う？」

なんてことを言つラネア。

カズは、なんだか楽しそうなラネアの雰囲気に、さらに不安が増長したが。

まあ、どちらにしろ会わなきや始まらないんだろう。

「わかつた。とにかく声かけてみるよ」

「ほな、よろしく〜」

我関せずなのか、それだけカズに任せることに自信があるのか。頷くカズに、虹泉の待合室で待つてるで、なんていい残し、去つていつてしまつラネア。

「何か、嫌な予感がするなあ……」

それを見送り、まあ、これも仕事の一環なんだろうなと割り切つて。

カズはセリアがこもつて出でこないらしい、校内の密室へと向かう。

それはケイやダイスとたちと出会つた場所とは別棟……

それでもたいして格の変わらなそうな、分厚いチョコレートみたいな扉の部屋、だった。

「もしもし、セリアいるかー？ オレ、カズ・カムラル。  
今日はお前と一緒にアリオパンツァーに行くことになつたんだけ  
ど……」

カズは扉を叩き、とりあえず大声で中に聞こえるように名乗つて  
みる。

だが、そこで言葉につまり、カズは考え込んでしまつた。

それから、何を言えばいいのだろうと。  
いきなり出てきてくれ、と言うのもなんだし、  
話を聞かせてくれっていうのも、初対面でおこがましい気もする  
し、一体どうすればいいのか。  
ラネアは、カズがやりたいようにすれば何とかなるみたいなことを言つていたが……。

と、カズがそんな葛藤をしていると、中で人の動く気配。  
まさか、名乗つただけで出てきてくれるのか？ なんて期待する  
カズ。

やがて、扉の軋む音がして、僅かに開かれた扉の隙間から窺うよう  
に、一人の少女が顔を出した。

凜とした空氣。

にあいたつような、美しい少女だった。  
絹のように光流れる、瑞々しい蒼色の髪。  
のぞいた腕はひどく華奢で、折れそくなぐらいだが、悔しいこと  
にカズよりも断然背が高い。

彼女、セリアもそのことに気付いたらしく、すっと下げる視線。それは、相手を捕らえ逃さず射抜く、つり田がちの深い青。

部屋にこもって出てこないというから、カズの苦手とする人見知りの激しい大人しめな子かと思いきや、どちらかと言ひと、勝氣で強気そうな……カズ自身ウマの命にそつた性格の女の子に見えた。

「……」

一瞬の静寂。

そこには、お互いお互いを観察し、探るよつた、そんな間があつた。

まるで、いつまでも続きそうなそれは。

しかし、それまで刺すような勢いのあつた瞳がじわりと滲み、だつと部屋の中に逃げ込むセリアによつて破られる。

「……あれ？」

突然の、そんなセリアの行動にカズは訳が分からない。分からぬけれど、何だか泣かせてしまつたかのような気がして、カズは慌ててセリアを追いかける。

「おい、待てよっ！ 何で逃げるんだよっー。」

何もしていなければずなのに、どうしてか罪悪感が募り、カズはそう言つた。

セリアは俯いたまま答えない。

さつきはウマがあいそな性格、なんて思つたけど。  
そんなうじうじしてこんな様子のセリアを見て、やっぱりカズは無性に腹が立つた。

ダイスのおどおどした態度にも、似たような感情を抱いたが、この時の気持ちはそれをはるかに凌駕していく。

「……何、うじうじしてるんだよ、こんなところで。  
お前、自分でこの仕事やるつて決めたんだろ？  
自分を認めて欲しくて、自分の居場所が欲しくて、この仕事やるつて決めたんじゃないのかよ」  
「……あ、あなたに何がわかるのよっ！」

カズの言葉に、触れるものがあったのか、きつと顔をあげるセリア。

カズはそれを見て、にっこり笑い。

「わかるや。オレとお前は同じようなもんだからな」「同じ……？」

そう言われ、きょとんとするセリア。

「もう、同じだ。オレも……セリアみたいに親を知らない。どこで生まれたかも分からぬ。だから怖かつた。

そんなオレを受け入れてくれたじいちゃんに、

得体の知れない自分はいつか見捨てられるんじゃないかつて。じいちゃんの望むままでいいと、ダメなんだつて。

だからオレは、髪を切らない。女のカッコだつてする。

セリアだつてそうだろ？ お前がこの仕事を自分がやるつて決めたのは、

自分を認めてもらいたかつたから。自分の居場所が欲しかつたから……なんだ？」

自分の心の奥底にしまつておく」と、それを誰かに喋ることは、とても恥ずかしかつた。

だけど、それくらいしなきゃ、同じだなんて、気持ち分かるなんて言えないんじやないかつて。

そう思つたから、カズはそれを言葉にする。

「だ、だから、わかつたよつな」と、言わないでつていつてるでしょ。

私、そんなんじや、ないもの……」

だが、セリアは動搖しながらも、それでも折れなかつた。どうやら、相当な天邪鬼というか、素直じやないらしい。

ああ、こいつはオレに似てるんだな、なんて思い、カズは苦笑する。

だから、あんなに腹が立つたのだと。

でも……それならそれで、釣るのは容易かつた。

カズはそのまま、いかにも挑発するかのよつた仕草をして。

「そりやよ。だつたらセリアのやるはずだつた仕事、オレがやつてやるよ。

魔道人形の原型に選ばれるなんでおいしい体験、滅多にできるもんじやないからな」

「な、何言つてゐの?。それはセザールの人じやないとダメなんだから!」

「そりやか? んじや、お前だつてダメじやん。せつを自分で否定したしな?」

「だ、ダメじやない! ダメじやないもん!」

すつかり乗せられて、今にも噛み付かんばかりのセリア。  
そこにはもう、先程のうじうじしたセリアの姿はどこにもなく、  
強氣で勝気なセリアがそこにいる。

「ふん、そりまで言つながらこなとこにこなこでわつわと来つよ。  
でなきや、オレがやつちまつからな」

「わ、わかつてゐわよー。あ、あなたになんか、負けないんだか  
らーつ!」

それが……ふたりのざじまつの思い出。  
似たもの同士の好敵手として。

生涯の親友として。

そんなやり取りがずっとずっとと続くなんてこと、  
その時のふたりは思いもしなかつただろう……。

(第26話につづく)

そうして。

やつぱり任せで正解やつたな、と満面笑顔のラネアとともに。カズとセリアはアリオパンツァーの町へと向かつた。

一回ほど魔物たちに遭遇したりもしたが、そこは護衛の面目躍如。対して苦にすることもなく、順調に歩を進めることができた。

その道中、セリアとカズは、つこつこまでも引きこもっていたのが嘘のように、打ち解けることができた。

それは、自分の姉みたいなものと、ラネアを改めて紹介して、ラネアに気後れすることもなくなつたせいもあるだらうが。何より打ち解ける大きなきっかけは、昼食を取るためにとつた休憩時間の時だつた。

カズが慣れた手つきで昼食の準備をし、食べ終えて…… てめめき片づけをこなしていると。

そんな様子をじっと見ていたセリアと田が会話。

「ん？ どうした？」

「う、ううん。カズはほんとになんでもできるんだなって思つて

……

カズが気になつて声をかけると、セリアはしみじみとそんな事を呟き、

何だかひどく落ちこんだかのように俯いてしまう。

セリアが、さつきまでとはなんだか違つ感じで、見るからに沈んでいる理由が分からず、

カズが首を傾げていると、

そんな二人を見たラネアは、引き続き何かを企む笑顔で横槍を入れる。

「はは～ん。あまりにも好敵手との力の差を感じて、流石のセリアちゃんも自信喪失つて感じやな？」

「好敵手？　なにが？」

「おやまあ、カズちゃんたら、強者の余裕？　そんなん素敵な女つぱりに対してに決まってるやん」　「……はい？」

とてもとても不穏な方向に話が流れているのを感じ、カズは窺うように聞き返すが。

それでもラネアは止まらない。  
むしろ、ノリノリで言葉を続ける。

「その神魔もうらやむ美貌！　道中魔物に襲われたときの、冷静な判断、そして強さ！

加えて男を骨抜きにする料理の腕前！　なんて隙のない好敵手なのっ！」

まるで、何かの役にはまり込んだかのようなラネアの言葉。  
突つ込みどころ満載で、思つまま適当に言つてるはずなのに。  
心中見透かされたかのように、あわあわするセリアが、ちょっと  
かわいい。

「……じゃなくて！　まてまてまてつ、何でオレのまわりの人  
たちはこんななんばつかなんだよ！」

いいかセリア誤解すんなよ！　オレは男なんだからなつ、ステキ  
な女つぶりとか、興味ねえから！」　「ふふつ。カズつたら。そ  
んなわかりきつた嘘、つかなくてもいいわよ。

勝てないなあつて思つたのはほんとなの。タカがね、よくあなた  
のことを話すから、

「気にはなつてたんだけど……」こんな素敵な子だとは思わなかつた  
な」

今度は一転して、どこか達觀したかのような、セリアの笑顔。  
どうやら、本格的に勘違いしているらしい。

しかも、その勘違いの内容がやばすぎる。

今更ながら、そう言えばラネアが会つたことはないけれど、  
お互い知つている、という本当の意味に気付き、カズは青くなつ  
た。

というかもう、泣きたいくらいである。

「う、うそじやないって！　オレは男なんだつて！　先生のバカ

つ！

もう二つなら、二つなら、ぬいでやるーっ！」

「わわっ、やりすぎたっ！」

ラネアはその暴挙を止めようと、後ろから羽交い絞めにして、カズの動きを止める。

「は、はなせーっ、オレは男なんだ、男なんだようーっ！」

「な、泣かんでええやん！」

「泣かすこと先生が言つからだろ？……って、泣いてねーよ、バーカつ！」

「ああ、もう、分かつた、分かつたって！ 私が悪かつた、カズは男！」

セリアちゃんもそれで納得しといてや、不本意だけど！」

「は、はいっ」

「不本意って言つなーっ！」

そんなある意味、カズにとつては日常茶飯事な一幕が、大きなきつかけ。

真に不本意ながら……そんなカズが、セリアには相当面白くて、興味深いヤツにうつつたらしい。

もしかしたら、いて楽しい友達というよりは。

見てて楽しい愛すべきものという表現のほうが近いのかもしだいが。

どちらにせよ、タカヤルレインしかいなかつたセリアの輪の中に。

自分たちも入れてくれた気がして。

それについては何だか嬉しい気分になる、カズなのだった……。

(第27話に続く)

## 27、2人の未然形

それから。無事、アリオパンツァーの町に到着し、一応の仕事を終えて。

カズは……一人見慣れぬ町を、手持ち無沙汰に歩いていた。

「ちえつ、ケチだなつ。オレにも見せてくれたつていいじゃんか……」

ぶつくさいいながら、マジックアイテムを製造生産する円形の屋根の建物、

通称『ラボ』の合い間を縫つて歩くさまは、退屈と不機嫌を体現したかのような姿である。

何故カズはそんなにも不機嫌なのか。

それは、一度アリオパンツァーの城へ行き、王に謁見して、魔道人形を創造するための巨大なラボまで案内されたところではよかつたのだが。

関係者以外立ち入り禁止と言つ形で、カズだけ追い出されてしまったからに他ならない。

この仕事はあくまで行き帰りの護衛。つまりはそういうことらしい。

巧みにもラネアに騙された感はあるが。  
そんなわけで仕方なく、カズは時間つぶしも兼ねて、町の散策を始めたのだが。

「人、いないじゃんよ……」

「この町の人たちにとつても、魔道人形開発計画は大きなものらしい。

おそらく、町ぐるみでの開発、なのだらう。  
自分だけ除け者にされているみたいで、ますます気分も悪くなる  
うといふものだが。

「ううう。おねえちゃん……」

涙交じりのそんな少女の声が風に流れてきて、カズははっとなる。  
無意識のうちに駆け出し、その声の主を発見したのは、町の入り口だった。

おそらく、町の外からやつてきたのだろう。  
町の子供か、余所から来た子なのかは分からぬが、身なりは良  
そうだった。

だが、長いハーブラウンの髪は埃にまみれ、着ている服はそれ以上に汚れていて、まるでどこからか逃げ出してきたかのような……そんな風体だつた。

「ふぐっ、お、おねえちゃん……」

少女は、目の前までやつてきたカズにも気付かないくらい疲れているのか、町について力が抜けたのか、ぺたんと座りこんで、先程と同じ言葉を呟く。

(つ……)

それは、初めて見るはずなのに。

どこかで見たことあるような、懐愁さえ思える光景に、カズには感じられた。

何でそんな風に思うのか、深く考えようとすると、頭の中の深い所がズキリと痛む。カズは、その痛みに顔をしかめつつも……そんな少女に声をかけた。

「おい、お前」  
「だ、だれつ？」

少女はびくり、と顔を震わせ……そして、じつとその涙に濡れた

紫色の瞳で、カズを見つめる。

そして、しばらくの硬直。

カズは初めて見た人の反応としてはよくあるものだつたが。

その時のカズは、そんな間すら惜しいかのよつて、言葉を続けた。

「オレはカズ・カムラル。……お前は？」  
「り、りざ……」

そんなカズの剣幕に圧されたのか、涙を引っ込めて素直に答える少女。

カズはひとつ頷いて。

「リザか。じゃありザ、話してみ。何があつたんだ？　お姉ちゃんがどうしたって？」  
リザに向かつてすかさずそう尋ねた。

尋ねながらカズは、そんな自分の行動に戸惑う。

別に、彼女が何か困つていて、それを助けてやること自体は構わないのだが、

何だかよく分からぬ感情のままに、ひどく焦つている自分を自覚したからである。

田の前にいる少女には、たつた今会つたばかりだと叫ぶ。「まるで昔にこんなことがあって……それを思い出したかのような焦りがあつたのだ。

「あのねつ、ぐすつ……おねえちゃんが、ひみつきちで、ゆかがういじて、でられなくなつちゃつたの。だから……」

そんなカズの熱意のよつたものが、リザにも伝わったらしい。  
たゞたゞしく、しゃくりあげながら、必死に状況を伝えよつとす  
る。

「……秘密基地？ そこにリザのお姉ちゃんがいるのか？」

「う、うん」

「その秘密基地までの道のつは覚えてるか？」

カズの矢継ぎ早の言葉に、じへじへと頷くリザ。

「よし、分かった。オレをそこに連れて行つてくれ  
「え？」

しかし、今度は言葉の意味が分からず、リザはきょとんとする。  
カズは、そんなりザに構わず、手を差し伸べ、リザを引っ張り上  
げるよう立たせ、  
ざつと服や髪の土埃を払つてやる。

同じくらいの視線の高さで、田をぐるぐるさせリザに、カズは  
にっこり笑い。

「お姉ちゃん、助けに行くんだる。オレが助けにいくのを手伝つ  
てやるよ」  
そう言つた。

しばらぐ、ぽかんとしていたリザだったが、それでもカズの本気  
に気付いたのかもしれない。

「うん！ おねがい、てつだつて、カズちゃん！」

はつあつと頷いてくれるリザに、また勘違いをされたんだらうな  
と内心思いつつも。

カズはリザと一緒に立つて……町を出る。

はたして、リザの言つていた秘密基地には、すぐに辿り着くこと  
ができた。

まあ、子供の足だから、たほど遠くではないとは思ったが、  
なるほど、そこは確かに秘密基地、といった風体をしている。

中に入ると、そこは……ヴルック家の製造したマジックアイテム  
の貯蔵庫、といった感じだった。

「なあリザ、お前たちはよくここに来るのか？」

「うん、ほんとほんとほんとほんとほんとほんとほんとほんと  
だ」

かなりの広さがあるが、頻繁に人が出入りしているのだろう。  
駄目と言われて、ついイタズラ心でやつてしまつ年頃の子供  
たちが遊び回つても、

危険がないように整備されている感じだった。

思つていたほどの危機的状況、というわけではないらしい。  
カズはこのことに内心安堵しつつ、リザに向き直る。

「で、お姉ちゃんはほんとだ？ 動く床がなんとかって言つてたけ

ど……」

「う、うそ、うそ、うそだよ。」

姉を助ける、と言つ使命に燃えてきたのか、リザは真剣な眼差しでカズをぐいぐいと引っ張る。

そして、連れてこられたのは、灰色の土壁が四角くくり抜かれて、窪んでいる場所だった。

「うう、ううだよー。ううにいたら、ゆかがぐーんってなつて、あがれなくなつちゃつたのー。おねえちゃんつー! おそるおそる近付いて、姉を呼ぶリザ。しばらくしても返事のないところを見ると、少なくとも近くにはいないらしい。

「あ、ほんとだ。床がない」

カズも同じようにして覗き込んで見ると、地面があるはずのそこには、暗い闇が広がっている。

(ふむ。これが下の階層へ降りる階段の代わり、かな?)

今まで通ってきた道の見える範囲での話だが、下へと通じる階段の類は見当たらなかつた。

初めは、この一階層しかない施設だと思っていたが、これを見る限りではそうではないらしい。

仮にこの場所が、下の階層へ降りられる場所だとするならば。

まさかこのまま降りつ放しつてことはないだろ。

どこかに、再度降りるために床を上昇させるような仕掛けがあるはずだった。

「よしつ……」

カズは一息つき、精神を集中させる。

「どうしたの？」

「しつ、今魔力を探るから……ちょっと待つて

急に目を閉じたカズに、リザは不思議そうな声をかけてきたが。カズは目を閉じたままそれを制し、さらに意識を集中させて。辺りにある魔力の気配を探るのだつた……。

(第28話につづく)

意識を集中させ、辺りにある魔力の気配を探る。

それは、カズが物心ついた頃からできていた、カズにとつては当たり前のことだった。

「こ」が『金』属性の力を使いし、様々なマジックアイテムを作る  
ヴァルックの一族の管理する場所であるならば。  
この床のない床も、おそらくは他のマジックアイテムと原理は同じはずで。

その効果を発揮するためには、必ずそのための魔力が必要になつてくるだろう。

カズは、その魔力を探していた。

「ん……「こ」かっ？」

時間にしてほんの僅か、目を閉じていたカズは、何事もなかつたかのように目を開き、

すぐ近くにある、碁盤の目のようにくぼみの入った、灰色の壁に手を触れる。

そして、ある一点でその手を止めると、コソコソと壁を叩いた。

するとどうだろ？

手のひらの大きさほどの長方形に切り込みが入り、その部分だけ

がぐるっと一回転する。

現れたのは、赤色のボタンだった。

「これだ」

カズは一言呟き、そのぐいぐいした部分を押し込む。すると、

「わっ、じ、じしん？」

ぐいぐいと辺りの地面が揺れ……それが納まる頃には、今まで黒い空虚だったはずの所に床が出現していた。

「カズちゃんす、い！ ゆかでてきたよ！」

「ああ、上手くいったみたいだな。リザ、ここに降りてみるぞ」

一瞬だけ、逡巡した後、カズは新たに現れた地面に降り立ち、リザを手招きする。

「ほら、見てみ。こ、お前のお姉ちゃん、この色違いのとこ、ふんだんじゃないか？」

「う、うん。カズちゃんよくじつてるね！ おねえちゃん、そこがあやしいってしらべてたんだよ！ やしたらゆかがおつこひつちやつたの……」

「……よし、んじゃふんでみよ!。リザ、やつてみるか?」

「うん!……えいつ!」

カズがそう問い合わせると、リザは迷いつことなく頷いて氣合いを入れつつ、

色違の……何か魔術文様の刻まれたタイルを踏み込む。

すると、再びぐらぐらと地面が揺れ、真ん中で縮こまる一人を乗せ、  
床は暗闇へと吸い込まれていく……。

そして再び、地面の揺れが収まると。

そこは先程とは違う、別の階層だった。

上の階層と比べて、あまり人の出入りがないのか、埃くさく僅かに空気が濁んでいる感覚。

……と。

かなり距離があるが、何かを叩くよつな、空気が押し出されるかのような、破裂音が木靈する。

「おねえちゃん、おねえちゃんだつ!」「あ、おいっ、待てつ!」

リザには、その音がなんなか分かるらしい。

いきなり駆け出すリザの後を、カズも慌てて追いかける。

それが……姉妹の絆のなせる業なのか、あるいはリザの、姉への嗅覚と言えばいいのだろうか。

カズが帰り道を覚える暇もなく、リザはいくつもの別れ道を迷うことなく進んでいく。

助ける、なんて偉そうなことを言つてついてきたが、もしリザがいなかつたら、カズはきっと迷子になつていたかもしない。

そう思つくらい複雑に……入り組んだ道を進んだ先。

人造りの巨大な浴槽のようなため池で塞がれた、行き止まり。

そこに……リザと同じ瞳の色、しかしながらやうな光をたたえた、ミドルボブの髪の少女が、そこにいた。

「ああもう…！　しつこいつ…！」

ドンッ、ドドンッ！

だが、その場にいたのは少女だけではなかつた。

少女は苛立たしげに叫び、おそらく『金<sup>ヴァルック</sup>』属性の魔力を打ち出し攻撃する類の武器で、道を塞ぎ、少女の姿をカズたちから隠すほどに大きな人影……一見すると、木でできた人形のようなものに攻撃を加えていた。

しかし、その攻撃はことごとく弾かれ、水溜りに波紋をつくつている。

(ウッドゴーレム！　いなんといひに？　いや、でも)

どこか普通の魔物とは、気配と言つか、魔力の流れが不自然な気がする。

カズがそのことに一瞬考え込んでいると。

「おねえちゃん！」

横にいたはずのリザが、田の前のそれなど田に入っていないかのように駆け出した。

「リザ？ あんた、どうしてここに……つ、ダメ、こっちで  
あちや！」

それに気付いた少女が、慌ててリザに叫ぶ。

逃げなさい、早くつ！

(うう……?)

その叫びを耳にした瞬間、再び軋む頭の奥底。カズはその時、少女の声とダブって、誰かの声を聞いたような気がした。

自分には以前にも……こんなことがあった？  
それとも、叫んでいるのは自分？

考えてみるが分からぬ。

考えれば考えるほど、頭がズキズキする。

だが、その瞬間。少女の声に反応するよつと、ウッシュドゴーレムもどきがぐるり、と振り向いた。

そいつは、リザに照準を合わせると、ヴンとうなり声をあげ、そのウッシュドゴーレムもどきの顔にある一つ田に赤い、ほの暗い色を灯す。

途端、ぞわりと、全身の毛が逆立つような嫌な予感。見れば、そのウッシュドゴーレムもどきの瞳の周りに、じんじんと魔力が収束していくのが感じられる。

「へーーー！」

気付けばカズは駆け出していた。  
ただがむしゃらに。

だが、今から走つても間に合わないことも分かっていて。

（どうある、どうすればいいーーー）

刹那、凄まじい速度で回転を始めるカズの思考。

「『風』みーーー！」

その答えを導き出したのは、一瞬だった。

カズは、ぴたりと歩みを止め、くるりと向き直ると。田の前に広がる水面へ向かつて『風』の魔力、……両手のひらを広げたほどの、不可視の刃を繰り出した。

かまいたち

すると聞こえるのは、水を切り裂き、さらに何かを……水ではないものを刻む音。

水の中に走るそれは、魔力が流れ通る、管のようなものだった。その管の繋がる先に、ウツドゴーレムもどきがいる。

そして……今までに収束された魔力を打ち出そうとした、その瞬間。

いきなりふと瞳の色を失い、ウツドゴーレムもどきは、ぴたりとその動きを止めた。

「ど、止まつた？」  
「おねえちゃん！」  
「わわっ。……もう、リザつたら、危ないでしょっ……」  
「だつてえ！」

訳が分からずぽかんとする少女に、リザはそのまま止まることが、思い切り抱きつく。

受け止めきれず、一緒に倒れこむ姉妹。

だけど、お互の顔にあるのは、安堵の詰まつた笑顔。

(あ、危なかつた……)

それがただの魔物でなく、管で伝つて送られてきた魔力で動く魔道人形だつて気付けたのは、間一髪のところだつた。

おやうぐ、この場所を守護するものなのだろう。

ここが、ヴァルツクの管理する場所で、魔道人形のことが頭になかつたら、

もしかしたら気付けなくて、間に合わなかつたかもしれない。

カズの存在などとうに蚊帳の外な二人に。

人の氣も知らないで、と思わないでもないカズではあつたが。

それ以上に、二人のそんな笑顔が守れたことに。

同じように安堵している自分が、確かにそこにいるのを感じてい  
て……。

(第29話につづく)

「あのっ。ありがとう。あなたがいなかつたら、アタシもリザもどうなつていたことか……。

あの、あのね。もし良かつたらお礼させて？ 借りたお金は返せなくとも、借りはきちんと返すのが、我が家家の家訓なの」

その後、リザがここにこる理由を、リザ自身がカズちゃんのおかげ、と説明してくれて。

リザの姉……ルシアと乗った少女は、いきなりそんなことを言つてきた。

「お金は返さないってやな家訓だなあい……つて、まあそれはともかくとして、別にそんないいよ。オレだって勝手におせつかいしたようなもんだし、ヒマだつただけだしな」

おかしな衝動に突き動かされて、といつのば、カズ自身もよく分かつていないので言わないでおく。

「でも、あなたがいなかつたらアタシはコレに殺されてたかもしない。あなたは、アタシたちの命の恩人なの」

「おおげさだつて。べつに何か見返り求めてやつたわけじゃないしね」

命の恩人。なんていい響きなんだろう。

そう言われただけでも、何だか満腹で照れくさいカズである。だから気にしなくていいよ、と首を振るカズであったが。それでもルシアは納得してくれなかつた。

「それでもう、アタシの気がすまないのう、アタシがあ礼したいのう。リザだつてそうでしょ？」 「うんう、わたしおれいしたい。おれいのちゅーするー」

「わわっ、バカ、やめうつ、それはこれから現れる大切な人のためにとってくもんなの、めー、なのうー」

直接攻撃は効き目が薄いと判断したのか、いきなりリザに援護射撃を求めるルシア。

どこでそんな事覚えてきたのか、満面の笑みでにじり寄つてくるリザ。

カズは思わず逃げようとするが、それこそがルシアの目論見だつたのか、

いつの間にか背後に回りこまれて羽交い絞めにされ、カズは身動きが取れなくなってしまった。

「うおっ、いつのまにっ？」

「ほらほら、観念なさい。アタシたちの命を助けた責任、ばっちりとつてもううんだからね」

「それ、言葉の使い方間違つてるつて！ ああもう！ 分かった、分かつたつて！」

いよいよ追い詰められたカズは、とうとう白旗を上げる。内心、二人の将来に不安を覚えつつ。

「そりそり、初めからそり言えぱいいのよ。でねでね、お礼なんだけど、カズを見たときからピンときてたつていうか、決めてたんだけど、カズ、魔道人形欲しくない？」

「え？ 魔道人形？ 欲しくないつて、ルシア持つてるのか？」

「ううん。これからこのワタシが創るのよ。

しかもそこいらに転がってるようなただの魔道人形じゃないわよ。ちゃんと自分の意志で喋つて、行動して、魔法も使えるすつごい奴なんだから。

原型<sup>モデル</sup>はもちろんカズ本人、……どう？

「どうつて。そりや、もらえるなら凄いうれしいけどさ。

大人たちが大人数で寄つてたかつてようやく今できるかもしけないんだろ？ それを……ルシアが？」 「もちろん、そうよ。まあ、今すぐにつてわけじゃないけど、ワタシ、絶対作つてみせるわ。そして、あなたに助けられたこの命が、それだけ価値のあるものだつて、証明するの」

「……っ」

カズは、そんな事を言われ、不覚にもドキリとしてしまった。

大げさだ、と言えばそうなのかもしねないが。

何だかそんなルシアをカツコイイ、なんて思つてしまつ。

「そこまで言つなら……お願ひしようかな」

「ええ、約束よ。覚えててね」

「わたしも！ わたしもてつだうー、やくそく！」

ちゃんとリザも加わって、約束の指切りをする。  
カズはその時、その約束が本当に叶わなくて別にいいかな、なんて思っていた。

それは。

約束すること自体が、自分がこの世界に認められた証のように思えて。

彼女たちとの間にできた繋がりが、ただ嬉しかったからなのかもしない。

そして。カズは何事もなく、一人を家（なんと、ヴァルツクのお姫様たちだった）に送り届けて。  
ちょうど仕事を終えたセリアたちとともに、帰りの護衛と相成つた。

魔道人形の方は、これからが本番、らしい。  
このまま順調に行けば、数年ほどでお披露目できる、とのことだつた。

「何やカズ、暇してるか思つたら、何かあつたんか？」

「カズ、何だかうしそうね」

新たな約束のおかげで、終始「機嫌なカズに、一人して首を傾げる場面もあつたが。

結局、完全に日が沈む頃までには、コーライジアに帰ってきていた。

「今度、ラルシータにも遊びに来るのよ」なんて言ひて笑うセリアと。

「セリアを送りついでにダーリンに会うんや」なんて嬉しそうなラネアと別れ……

カズはひとり家までの帰り道を歩く。

と。そんな帰り途中のことだ。

何の前触れもなく、今度は屋根ではなく、普通に道端ですれ違つよみに。

あの金髪の少女と出会つたのは。

「こんばんわだよ～。カズ」

「おう。なんだ、今日は襲い掛かつてこないのか？」

「んもう、人聞き悪いなあ。でも、べつに今日は何もしないよ。

だってカズ、何も悪いことしてないでしょ？」

「お前はオレの母親かなんかかよ」

母親の存在なんて良く分からぬけど、思わずそんなツッコミを

入れるカズ。

つまり、この少女はただ無目的にカズを追いかけ回していたわけではない、と言ひ「こと」なのだろう。

思い返してみれば、前回襲われた時は、一応悪いこと（夜のスクール不法？ 侵入など）していた、  
と言えばそうかもしれない。

「え？ カズのお母さん？ わたし、そんな年じゃないよ。せめてお嫁さんとかにしてよ。」

って、あれれ？ そうしたらお嫁さんが一人になっちゃうのかな？」

「お、お前つ、分かつてて言つてるだろ！」

「うひやあ、カズが怒ったよ、逃げろーっ」

思わず拳を震わせて振り上げると、少女はわざとらしい悲鳴を上げて、ぐるりときびすを返し、ぶんぶんと手を振つて、暮れなずむ町中へと消えていく。

「あ、また名前聞くの忘れた」

それに、彼女の目的も未だ分からなかつた。

今の態度を見る限り、こちらに害意があるようこは見えないのだが、

それより何より気になるのはやはり、カズは少女のことを知らな

いのに、

向こうはカズのことを知っている事で。

「くそ、次こそは」

今度会ったのなら、その訳を聞いてみよう。  
なんてことをカズは思う。

だが、そう思う一方で、もしかしたら彼女は。  
カズ自身想像している一人の少女、マニー・ヴァーレストなんじ  
やないか。  
なんて思つてもいて……。

(第30話につづく)

### 30、夜を駆ける？

そして……次の日の午後。

「やめる、やるなと言わればやりたくないっちゃうんだよなあ、コレが」

カズは、ミネアにもうやるなと口をすっぱくして言っていたのにも関わらず、マーサーに借りたマントと仮面を羽織り、新たな仕事をするためにギルドの入り口付近で待機していた。ただ、カズ自身潮時と言うものをわきまえてはいたので、今日で最後にしようなんて思つてはいて。

カズがそんな風に思い立つたのには、訳がある。

それは午前中、ふと仕事の経過報告をマーサーにしていなかつたことを思い出し、マーサーの家へと足を運んだ時だった。

スクールに夜侵入した事、ラネアに連れられて隣国へ行つた時的事、たくさん増えた約束事。

元々話好きなところのあるカズは、そこまではむしろ快調に喋つていたのだが。

スクールへ侵入した時の帰り、それから昨日の夕暮れ、もしかしたらマニーに会ったかもしれない、なんて話をした瞬間。

凄い剣幕のルッキーに無理矢理外に連れ出されて。それはお前の勘違いだ、人違いだ、なんてきつくな言われて。

売り言葉に買ひ言葉。

「じゃあ、もっぺんあつて確かめてやる!」  
なんて啖呵を切つてしまつたのだ。

一度そうなつてしまつと後に引くわけにもいかず、だからカズはこうして新たな仕事を待つている。

一見、ただ会うだけなら、仕事をしなくてもいいんじゃないかも思えるが。

カズは正体を掴むのと同時に、彼女の目的を知るつもりでいた。

まあ、今までの言動や行動で日星がついていないこともないのだが。

どうせならちゃんと知つておきたい。カズはそう思ったのだ。

「とりあえずは夜に行つよつなやつかな

今のところ彼女が姿を現したのは夕暮れから夜以降だったので、確実に会うためには、日が暮れてから始まるようなものにしたかった。

都合よく、そんな仕事がないものかなと、カズはギルドを行き来する人たちを観察する。

そして。

そんなカズの目に留まったのは、見るからに焦つて困り果てている、と言つた風の、ひとりの若い男だった。

カズは、数打ちや当たるだらつと、とりあえずその男に声をかけてみることにする。

イラーグ・シブルと名乗った男は、他の者同様、仮面とマントの文字通り怪しいカズに、

初めは大層警戒心を抱いていたが、やはり切羽詰っていたのだろう。

う。

やがて語りだした仕事の内容は、しかし、いつもものものと比べて一風変わつたものだつた。

現在、ライジアパークで催されている企画展の一つ、世界のマジックアイテム展。

イラーグは、そのマジックアイテムを出展したトース・シブルと言つ名の匠、

その弟子に当たる人なのだが。

トラースが出展した作品の一つに、『幻夢』と呼ばれる魔法の鏡があつた。

なんでも、『もう一人の自分』が見える、らしいのだが。特筆すべきはその彩工で、匠の技の光る、大層値の張るものらしい。

トラースは昔氣質の職人で、その技術をイラーグに直接教えることはせず、自らで盗めという。

満足な教えを受けられぬままに幻夢を真似たものを作つてみたのだが、どうもうまくいかない。

そんな感じで、本物を間近で観察しながら夢中になつているうちに、展示会が始まつてしまい……

よりもよつて展示品を取りに来た業者が勘違いして、イラーグの作つた偽物を持つていつてしまつたというのだ。

展示会が始まって数日が立ち、今はまだ運良く気付かれていないが、本物と偽物の違いは一目瞭然。

いつかバレる時が来る。

何としても本物と偽物を取り替えたい。

しかし、それを表立つて堂々と変えたなら、師匠の面目丸つぶれになるだろう。

そう考えてこつそり変えようにも、そんな仕事ギルドが受けてくれるわけもなく。

困り果てたところにカズの登場と言つわけだ。

結局、カズはその仕事を受けたことにした。

報酬もなかなかよかつたし、本当に困っている風なのがカズにも分かったからだ。

そうしてカズは、仕事のための準備を自室で行い、夜が更けるのを待つた。

たくさんの魔法書。

お気に入りの魔力の込められた装飾品。

カムラル老のたつての希望と趣味で集められ、飾り立てられた娘としての服たち。

嘘と秘密で塗り固められた部屋。

本当は違うのに、何故か時間を忘れられる。

そんな部屋で……待つことしばし。

時刻はもう、真夜中。

普段ならお肌と健康に悪いとやんや言われて、といへん夢の中な時間帯。

「よし、行くか」

カズは、仮面とマントを羽織り、小脇に僅かに魔力の感じられる魔法の鏡を布にくるんで持つて、

音を立てぬよう念からそつと抜け出し、外庭に降り立つて夜空を見上げる。

月のきれいな、いい夜だつた。

家と外界を隔てる捩れた細い金属の網（侵入者用のトラップがあ

る) を、

遅刻して急いでいるいつものよつと『風』を使って飛び越えて。  
カズは、硬い石畳の歩道を駆けてゆく……。

(第31話にづづく)

### 31、夜を駆ける？

その夜は、最初の時と同じくして、カズには予感があった。

その予感は、お互いを繋げる細い糸。

それは、よくある赤い色をしていないのかかもしれないが。

お互いがいるのはすぐに気がつくことができた。

だから、前回のように下手な騒ぎが起こらないよう、無意識に自然と落ち合つたのは、町の外れ。

どことも知れぬ大きな屋敷の裏手の森の中の大きな樹がある場所  
だった。

黙つたまま油断なく対峙すると、

大きな樹のざわめきも止み、お互いの呼吸の音だけが沁みていく

「……」

「……」

「カズ、遊ぼうよ」  
「やだつつてもムダだらうがよ」

そして、そんなやり取りを合図に、戦いは始まった。

それは、打つたら打ち返す殴り合いのようだ。

会話のやり取りのような、単純明快な魔力と魔力の応酬。

飛んでくる色とりどりな光球を、向かってくる一筋の炎を。  
時にはかわし、時には打ち消し。  
大地を、夜空を、自由に使って……お互いの視線が合えば、微笑みあう。

そんな、不思議で意味があつてないような、二人だけの戦い。

永遠に続くかとそう思われた戦いは……。

しかし、やけにあつさつと片がつくことになる。

それは、

一定に流れていた戦いの拍子の、突然の変化だった。

金色の少女の放つ色とりどりの光球。

放たれれば、それぞが弾け、爆発して消えるはずのそれが。カズの炎を受け、打ち消さんとしたその瞬間。

その炎をかわすようにいきなり上下に裂けるように分裂したのだ。

「つ！」

カズは虚をつかれ、避け損ねた爆風にのまれ、手に持っていた鏡を包んでいた布に炎が広がり、その勢いで鏡を取りこぼしてしまつ。

バリン！

と、何の感慨もなく、あつさりと割れる鏡。

「あつ  
「ゲツ」

一瞬だけ、わっさとはまるで別物の、いやな沈黙が辺りを支配する。

しかし、少女はすぐにほっと、こっちまで和むよつな安堵した表情を見せて。

「よかつたあ。もうこれで大丈夫だね、カズ」

そんな事を言つて笑う。

やつぱりな、とカズは思つた。

彼女の目的は、この鏡にあつたらしい。

「大丈夫？ どういう意味だ？ まるでオレが持つてちやまづい  
みたいな言い方だな」

「うん。それを持つてるとね、カズに良くないことが起こるんだ  
よ。だから止めなきやつて思ったの」

「お前、昨日オレが悪をするかりどひりひつて、言つてなかつた  
か？」

「今だつてしてゐるじゃん。こんな夜遅くこ、お外にいたら悪い子  
なんだよ」

昨日と言つてゐる」とが違ひじやないかとシツ ハリを入れると。  
少女は頬を膨らませ、そんな事を言つ。

「それはお前だつてそつじやねえのか？」

「わたしはいいんだよ。もともと悪い子、だからね」

「どういう意味だよ？」

思わずカズが問いかけると、少女は顔を俯かせて。

「ルッキーに言われなかつた？ わたしはね、災いを呼ぶの。悪  
い子なんだよ」

「お前、やつぱりママーヤ……なのか？」

やつぱりそうだったのかと、予想と期待通りの少女の呟を口にして  
みると少女は優げに微笑んで。

「うん。わたし、マーティだよ。カズがね、わたしを呼んだんだよ。カズが心配だったから、こいつして出てきたの。でも、それもおしまい。

鏡はなくなつたから、カズによくなことほもう起らないうから

もつわたしは、帰らなくちゃいけないの。だから、バイバイだね  
やつと名乗つたばかりだと云つのに、もう一度と会えないみたい

な顔をして。  
手を振り、踵を返そつとするマーティ。

何だが、このままよなうをするのは、カズはとても気分が悪かつた。

ルッキーもマーティ自身も災いを呼ぶなんて言つていたが。  
本当にやうなのかつて、カズは思つ。

話しかけてる限り、カズには逆に思えるのだ。

この世に災いや良くない事が起る時、それをなんとかするため  
ひ。

彼女が……マーティが出てくるんじゃないのかつて。

今なら、マーサーがマーティのことを知らないのも、分かる気がする。

セツヒマーティは、あのマーサーに、いつも幸せそうに笑っているマーサーに、

そんな災いやよくなないこと、知つて欲しくなこと、さう思つたらなんだって。

だから、そのまま去つ、消えよつとすマーティに、カズは声をかけていた。

「待て、良くない」とまだ残つてゐる

「え？」

「この鏡だよ鏡。お前は壊してそれで満足かもしけないけどな、これは仕事の大事な預かり物で、すっげ高いんだぞ。お前、責任とつて弁償してくれるんだよなあ？」

「そ、それは……わ、わたし知らないもんつ！」

「うお早つ！ な、なんてヤツだ」

勝手にじらばつくれて帰つたとしているやつに、思い切り突きつけた現実。

見た目通り夢見がちな？ 少女は。

さつきのもつ会えない的な雰囲気はどうくやい、風の魔精靈」と引き連れて、現実から田を背けるかのじとく、逃げ出していく。

……まあ、この調子なら、もつ会えないなんてことはなさそうだね。

出でこないような、『監督責任でお前の大切な大切な兄様に災いを突きつけるぞ、バカ高い弁償代って名前なの』なんて脅してやればいいのだから。

カズはその時の事を考え、思わず笑みをこぼして。でもすぐに笑みを引つ込めて、自嘲的な溜息をついた。

「全く。兄妹そろつて単純なやつらめ。本当に悪い子は、やっぱオレか……」

やつてはいけないと言われればやりたくないってしまう天邪鬼。カズは、マニイが『カズが持っているもの』を狙っていると、最初に襲われた時点で気がついていた。

だから、カズはイラーグとの仕事の契約の時、一つ条件をつけたのだ。

鏡の偽物をもう一つ用意してくれ……と。

### 32、夜を駆ける？

そこはかとない罪悪感の中、マニーをだまくらかして場を乗り切ったカズは。

そのまま家の近くまで戻り、庭先に置いておいた本物を持ち、その足で『ライジアパーク』へと向かった。

今度ばかりは邪魔するものは何もなく。展示会場である古い建物への侵入も、簡単に行きすぎるのが逆に怖くなるくらいに、何の障害もなく。

やがて辿り着いたのは、高く価値のあるものとして、個別に丸々一部屋使い、マジックアイテムが展示されている場所の一角だった。

普段はこの建物の部屋の一部として、扉なども取り付けられているのだが、見に来た人（ちなみに無料）が見やすいように扉が外され、吹き抜けになつて、廊下まで窓から差し込む月明かりが零れてい。

「無用心だな。いや、わざわざコーライジアまで来て盗みを働くなんて馬鹿がないだけか」

確かに、この辺りの一角の展示品一つで、家が建つくらいの価値があるものもあるはずだが、

世界の平和を守る人材を育てる本拠地とも言つていいユーライジアに乗り込んでまで、

悪事を働くこうなんて考えないのかもしれない。

カズが自分の立場で平氣で外出したりできるのも、そういうた背景があるのだらうが。

「ひょいっと。これで百本め、と」

カズは腰の高さくらいの所に道を塞ぐよう張つてあるほの赤い光の線を、触れないよといきつと飛び越え、さらりと奥へと進む。

すると、どうやらそこに行き止まりらしい。  
開け放された入り口の足元に流れる百一本目の赤い線を申し訳程度に飛び越え、部屋へと入る。

そしてそこに。  
その鏡はあつた。

カズがまるまる全身映りこむ、大きな鏡。  
その金の縁には、彩色細かい紋様、飾りが施されており、立っているだけで凄まじい魔力がその鏡に込められているのがわかる。

いかにも本物、と言つた風情だつた。

「……え、本物？ つてなんで？ しかも大きさ全然違つじゃん」

「どうこいつだらう？ カズは混乱していた。

自分は、本物を偽物と取り替えるためにここに来たはずだ。なのに、どう見ても本物だと思えるものがそこにはあつて。

それと田が合つた、その瞬間。

「うわっ！ ま、まぶし……つて、な、なんだあつ、うわああああ！」

あー

その鏡が紫色の閃光を発したかと思つと、それにぐん、と弓張られるような感覚がある。

思わず田を閉じ足を地面につけるとするが、何故かそれは叶わなくて……。

「ぐべつー、ペッ、ペッ。……あ、ほひつへつちまつたあ

じたばたしていたら、いきなり重力が戻つて。

背中から落ちたカズはそのままじりじりと転がり、顔面で埃っぽい、

冷たい石でできた地面にキスをしてしまう羽田になる。

「何だよ、何が起こったんだよ、一体……」

甘くて苦い、ベロの先。

口元をぬぐいながら頭を振つて起き上がると、

目の前には壁にかけられた自分自身の映る鏡がある。

「うわっ」

目の前の自分の顔の近さに驚いて、思わずのけぞるカズ。  
手に触れたのは、持つてきた……本物だと思つてた、偽物の鏡。

「ええと、つまり……オレはもしかして、本物の盗みに入らされたってことか？」

すっかり騙された自分にとつても腹が立つカズである。  
イラーグは、ただの気の弱い熱心な人に見えたのだが、人と言うものは分からないものだ、と。

「しつかし、一目見れば一目瞭然じゃねえか……つて、あれ？

そうでもない、か？」

わたりを見たときせ。

「なんなんじやどつちが本物かなんて一発で分かつてしまつほゞの  
違いを感じたのだが。

『氣のせいが、今は比べてみてもあまり変わらない』ように見える。

「まあどうひりこしる、これで仕事は」破算、だな

驅られたと分かつた以上、これ以上仕事を続ける義理はないだろ  
う。

ミネアの、この世はいい人ばかりじゃない、なんて言葉が耳に痛  
かつたが。

これを教訓に自重するようこじよつ。  
カズはやう思つて。

「「れは」これで勉強になつたつて」とこじくか

なんじまやあつつ、夜の道を自分の家田指して、帰路につくこと  
にする。

……その時のカズはまだ、氣付いていなかつた。

世界と、自身の変容を。

今、暴かれよつとしている、血獣への秘密のこと。

「うつやあ、何だこれ？」

カズがそのことに気付いたのは、次の日のことだった。  
そのまま家に帰つてすぐベッドに入り、何か妙に身体がぎこちないといふか、重いといふか、とにかく変な感じがして、家の姿見を覗き込むと。そこには随分と成長したカズ自身の姿があつたのだ。

見た目で判断するに、『セントレアクラス』くらいだらうか。  
どうやら一晩で二年近くも成長してしまつたらしい。  
いくら育ち盛り（のつもり）とはいえ、一晩でこの成長はおかしいだらう。

何でこんなことになつたのか。  
必死に頭を落ち着かせ、考えて。

「あの鏡の力……だな」

あの『幻夢』という魔法の鏡はもう一人の自分を見ることができ  
るといつたものだつたはず。  
それが、どうしてこの結果になつたのかは分からなかつたが。  
このもう一人といふのは。  
そうでありたい、なんていう自分の願望なのかもしれないな、な  
んことをカズは思つ。

「みんなが見たら驚くだらうなあ……あふ」

その時、カズが考えていたのはその程度の気楽なもので。それから今日は登校日だったのを思い出し。

スクールの制服に着替えて顔を洗い、台所に向かって朝の支度をして。

いつものように、カムラル老が現れるのを待つことにしたのだつた……。

(第33話にづく)

### 33、無闇の鐘～Infinite Nigantmare～

スクールの制服に着替えて顔を洗い、台所に向かって朝の支度をして、

カムラル老が現れるのを待っていたカズだったが。

いつもなら支度を始める頃には食卓について、何が楽しいのか朝食を作る自分を見ているのに、

いくら待つてもカムラル老は現れなかつた。

「なにか用があつて先に行つちゃつたのかな」

もしかしたら、昨日のことがバレて、怒っているのかもしない。カズは、取り敢えず自分の分だけで朝食をすまし、ちょっとびり寂しい気持ちになりながら、スクールへ向かうために居間を出る。

そして、そのまま玄関に向かい、開け放たれたままのカムラル老の自室が目に入つて。

「な、なんだよ、これ……」

カズはありえない光景に思わずいつもスクールに持つていく緑色

のカバンを取り落とす。

そこにあつたはずのカムラル老の机が、本棚が、ベッドが、きれ  
いに片付けられ、

カムラル老の趣味で改装されたガイゼル様式の井草の敷き詰めら  
れた床がむき出しになつてゐる。

まるで、引越しか夜逃げでもしたかのようだ、そんな有様だつた。  
だが、その部屋には全てのものがなくなつてゐるわけではなかつ  
た。

祖母の形見だという古い鏡台。

そこに、昨日までなかつたものが飾られている。

それは、

カワダの『キヤメーラ』でとつたらしき『絵』を、きれいな額縁  
をつけて飾られたもの。

ひとつではない。

数え切れないほどの、知つてる人も知らない人のものお構いな  
しの、

時を止め、切り取られた『絵』がそこにあつた。

その真ん中には、大きく映る、笑顔のカムラル老がいる。  
そしてそのすぐ隣に、やっぱり笑顔の自分とマーサーがいて。

「あ……」

それは、決して不快なものではないはずなのに、気付けばカズは

がぐがくと震えていた。

じわりと滲む視界。

それはきっと本能でそれが何であるのか、カズは気付いたからなのかかもしれない。

カズはその現実から逃れるように、家を飛び出す。向かうのは、いつもマーサーと待ち合わせをする、公園とも呼べない、小さな広場。

「……っ

そのはずなのに。そこでいつもの笑顔で待っているはずのマーサーの姿はなく。

変わりにあつたのは、公園から見える空を覆つてしまつかのよつな、

黒光りする大きな石碑、だった。

「なんだよ、これ……」

自分の大切な場所を汚そうとする異物。

それに、怒りすら覚え、それに近付きそつと触れる。

そこには、たくさんの文字が刻まれていた。その多くが人の名前だということが分かる。

ふと、視線をあげれば。

そこにマーサー・ヴァーレストの文字。

見た瞬間、先ほどとは比べ物にならない恐怖が、カズを襲う。でも、視線を外すことはできなかつた。カズの視線は、さらに上、目立つように分かるように、大きく刻まれた文字の部分へと移る。

「……世界の英雄『ステュー・デンジ』……」に眠る

氣付けカズは、それをなぞるように、そう、呟いていた。

ありえない現実。  
考えたくない悪夢。

「嘘だ、そんなのつ、嘘に決まつてゐる……つー。」

カズは、その全てを否定するよつて叫び、そこから逃げるよつて駆け出していく……。

どこをどう走ったのかは分からぬ。  
だが、カズの足が向かう場所はひとつしかなかつた。

マーサーの家。マーサーのいる場所。  
マーサーに会つことができれば。

その気の抜けた笑顔を見ることが出来れば。

その歌声を聞くことができれば。

どんな悪夢だつて鼻で笑える。

これが、あの幻夢の世界だとしても、どうとも知れぬ異世界だと  
しても。

いつもの誘つ歌声もないまま、カズはマーサーの家に辿り着く。

カズはそこで氣を取り直すよつと息を吐くと、ヴァーレスト  
家の呼び鈴を揺らす。

「はいどなた……つて、カズか。なんだよめずらしーな。こんな  
朝早くに呼び鈴なんか鳴らして」

すると、すぐに出てきたのはドアひとつも変わらないよつと見える、  
ルッキーの声。

「あのね、その……」

マーサーを呼んでくれないか。

たつたその一言なのに、カズはそれを口にすることができない。

たとえ夢でも幻でも。

ルッキーの口から、最悪の言葉を聞きたくなかったからだ。

はつきりとしないカズに、ルッキーは訝しげな顔をして見せた後、何か思いついたかのように、ぽん、と手を叩く。

「なんだよ。また喧嘩したのか？ マーティのやつならいねえぞ。  
確かアリオパンツァーの方に『仕事』に行くんだって聞いてたけど

ど

「……え？」

何故、ここでマーティの名前が出てくるのか。

何故、その名前を口にするのも憚っていた風のルッキーがそんなことを言つのか。

カズには分からぬ。

そもそも、マーサーとマーティは同じ身体を一人で共有しているのではなかつたのか？

「何呆けてんだよ。何があつたのか？ すげえかおしてるぞ」

ルッキーも、カズが通常の様子でないことを悟つたらしい。  
心配げに顔を覗き込んでくるので、カズははつと我に返り、首を振る。

「いや、なんでもない。アリオパンツァーだったよな、ちょっと

行ってみるよ」

二人のものだつた身体は、今は完全にマニーのもの。一瞬だけ、そんな嫌な考えが頭を支配したが。

それより、ここは夢か現かは分からないが、未来の世界なのだ。マーサーは無事で、マニーも定期的に出て来られるようになつて、いふと考へるに至るカズの心情は、仕方のない事だつただろう。

カズはぎこちなく頭を下げ、そのまま立ち去りつとしたが。

ルッキーはそんなカズの背中に声をかける。

「お前ら家系はトンと人の言つことを最後までできやがらねえな。……カズ。おめえが厄介な目に会つてんのは、おめえの自業自得だがんな。オレは助けんぞ」  
「なんでそんなこと……」  
「わかんだよ。おめえらは無駄に顔が整いすぎてて、気持ちなんか筒抜けさ」

呆れたように、その小さな手で銀色の髪をかきむしり、迷惑そうな顔をするルッキー。

でも確かに、ルッキーの言つ通りなのかもしけれない。

今カズの身を包む不安と恐怖は、自らの行動によるツケなのだろう。

ならばこれは、自分でカタをつけなくてはいけない。

自分自身で、この悪夢を追い払わねばならないのだ。

「心配してくれてありがとう。何とか自分でやつてみると  
「けつ。べつに心配なんぢやいねえけどなあ」

ルッキーは、眉を寄せせわしなく翼を動かし、さつたとこけ、と  
ばかりに手を振る。  
カズはそれになんとか笑みを浮かべる「どができて……。

(第3・4話に続く)

### 34、夢のつむぎ

今起きているこの状況が。  
たとえどんなに悪夢としても、夢であるならまだ耐えられる。

時間を越えて未来に飛んだと考えるよりは。

『幻夢』にとつこまれて、と考えたほうがよっぽど現実的だった。

そう、自分を納得させ、ルッキーに諭されて少しばかり冷静になつたカズは。

この状況にきっかけとなつた依頼人の元へと急ぐべきだと考えた。

しかし。

依頼人のイラーグとは偶然会つたに等しく、依頼後に落ち合つ場所は決めていたが、

迂闊にも依頼人の住所などの確認はしていなかつた。

ならばどうすべきかと考えて。

今となつてはカズの目的はイラーグを咎める」とではなかつたら。

むしろ、本物を創つたといつその師匠、トースに会いに行くなつりでいた。

そう、まずはあの幻夢というマジックアイテムが、どんな影響を及ぼすのか、知りたかつたのだ。

よつて、カズはまず、ライジアパークへと向かつていた。

それは、単純に現在幻夢を管理しているライジアパークが、その出品元を知らないはずはない、  
という考え方の元であったのだが。

「……故人、だつて？」

パーク管理者の顔見知りの老人に聞かされた言葉は。  
カズに驚きの声を上げさせるには十分すぎるものだった。

それに、管理者の老人は狼狽した様子で言葉を返す。

「は、はい。この幻夢の作成者は、数年前に亡くなつております。  
その、トラースいう人物は、弟子を一切取らない方だつたそうで、  
カムラル様にこんなことを申すのは大変申し訳ないのですが……」

カズがちよくちよくここに訪れることで、カズと親しかつたはず  
の管理者の老人は、  
言葉にするのも憚られる、とばかりに恐縮して言い淀む。

僅かに白髪が増えたくらいで、あまり変わりないように見えたが、  
どうやらお互いの関係が随分と変わつてしまつたらしい。

それにカズは、なんとも言えない気分になつたが。  
それでも気を取り直し、言葉を続ける。

「よつは、名を騙つて騙されそうになつた、といつじとですよね  
「いや、何と申せばよいのか……」

幻夢が本物ではないからこいつそり取り替えてほしい。

夜に忍び込んだことはともかくとして、カズは今回の以来の旨を管理者の老人に説明していた。

それに対する答えは、憤りがないとは言い切れなかつたが、確かに自業自得だつたのだろう。

はつきりきつぱり自分の愚かさを呴くカズに、老人は困り果てた様子で眉を寄せている。

「あ、すみません。そのことは未遂に終つたんでもういいんです。それより、幻夢のマジックアイテムとしての効力を知りたいのですが……」

「は、はい。一応、名目上では、もう一人の自分を見るとありますが、

実際には映りこんだものの真実を露にするそうです。

見た目だけでなく、後ろめたい心、隠し事などがそれにあたります

す  
「……」

管理者の老人は、引っ張り出してきた台帳のようなものを凝視しつつ、そう答える。

言葉通りならば、今展開されているこの夢のようなものは、カズ自身が隠したかったことなのだろうか？

何を後ろめたく思つてゐるのか、カズには分からなかつたが。  
誰に隠したかつたかは、分かる気がした。

おそらく、自分自身に隠しておきたかったことなのだろう。  
カズには漠然と、そんな予感があつて。

「ええと、用途ですが、元々諜報活動防止や、侵入者の検査など  
に使われる予定だったそうです。  
しかし、月の根源が顔を完全に顔を見せた状態でなければ、発動  
ができないとのことで、  
今は美術品以上の価値はないそうですが……」

俯き黙り込むカズに何を思つたのか、補足する形でそう纏める。  
カズは、その説明の中に気になる部分があり、顔をあげた。

「月の根源……それって、月……満月のことですか？」  
「は、はい。元々このマジックアイテムは、ラルシータ国に献上  
されたものだそうなので」

てっきり、マジックアイテムの類はアリオパンツァー産だらうと  
思つていたので、  
その言葉は以外だつた。

「そうですか。ありがとうございます。それじゃあ、ちょっとリ  
ルシータの方に足を運んでみます」「う、うへりうつさまですっ」

平伏する勢いの管理者の老人に、カズは苦笑しつつ、その足をスクールへと向けるのだった……。

(第35話につづく)

### 35、逢いたい

まだ時間が早いのか、日差しを受けてもそれほど暑さを感じない。

夜もいいけど、朝も悪くない。

夢のくせに、夢のはずなのに、それは現実のようにも思えて。

カズは否認するみたいに頭を振ると。

肌を撫でる涼しげな風とともに、駆け出していく。

街中を通れば、いつも以上に集まつてくる気がする数多の視線。普段ならできうる限り相対し受け止めようとするそれも。余裕のないカズは、ひらりひらりと縫うように駆け抜けていく。

校門を抜け、守衛の人に向かうは各国に繋がっている虹泉のある場所。

(まずは、ラルシータか……)

マニーがいるというアリオパンツァーにも行きたかったが、行つて会える補償もないせいか、そちらを優先しようといふ気にはれなかつた。

何故か、マーティに会つ勇気がなくなつてしまつたのだ。

それは、本当にマーサーが無事なのか確かめるのも怖かったものもあるだらう。

忘れていた、自分にも秘密にしていたことがあるところ、後ろめたさもあつたかもしない。

会いたいのに、会いたくない。

考え続けているとどんどん不安になつて、カズはそれを振り払うよひこ、ぱんと両頬を叩く。

そして、虹泉のためにあてがわれた部屋に入ると、そこには先客がいた。

ケイとダイス、そしてナナ。  
スクールの見学だらうかと、思わず声をかけよひこしてはつとなる。

見れば、彼らがハイクラスほどの年齢にまで成長しているのは一目瞭然だつた。

姿見に映つた自分の姿を見手、三年ぐらゐの先の未来かと思つたが、どうやら違つらしき。

(つまりオレは、五年以上たつてもあんまり大きくなれねえって

「とかよ」

ケイやダイスは縦は見上げると首が痛くなるほどで、横は戦士の体つきをしていて威圧感がすごかつた。ナナですから、倍はあるんじゃないかつてくらい、惚れ惚れする体つきをしていく。

一見すると、カズが声をかけるのもためらつくらい、ダイスとナナの距離が近い。

それ以前に、ダイスの大きな腕は、完全にナナの両腕の中にある。

二人はちゃんと出会えて、お互にを思い出せて、想いを通じ合えている。

自分がその橋渡しきれればいいと思っていたのに。そう考えると、カズはなんだか複雑だった。

ずっと見ていると、訳の分からぬ羨ましさで、いたたまれなくなっていく。

（羨ましいって、何をだよ）

自然とついて出る自分への悪態。

その一方で、分かっているくせに、なんて呟く自分がいたりして。

思わずカズがため息をついていると。

それに耳ざとく気付いたのはケイだった。

「おや。どこの姫かと思えば、カズではないか。久しいな」

発せられる言葉はくだけてはいるが、やつとしゃがみ込み頭を下げる様は、姫といつ禁句を差し置いても、カズをつぶたえさせむに十分なものだった。

いかにも、目上の者に対しての礼儀。カズの記憶が正しければ、他国だとはいえ身分の差などなかつたはずだが。

自分は偉くなつたのだろうか。こんな成長していない身体で。カズは心内でそんな自虐的なことを考えつつ、何とか言葉を返そうとする。

しかしそれは、真横からの大きくて柔らかな衝撃に遮られる。

「カズちゃんだあー、やっぱりかわいいよ  
「わっふっふ、や、やめつ」

どうやら、ナナに思い切り抱きしめられたらしい。

「駄目だよ、ナナさん。カズは小さいんだから、そんな力任せにしちゃあ」

「あ、うん。やうだたね、つい、抱き心地よくてさ」

参ったの合図すら適わずに、されるがままになつていて。そんなナナをやんわりと諭したのはダイスだった。さんづけではあったが、そこには十二分の信頼があるらしく、あつさりカズを手放すナナ。

それにカズが呆けていると、ケイと同じようにしゃがんで見せ、カズと同じ目線に立つたダイスが、ゆっくりと口を開く。

「カズ、今日はどうしたの？ 何かここを離れなきゃいけない理由が？」

「いや、そのう。ラルシータに行きたいんだけど」

まるで、スクールを出るのに理由がいるかのような、そんなダイスの物言い。

事情が分からずも、咄嗟にそつひとつと、カズより早く納得したような表情を見せる二人。

「ああ、セリア嬢か。相変わらず、仲のよろしいことで」

「そかそか。ボクもいけたらいいんだけどね。今日はダイスとの記念日なの」

「ふふ。気にしなくていいのに。たまには女友達同士つてのもいいんじゃないの」

「んもう、そんなこと言つなんて、ダイスの意地悪」

それからはもう、女友達つてなんだよって、突つ込みたかった力

ズを置き去りにして。

二人の世界に入ってしまつていて。

さつさまであつた緊張感もビリへやう。  
この夢だか何かは、自分が思つてゐるより危険ではないのだらう  
か、なんて考えに至る。

でも、それでも。

マーサーの姿を確認するまで、安心はできない。

「あの、それじゃあ、急ぐから」

「ああ。気をつけて。『クリッター』にかどわかれないよ」

……

いや、カズなら心配は無用かな」

ほとんど第三者に近いカズですから、ダイスとナナのあつあつっぷ  
りに辟易しているのに、

ケイは随分と余裕そつだつた。

ただ、芝居めいたお決まりであつたケイの言葉に、カズは違和感  
を覚えて振り返る。

ケイも、クリッターと呼ばれる魔物のことを知つてゐる。

それはいい。コーライジに住む子供ならば、誰もがその名を耳に  
したことがあるはずだからだ。

しかし、自分なら心配いらないといふのはどういふことだらうか。  
少なくとも、それほどまでにカズが強い、といふ意味ではない氣

がする。

「Jの世界では、未来ではどうこつた扱いを受けているのか。

「あ……」

その事を詳しく聞くべきであったのに。

気付けば虹泉は発動していく。

七色の水に飲み込まれるようにして、カズは忽然とその姿をくらませていった……。

(第36話につづく)

### 36、甘い手

カズは呆然としたまま、大陸一つ分離れたラルシータスクールのある地へと降り立つて。

引き返すべきかと一瞬迷つたが、結局その足は再び泉に漬かることはなかつた。

戻つても、ケイたちはいないかもしけないというのもあつたが。

何故かカズの足は、動かなかつたのだ。

正しくも、虹泉の狭間に棲まうと言われる、クリッターのことを恐れているかのように。

それは、カズの忘れている、知らなくてはいけないことの一つのはずなのに。

カズは無意識のまま後退りつつ、その場から離れる。

「……そうだよ、タカやトールならマーサーのこと知ってるかも  
しない」

そこで、不意に思い出したのは、マーサーの、自分の友人たちのことだつた。

クリッターに対する恐怖、何故かそこから生まれ出た二人の顔。もしや、カズの感じる恐怖を、二人も体験しているのではないか。

カズはそう思い立ち、ラルシータスクールへ向かつて駆け出す。

ラルシータ大陸にある虹泉は、コーライジアスクールのそれと同じく、  
ラルシータのスクール内にある。

実の所、数はラルシータスクールに来るの初めてだつたのだが。  
それすら氣にしている余裕すらなかつた。

それでもタカは、確かスクール内に住んでいるといつていいたことを思い出し、

カズは居住区らしき場所を目指して、駆け出していく。

そしてすぐに、それらしき場所に辿り着いたまでは良かつたのだが。

が。

「んー？ 何してんだそんなどいで、タカならいねーぞ。トールと洞窟訓練だつてよ」

「あ……」

不意に掛かつたその声は。

知らない声であるにも拘らず、どこか親しさを感じさせ、そんな声だった。

だが、その隠しもしない圧倒的な魔力……魔精靈の氣配が、カズに馴れ合いを許さない。

属性はおそらく『雷』ガイゼル。

だが、その力は今まで感じたことのないくらい強大なものだった。それこそ、『神型』の一柱と言われてもおかしくなぞうな威圧感。

『神型』であるならば、マイカたちがいるのに。クリッターを幻視したせいで、その時カズを支配したのは恐怖だけだった。

「おい、なんだよ。無視するなよ、なんでおいらを避けるのだ」

それが、彼にはお気に召さなかつたらしい。姿を見るよりも早く、再びカズの足が浮いた、その瞬間。

「うどわあつ、いきなり何するのだつ！」

「あんたがカズを襲おうとしてるからに決まつてるでしょ」

大気が軋れ、凍りつくような音と、強い魔精靈の怯える声。

勇ましくも凛々しい、カズの聞いたことのある少女の声がする。

はつと我に返つて振り向くと、そこには案の定大人になつた、凛として美しいセリアと、もこもこのかわいらしい獸耳をつけた、人にごく近い魔精靈の姿があつた。

知っている人物が現れたことへの安堵感もあつただろうが。先ほどの威圧感が嘘に思えるほどセリアに怯えていて。何だか不憫というか、気の抜けたカズである。

「カズ？ ……どうしたの、何かあった？」

それかな何するでもなく、ぼうっと一人を見ていると。はつとなつたセリアが、すかさずやつ聞いてくる。

「え、えつと……」

まるで、姿を見せることが大事のよつた物言い。それにカズが戸惑つていると。

「ラウル、戻りなさい」

「なんでだよ、おいらほんとになにも」

「いいから」

「わ、わかつたのだ」

やり取りを聞くに、ジリヤリラウルといつ獣耳の魔精靈は、セリアに従属しているらしい。

『神型』を従属させるなんて、すげいなあと感心していると。ラウルはしゅんと耳を垂らして、ふわっとどこかへ飛んでいくてしまう。

「お茶を用意するわ。話はそこで聞くから」

「あ、ああ」

初めて会った時の、おどおどした様子は嘘のようだ。物言わせぬ強さをもつて、セリアは空飛ぶ魔精靈を見つめていたカズを連れ出す。

それが当たり前であるかのように、繋がれる柔らかな手。それだけの信頼が築けるようになるのかと。

夢かもしれないことも忘れ、なんだかカズは嬉しい気持ちになつていたが。

「お役目が、嫌になったの……？」

「え？」

慣れた手つきで、果物のいい香りのするお茶を出されて。開口一番のそんな言葉に、意味が分からず思わず聞き返してしまうカズ。

すると、セリアは不思議なものでも見たかのよう、じこっとカズを見つめてくる。

「あの、えっと……」

まさに、自然体で、大人の装いをしているセリア。

お茶で温らせた赤い唇に内心どぎまきしつつも。

そもそも言っている意味が分からないので、言葉を濁すことしかできない。

「他に、あなたが泣きそうな顔で私の元に来るようなことって言えば……」

まるで何もかも見透かされているかのような。  
あるいはカズのことなど何でもお見通しとでも言ひたげな、そんな声色。

ラルシータに来た理由が、完全に自分に会いに来たと思い込んでるところなんか、

本当に仲良しなんだなあと、自分を棚に上げてカズは思つて。

それとともに、泣きそつた顔をしていたのかと、改めて想い出すと恥ずかしくなり。

赤くなりつつもこれ以上セリアが何か言ひ前のこと、カズは口を開くのだった……。

(37話に続く)

### 37、君の心に帰りたい

何だか、自分以上に自分の事を知っている風の、少し未来のセリア。  
今この状況においては、その通りなんだろうな、なんて思いつつ。  
氣恥ずかしさを隠しきれないままに……カズは口を開く。

「あのさ、ライジアパークのマジックアイテム展に、『幻夢』っていう鏡があるんだけど、知ってるか？ 元々は、ラルシータに寄贈されたものらしいんだけど……」

その鏡が、ラルシータスクールが奉る、『月』<sup>アーヴァイン</sup>の魔力によつて発動すること。

具体的な効果はどうなのか。

知つていれば教えてほしいと問いかけると、今度は訝しげに見つめてくるセリア。

「どんな効果つて。……そんな事、体験してるカズが一番知ってるんじゃないの？」

「え？」

ひとり、とした。

今まさにカズの身に起つていてることを、そのまま黙こぼでうされている気がして。

「カズ、良く私に話してくれたじゃない。鏡に吸い込まれたと思ったら、

そこはユーライジアによく似ただけど違う世界なんだって。

性格の真逆な私や、マニイちゃんがいたり、タカが女王様で、トルが病弱な男装少女で、

だけどあいつだけいなくて、カズは必死に世界を旅して探すんでしょう？」

しかし、セリアの語つてくれたものは、少々毛色の違うものだった。

だが、そこにはカズが今置かれている状況と、重なる部分もある。

どこか棘のある言い方だつたが、『あいつ』とこうのマーサーのことだとするなり。

そのセリアの言つカズが、マーサーを見つけることができたのなら。

同じような行動をすればいいのかもしない、なんてカズは思つて。

「あのセ……実は、今ここにいるオレも、その幻夢に吸い込まれてこの世界に来ちゃったんだ。

オレからすれば、ここは何年も先の未来で、夢みたいなものなんだけど」

もう一人の自分を写す鏡のはずなのに。

どうしてこんなことになつているのだ？ カズは思つ。

もしかしたらそれは、別世界の、別の時間軸の自分を体験できる、と言う意味なのかもしれないが。

「……ああ、なるほど。だから様子がおかしかったのね」

カズとしては、冗談でしょ？ と言われても仕方ないつもりで言った言葉だったが。

当のセリアは、全く疑う様子もなく信じてくれているようだった。

「理解が早くて助かるよ。それでさ、早速帰りたいんだけど、どうすればいいのか、セリアは分かるか？」

これなら、この夢かどうか分からぬ世界から、すぐに抜け出せるかもしない。

そう思つて聞いてみると、改めてセリアは、カズのことをじつと見つめてきた。

そこには今まで以上に、真剣な瞳があつて。

「それこそ、この世界のカズから聞いたことなんだけど。  
あなたがここにいるのは、きっと意味があると思つわ。  
おそらく、あなたにもこの世界に逃げ出したい、現実から田を背  
けたい、

って言ひ理由があつたはずなの。……この世界のカズがそうであ  
つたよ！」

逃げ出したい理由。

考へても、はつきりしない。

だけど、それは安寧を得て、生き易くするために忘れていたのだ  
うつとカズは思つた。

だとするなら、この世界に来た意味は。

「オレはそれを見つけ出して、乗り越えなくちゃいけないってこ  
じだ。元の世界に帰るには、」

「まあ、そういうことね。逆に、それら全てを放り出して、この  
世界で自由に生きるつて手もあるけどね、めでたし、めでたしつて

気安い様子のセリアの言葉であつたが。

それに何故か、カズは恐怖を覚えた。

それはきっと、分かつていたらだ。

全てを投げ出すことで、自由になる変わりに。

一度とマークーと念えなくなるだらつと嘘いつことを。

「帰る、オレは帰るよ。帰りたいんだ。あいつがいな世界なんて……きっと意味がない」

それを自覚しただけでも、この世界に来た意味があるとカズは思う。

「ううそつをまをして、心急くままに立ち上がれば。  
呆れ返つて諦めたような、セリアの深い深いため息。

「ビビの世界のカズも一緒に。あのこつくわあいつこ、べびつた  
け。嫉妬しちやう」

続くのは、本気で言つているそんな言葉。

そこまで好かれているのが嬉しくて。

結局自分本位でいることに、申し訳なさも沸き立つて、曖昧に笑  
うしかないカズを。

セリアは自然な動作で抱きしめるから。

「何があつても、私はあなたの味方だから、また何かあつたら、いつでもいらっしゃい」

「うん。……ありがとう」

自然とついて出たのは、そんな感謝の言葉で……。

(第38話にひらく)

それから。

カズはラルシータを出て、アリオパンツァーへと向かっていた。

そこには、マニーが仕事で向かっているという場所。よく考えたらアリオパンツァーにも、ギルドがあるので、問い合わせれば探し出すのはそれほど難しくないだろう、カズはそう思っていたのだが。

結果だけ言えば、ギルドの記録に、マニーの名前はなかった。それですぐにびんと来たのは、『夜を駆けるもの』のこと。

かつてマーサーにより話と持ちかけられた、仮面をつけての仕事のことだった。

おそらく、マニーもギルドを通さずに、個人で仕事を請け負っているのだろう。

だとすると、探し出すのは容易ではない。

それを証明するかのように、暁が過ぎ、日が暮れる時分になつても、

マニーの姿を見つけることができなくて。

これは、一旦帰つて、ルッキー辺りにもう一度詳しく述べたほう

がいいかもしない。

あるいは、ヴァーレスト家で待つか。

そんな事を考えていた時だった。

「……え？」

もうすぐ、夕飯の団欒の時間。

そのための買い物、その帰り道。

思わず硬直するカズに気づいた様子もなく。  
セリアに似た誰かと、カズに似た誰かが、食材を抱え歩いている  
のを見つけたのだ。

さつきセリアの言っていた、この世界のカズだらうかと、一瞬混  
乱しかけて。

香るよう漂う魔力の気配が、一人して『金<sup>ガルック</sup>』に偏っていること  
に気づかされる。

おそらく、彼女たちはルシアの言っていた、  
あるいは町ぐるみで開発していた、魔道人形なのだ。

目的も忘れ、ふらふらとついていくと。  
辿り着いたのは『ラボ』がそのまま一軒家になつてゐるよつた建  
物。

「あれ？ カズじゃない。珍しい、こんなところで何してるの？」

すると、耳に届くは高く響くルシアの声。  
どうやらそこは、ルシアたちの家らしい。

そんな言葉を皮切りに。

ルシアと、セリアを基に創られた魔道人形と、カズを元に創られた魔道人形と。

二人のお姉さんらしい知らない魔道人形とは思えないくらい人間らしい少女に。

カズは恐縮するほどに、歓迎されることとなる。

特に、カズを基に作られた、ノアと言つ名の魔道人形の少女の感  
激っぷりは凄まじかつた。

彼女だけ、ルシア作だそうで。

カズとは初めて会うらしく、どうして今まで会わなかつたのだろう  
と不思議に思ったが、

それについては彼女たちの方が納得できる理由があつたようだ。

本人でないカズには、それを問い合わせることはできなかつたわけだ  
が。

そもそもカズは、マニーを探す為にここに来たのであって、  
あまりゆっくりしているわけにもいかない。

故にその顔を伝えてお暇じよつとするカズであったが。

「マニイちゃんを探しに？ 何だ、それなら早く言つてくれればよかつたのに。」

ついさつきまで、この子たちに歌を教えてもらつていたのよ」

「そつか、どうりでどこ探しても見つからないわけだ。それじゃあ、もう家に帰つてるかな」

「多分ね、引き止めちゃつて『めんなさい』

頷き、謝るルシアを、真似して頭を下げる魔道人形の三姉妹。それにカズの方が恐縮して、苦笑しつつその場を去る。すると、不意にカズを呼ぶ声がする。

玄関口を出かけて、声のほうに振り向くと。歓迎されていた時には姿の見えなかつた、すっかり大人になつたリザの姿があつた。

「ああ、リザもいたんだ。ええと、久しぶりでいいのかな？」  
「まあ、そうですね。……お久しぶりです」

だが、思ったより変わっていなかつたルシアと比べて。リザの雰囲気は、カズの思うものとは大きくかけ離れていた。

それになんと言つか、あまり歓迎されてない気がする。

それでも、ここまで顔を出さなかつたのと、呼び止めたところとは何か用事があるのであら。

それを聞くために改めて向き直ると。

セリアとは違つた雰囲氣で、頭からつま先まで観察られる感覺。

ひょっとして、この世界のカズではなこと気に付いたのかもしない、とも思ったが。

「やうやつで、いつまで経つても変わらへんんですね」

「……それは」

一体どう意味だら。

思わず、全身をすっぽり覆う闇色のマントと法衣を見回してしまつ。

聞き返せうと呟くのと、何故か図星を指された気がして、言葉が続かない。

「あなたがやうやつて誤魔化すから、あいつは……」

「……っ」

続く言葉が、胸に響いて、痛かつた。

『あいつ』なんて呼び名がリザから出ると思わなかつたせいもある。

セリアと同じ呼び方のそれはきっと、今カズの頭の中に占める人物なのだろう。

リザやセリアとあいつ……マーサーには、カズの知らない何らかのやりとりがあつた。

想いがあつた。

カズは、それがなんのか答えを出そうとするけど、いくら考えてもそれは適わない。

……いや、この期に及んでも、未だ理解しようとしていないのもしかれなかつた。

ちょうど今、リザがそれに怒っているよう。

267

それに、カズがうろたえ動搖しているのが分かつたのか。リザは力抜くように、やつぱり深いため息を吐いて。

「……『風』<sup>ヴァーレスト</sup>の廃教会。そこで待ってるって。伝えたから」「あつ」

誰からの伝言なのか。

カズが問つよりも早く、もう用はないとばかりに踵返してしまつリザ。

おそらく、マーサー……いや、マーティの伝言、なのだろうと予想

はできるが。

(……仲が悪いのはいやだな、気をつけよつ)

これが、いつかやつてくるかもしれない未来だとするならば。  
仲が悪いより良いほうがいいに決まってる。

カズはそう決意し、その場を後にする。

大人になったその世界が、そう簡単にいくものではないことを、  
気がぬ今まで……。

夜がやつてくる。

どことも知れぬ世界の、だけど日々暮らす世界によく似た場所に。

カズは駆ける。

リザの言つ、風の教会を探して。

『廃教会』と言つ事は。

今は使われずにはいる、といふことだらう。

『風』<sup>ガラ-レースト</sup>の教会自体は、コーライジアに数百を超える数が存在している。

この世界も同じかどうかは分からぬが。

果たしてその中に打ち捨てられ、しかし壊されないまま残っているものがいくつあるのか。

もつと詳しく聞けばよかつたとも思ったが。

おそらくリザも言ったこと以上のことは知らないだらうといふ気がした。

故にカズが向かつた場所は、コーライジアの長、マイカ・エクゼリオの元だった。

向かうのはコーライジアスクール。

彼女ならば、きっと何かしらの知恵を授けてくれるに違いない。

そう思つて、校門の守衛の人に声をかけ、いざスクールへと足を踏み入れようとした時。

「……ん？ あんな道、あつたつけ？」

どうして今まで気付かなかつたのか。

あるいは、カズの知るコーライジアとの数少ない差異なのか。

大きな大きなスクールを覆う壁の、外側を縫うようにして、裏側へと延びる坂道が見える。

気になつて、近づけば。

瞬く夜空を背に、丘……スクールを支えるような山が見えた。

「スクールの、裏山……か？」

言われてみれば、それは確かにあつた。  
なのに何故、カズはその存在に気付かなかつたのか。

「……いや、忘れていた、のか？」

その方がカズにとつて都合がよかつたから。  
それに気付くと、カズの足は自然とそちらに向いた。

それはきっと間違いなく。

自分自身で誤魔化してきた、乗り越えなければならぬ何かがそ  
こにある、

そんな確信があつたからだ。

そして。

もれなく辿り着いたのは、バチバチと『雷』<sup>ガイゼル</sup>の魔力を迸らせ、  
登山道への通行を妨げるようにして張られた縄のある場所。

「これは……」

初めて見るはずなのに……いや、確かに見覚えがある。

相反する感情。

カズはそれを打開しようと、その爆ぜる魔力に、そつと手を差し伸べて……。

(第39話につづく)

### 39、Memories

今日は裏山にある廃教会に行こう。

不意に発せられた、マーサーのそんな言葉は。  
子供達だけの、秘密めいた遊びの合図でもあった。

集合場所は、スクールの裏手。

日の中を覆うように聳える、裏山の入り口。

そこにはカズ自身。

そして、マーサーの紹介で仲良くなつた、二人の友人……  
トール呼ばれるコーライジア四王家、ガイゼルの一族の長男坊と。  
姉妹校ラルシータスクールの校長、ルレイン・セザールの息子、  
タカ・セザール。

お馴染みの面子だが、そこにマーサーの姿だけがまだない。

マーサーが間に入らないといつも喧嘩している風のある二人。  
そんな二人から少し離れた所に、カズはいた。

首の痛くなる角度で、此度の探検の目的地を見つめている。

(これは、また夢？ でも……)

そこにいるカズと、心が僅かばかり剥離して浮いているような感覚。

おそらく、あの『雷』<sup>ガイゼル</sup>の魔力に触れたせいなのだろうが。

カズはこの光景を確かに憶えていた。

……いや、思い出したというべきなのだろう。

これは今のかずより、僅かに過去の記憶。  
スクールに入学してすぐのことだ。

気になっていた、スクールの裏山の一角にあるらしい廃教会。

曰く、地獄に続く扉があるとか。  
人間の生き肝食らい、徘徊してまわる怪物がいるとか。  
世界に隠れて過ごす根源魔精靈の住み処だとか。

入ってはいけないと言われている裏山にあるからこそ、  
廃教会なる場所は、カズたち好奇心が服来て歩く子供たちにとって、ひどく魅力的な場所に映った。

そう、カズは確かに行つてみたいとは思つていたし、興味も抱いていたはずだ。

だが、得体の知れない不安があつて、自分ひとりで行こうとは思ひもしなかった場所だった。

「……何だ、行かないんじゃなかつたのかよ？」

と、一人蚊帳の外にいたカズにかかる声の主は。同じ年のはずなのにカズの倍はあるんじゃないかと思えるくらい背の高い、タ力だった。

硬そうな短めの銀髪。

意志の強そうな太い眉。

瞳に月を潜ませる、不思議な色の瞳。セザール。その身に潜むは、人間ではありえないほど、『光』アーヴィング、『月』エクゼリオ、『闇』エクリオの魔力。

変わらない、カズの記憶とほぼ合致する、タ力の姿。

本人も口にしないし、カズも聞くつもりはなかつたが、おそらくはかなり高位の魔精靈を片親に持つのだろう。

マーサーの紹介だから悪いやつではないという確信もあつたし、それから付き合つて気のいいみんなのまとめ役であることをカズはよく理解していたが。

この頃は、平氣なふりをして見せても、カズは彼のことが少し苦手だった。

あまりに強すぎる種としての力が滲み出でいて。

マーサーのような、一切の圧迫のない、安心感がなかつたからだ。

カズは、気付けばそんな事を考へていて自分に内心でぶんぶんと首を振り、何とか言葉を返す。

「お前らが行くつづなら行くしかねえだろ」

行かない、などと言つた憶えはなかつたが。  
ついて出たのは、不機嫌な、むすつとしたもの。

今となつては到底信じられない、喧嘩腰のやり取り。

「無理すんな。どうせやばくなつたら逃げるんだ。怖いなら別に  
ついてくんよ」

それに、しち面倒くさうに置聞にじわ寄せて言葉を返したのは  
タカ以上に眼光鋭い、

今より三割増しで恐持ての、だけど幼いトールだった。

タカが苦手なら、彼に対する出来つたばかりのカズの評価は、ほ  
とんど恐怖に近かつただろう。

タカほどではないが、同年代としては信じられないくらい恵まれ  
た体格で、

つんつん尖るその黒い髪が示すよつこ、触れたら切れそうな威圧  
を常に放つている。

事実その頃のトールにとって、何につけても自分たちと同じ事を  
したがるカズは、  
面倒臭い相手の一人であつたのかもしれない。

それは、トールの方がむしろカズの事を恐れていたが故の態度だ

つたのだが……

当のカズは知る由もなく。

気がつけば殴り合いの喧嘩になつてた夕力よりも。

刺々しいトールの言葉。

言い返したかったのに、言葉にならない。

何故なら、トールの言葉に反論の余地もなかつたからだ。

この先に何が待つているのか知らないくせに、何かに恐れていたからだ。

「ふん。そんな事言つておまえこそ怖いんじゃないのか、トール？」

代わりに口を挟んだのは、夕力だった。

その言葉は、すぐさまトールに火をつける、最悪の展開。

「なんだと？ 死にたいのか？」

「……できるものなら」

よつて、気付けば二人の間に、剣呑な火花散る始末。

なまじ力を持つ故に、その場には冗談ではすまないような負の魔力が溢れて。

バババチャイツ！

それはまさしく、仕組まれたかのよつた絶妙な一手だった。

『雷』<sup>ガイゼル</sup>の魔力が暴走したような、爆発音。

それは、一触即発のこの場ではなく、これから向かう先から聞こえてきたもの。

「あの馬鹿っ、先に行きやがったな！」

思わず叫び、走り出すカズ。

一人のいがみ合いを止めてきたのは、いつもマーサーだった。

故にカズは、それがマーサーの仕業であると疑わない。そのまま緩やかに登る野道を駆け出す。

間に入つて止められたわけではない。直接的要因は何もなかつたが、気づけばタカモールも怒りの矛を收め、

そんなカズのことを追いかけていた。

それは、条件反射で本能に従つた行動だったのだろう。

意味のない諍いだからこそ。

触れずして止められたことが最良であることを、知らないのはカズばかりで……。

(第40話につづく)

一人の喧嘩を止めた爆発の原因は……いくらもいかぬうちに知ることができた。

どうやらそこからが裏山、かつては『魔人族』たちが暮らしていったという近場の魔境の、  
本当の入り口だったのだろう。

みだりに足を踏み入れようとするものを留めるための野太い縄。  
その縄には、一枚で大の大人すら気を失うだろう『雷<sup>ガイゼル</sup>』の魔力が  
込められた結界符が何重にも巻かれていたらしい。

らしいというのは、既に縄も符も黒こげになつて散り散りの様相  
で地面に散乱していたからだ。

「おい、マーサー、大丈夫か！」

目の前の光景に、思わず焦るカズ。  
見ると、マーサーは縄の端が繋がる茂みに頭から突っ込むような  
形でのびていた。

同じく焦つていただろうトールが片手で引っ張り上げると、

田をぐるぐると回し葉っぱまれになつてゐるマーサーが、そのまま勢いよく尻餅をついた。

「い、いたた」

全く応えていないような氣の抜けた声。

「うう、髪が焦げた……」

しかし、本人にとつてみれば全くといふわけでもないらしい。涙目の、情けない調子にカズも自然と笑みが零れてしまつ。

「どうせ抜け駆けでもしようとしてたんだろ」「ぬ、抜け駆けじゃないよ。下見だつて。ほら、みてみて。ここに雷縄の本体みたいのあるでしょ」

タカがそう言つと、マーサーは半身を起こし軽く埃を払い、確かにそこに盛つてあるのは不自然な気がしなくもない茂みをかき分け示して見せた。

「雷の帶を発生させるマジックアイテムだな、家で見たことがある

見てすぐに、意外にも博識なところを見せたのはトールだ。

だが、そのマジックアイテムは散らばる結界符や縄以上に無惨な

姿を晒していた。

「くら寝ぼけたとしても、ここまで真っ黒になるまで焦がす」ではないだらうパンの「」とき様相である。

「一体何したんだよ。こんなになるまで壊しやがって」

呆れ返ったカズの弦き。

思い出したのは、偽物の鏡を壊してみせたマーティの「」ことド。

「うん、あのさあ。このびつびつのやつの元はビ」かなつて探し  
たら、ここに隠れてたんだよ。

でもさ、僕、どうやつたらこれが止まるのか分かんなくて……  
そしたらさ、この黒いことに魔力を供給してくださといって文字が  
出たんだ。

そうしたら止まるのかなって言いつ通りにしてみたんだけど

結果、この有様らしい。

マーサーは、さすがにやつすげだと思ったのか、笑顔の裏に反省  
が見え隠れしている。

カズはそれに、今度は仕方ねえなあとばかりにため息をついて。

「手回してこつそり直しつけてやるから、弁償代払えよ

「……ちなみに、どれくらい?」

「お前んちのお小遣いの三ヶ用ぶん」

「せ、戦時的撤退でありますっ」

「お、おこひら待てつ！」

ビニカで見た光景のような気がする矢継ぎ早のやり取り。

「おいタカ、ぼけつとしてんな。また置いてかれるぞ」

「お、おう」

先行するカズ達に、トールもタカもさつきまでの雰囲氣もビニカ  
やらの苦笑を浮かべ、後に続く。

そして。

辿り着いたのはさびれた『風』<sup>ヴァーレスト</sup>の教会。

「え……？」

だが、廃教会と呼ばれるだけあり、打ち捨てられているかのよう  
にその扉が開け放たれていて。

そんなはずはないと。

カズは明らかにうろたえていた。

自分は知っている。

この場所を知っている。

思い出してもいけないと、心のどこかが強く警鐘を発している。

それはもしかしたら、カズ自身の秘密の扉を開こうとしているのと、同義だったのかもしれない。

だが、そんなカズに構わず、「マーサーは〈世界のビトキア〉で中に入ってしまう。

「だ、だから待つて！」

それにカズは、大いに焦った。

カズに何か悪いことが起ころる。

思い出したのは、マニーのそんな言葉。

自分だけに起ころるならまだしも。

マーサーを巻き込むかもしれないと思ったら、いてもたっていられなくなつたからだ。

何が起ころるか分からぬはずの探検。  
えてしてそれは、何も起ころない場合の方が多いはずなのに。

カズ達にしてみれば、それは常識にはなりえなかつた。

探検にハズレはない。

必ず、何らかの新しい発見と身になるものがそこにある。

いつそ氣味悪いくらいに、仕組まれたもののようにうまくいく。

カズが過剰に焦つたのは、

その天分めいたものに畏れのようなものを覚えたからなのかもし  
れなくて。

踏み入れたその目的地は、

その名の示すままに、教会の雰囲気から大きく逸脱してはいなか  
つた。

一階席のみの、典型的だが莊厳で広大な身廊。

壁を囲むように張り巡られたステンドグラス。

そこへ伸びる二階への階段は、時計塔のための入り口か。

七色の射光は、陰鬱な空氣を微塵も感じさせず。

身廊に対面する高みの円舞台の中心に座す風の根源、  
ヴァーレストの名を冠す女神像を照らしていく。

「あ、パイプオルガンがあるよ」

「……っ」

それらの何よりも、マーサーが真っ先に反応したのはそれだった。  
駆け出すマーサーに、息をのむカズ。  
まるで、隠し事がばれてしまいそうなのに怯えるみたいに、じり  
りと汗が噴き出す。

せっぱつ自分のこの場所を知っているんじゃないのか？

最早確信に近いその思いを、カズは抱いていて……。

(第41話ついで)

その瞬間、突如として耳に降るのは、落雷のようなオルガンの旋律。

力任せではない、しかし強壮なる支配者を思わせる音。不意打ちで、それを弾いているのがマーサーであることに一瞬気が付くのが遅れて。

「あれ？」

しかし、そのまま続くかと思われた霸道の序曲は、場違いな疑問符とともに滑稽な余韻を残して消えた。

どうやら、思い切り音を外したらしい。

何を弾くつもりだったのかは分からぬが、それだけはカズにも分かつて。

「は。流石に歌のようことはつましいかねえみたいだな」

張り詰めた空気が一気に弛緩したことだ。

トールはからかうような口調でそんな事を言つ。

「む。そんなことないもん。オルガンのまづが壊れてるんだもん」

ある意味のこの中で一番年相応なマーサーは、頬を膨らませて立ち上がり、その勢いでオルガンの横手に回る。

「な、何する気だ？」

「うん？ ちょっとちょーひつをね」

最早焦りの表情すら隠し切れなくなってきたカズを脇田、「マーサーは小首を傾げ素直にそう答えると、そのまま金色の円管の隙間に顔を差し入れて。

「なにこれ？ 反対向いてるじやん」

少し呆れた調子の言葉とともに、マーサーの手は伸びる。すると、それがきつかけであつたかのよう。

地響きとともにオルガンから円舞台を挟んだ反対側、

何もなく不自然といえば不自然な空間ができていたその場所の壁に、虚空の風穴が開いた。

否、それは地下へと続く階段だ。  
隠し階段。

旧時代からある古いダンジョンでは、使い古されたものと言えば  
そつだらうつが。

「はは、すげえすげえ  
「オルガンに仕掛けがしてあつたのか」

トールは手を叩き、タ力は感心しきりに頷いていて。

「……マーサー、お前の仕掛け、知つてたのか？」  
「も、もちろんだよー。このオルガンが怪しこそって思つてたんだ  
よね」

驚きを超えたカズの問い。

マーサーは口から出任せなのが丸分かりの様子で、じくじくとや  
れに頷いてみせる。

「で？ 今回の探検の目的は、この奥にあるのか？」

すると、舞台を大回りして階段の元へと向かつたトールが、誰と  
はなしにさう問い合わせる。

「何でも聞くといふことよると、ここは世界で最初の『虹泉』<sup>トラベルゲート</sup>が  
あるらしいんだ

「最初？」

「うん。そして、その泉をくぐれば、ここじゃないいろんな世界  
へ旅立つことができるんだって」「そうか、それで……」

マーサーがその虹泉がここにあるところの情報をビリで知ったのかは分からぬ。

ただ、カズはその言葉で今回の探検の意図を語る。

ヴァーレスト家には、家長たるマーサーの両親がともに不在だった。

いないという意味でなら、それはタカやカズも同じではあるが。マーサーの両親は、世界の英雄『ステューデンツ』として世界の平穀を守るために、家を開けていた。

その世界とは、何をこじコーライジアだけに留まらないといつ。幾多の世界の『哀しみ』を滅する、究極のステューデンツ。だから滅多に家には帰つてこない。

家のことと長男のマーサーと、ヴァーレスト家に従属するルッキーに任せきりで。

「いつかは僕も、いろんな世界を旅してみたいんだ。

まあでも、それより先にコーライジア一周とかしてみたいけど」

それでもマーサーは笑みを崩さない。

残された苦労や悲しみなど、それこそ些細なことだと主張するみたいに。

「はは。せつかだなあ。どのみちリトルクラスの俺たちじゃあ、街の外に出るのすら許されねえってのに

「だから下見だつて。いざその時のためだ。大事なんだよ？」

つられて笑うホールに、なんだか言い聞かせるみたいにマーサー。

「の中では一番子供じみていて、一見すると凡百に埋もれようとするのに。

やはりコーライジアの生徒なのだ。

何かの特別があつて、供に席を並べている。

まあ、家系や何やらを見れば、マーサーだってコーライジア四王家の一角を担う子息だから、普通でもなんでもないわけだし、そもそもレスト族と呼ばれる……厳密に言えば人間族とは別の所にある希少種である時点で特別なわけだが。

「しつかし、こんな仕掛けがあるつてことは、廃教会つて言葉自体が嘘つぱちつてことだよな」

囁きながら階下を覗き込むタカ。

カズも、自分はこの先のことを知つていると確信しつつ、恐る恐る階下を覗き込む。

その先は、思つていた以上に暗闇が充満していて、十段先ぐらいまでしかその先は見えない。

まるで、カズがそう望んでいるみたいに。

だが、こうなつてくると、行けるといひまで行きたくなるのが心情である。

特にマーサーはその思いが強いだろ？  
意気揚々と一步を踏み出そうとして。

「ちよ、ちよっと待ってくれー！」

またしても、カズは声をあげていた。  
悲鳴に近い声。

それが珍しいことも手伝って、マーサーは素直にそれに従い振り  
返る。

「どうしたの？」

「いやその、なんて言つかさ……ほら、こいつて立ち入り禁止だ  
ろ？」

その理由つづ一か、オレ聞いたんだよ。この先には『クリッター』  
が出るって

クリッター。

カズが新たに思い出したのは、その事だった。

スクールに入りたての幼い子供達ならば、一度は耳にしたことの  
ある有名な魔物だ。

虹泉に潜む、触れてはならぬ存在。

夜遅くに出歩いてはいけません。

クリッターに食べられてしまします。

言われる限りの子供達ですから、それが言い含めるための戯言だと無意識に分かっている。  
そんな存在。

「ふん。そんなん信じてるのかよ。くだんねえ。大体今はまだ脣間だらうが」

本来なら、ここにクリッターがいることをどうこうした経緯でカズが知ったのか問い合わせただつたのだろうが。

トルがそう言つように、そんなカズの印象は、  
カズの見た目通りの純粹だと微笑ましさに留まっていた。

カズの話を鵜呑みにせず、ここまで来て怖気づいたのかと、そんな風に取られていて……。

(第42話につづく)

## 42、夢であるゆづり

カズの焦りを含んだ言葉。

しかし、タカもトールもその話を聞き入れず。

ここまで来て怖気づいたのかと、そんな風に取られている節さえあつた。

「昼間でもさー、出たらビリするんだよ。本当に喰われるかもしれないんだぞ！」

だがカズは、その時ですら、そこにクリッターがいる」とを分かっていた。

あまりに真に迫っていたのでからかい口調だったトールすら一の句が告げなくなるほどに。

一瞬の膠着。

子供心に残酷な、興ざめの雰囲気すら漂つて。

「分かった。三人はここで待つてて。僕、クリッターさんがいなかどうかちょっと見てくるよ」

その空氣を破つたのは、もしかしたら全然空氣が読めていないのかもしれないマーサーの、

カズにとって最悪の言葉だった。

「馬鹿つ、何言つてやがるー。余計だめだつたのー。」

「大丈夫だつて。ほら、僕逃げ足だけは速いし」

カズの必死な言葉ものれんに腕押しで。

逃げる仕草を見せ、『風』<sup>ヴァーレスト</sup>の魔力を纏つてみせる。

「それに、そもそも今回の探検は僕のわがままだしね」

自身で直つ通り、マーサーはある面においては唯我な面を持つている。

自分に与えられたすべきことは自分のみに責任を感じ、他者の介入をひどく拒む。

例えるならそう、放課後の掃除当番。

自身に与えられた仕事を他のものに任せるのが我慢ならない。自分の仕事を奪うのならば、自分を倒してからいけ。

そう言わんばかりに。

故に今回も、その台詞なのだろう。

この場には自分の我が専で来ているのだから、それに付き合つた

ヒ。

何より性質が悪いのは。

「……」で仮に倒す……止めても、今度は一人で勝手にやつてきてし  
まう可能性だつた。

今更ながらに、カズはそれに気付かされて。  
艶のある髪が乱れるのも構わずにがしがしと頭をかくと、自棄に  
近い口調で言つた。

「分かつたよつ、下見だぞつ、ちょっと見るだけだからなー  
後、オレから絶対離れるんじやねーぞつ！」

自分が一緒に行けば、襲われることはないかも知れない。  
何故なら、自分はこの先にいるものに守られる側だから。

降りてきたのは、天啓の「」ときそんな情報。

何故、自分なら平氣なのか。

その根拠は？

カズはそれを思い出さうとするが、できなかつた。

全身に走る痛みのような拒絶が、カズを押さえ付けていたからだ。

「うん、ありがとうカズ。ずっと一緒にいよづね」

だが、マーサーにそう言われた瞬間、その痛みはすつと消えてい  
つた。

カズの抱える痛みなど。

秘密など、何の障害にもならないとでも言いたげに。

カズは何がどうなったのかも分からず、呆けたままマーサーを見上げる。

そこにあるのは、通常より四割り増しの満面の笑みだ。

これ以上ないくらいいい笑みに、カズは赤面していることを自覚しながらも、我に返る。

「ば、馬鹿かおのれはっ！ そつまつ意味じゃねーってばっ」

うがーと、今にも沸騰しそうな勢いで、駆け出そうとするカズ。しかし、一、二、三歩踏み出した所で急静止すると、沸騰したまま突き出される桟の手のひら。

「ほら、手！ この先は油断するとすぐばぐれるんだからな！」  
「うん、分かったよ」

一つ頷き、間髪置かずカズの手を取るマーサー。

そのままマーサーを引きずるようにして、どたどたと無作法にカズは階段を降りていってしまう。

いつの間にやら排除された緊張感の中。

四人は連れ立つて闇淀む階下へと歩を進めたわけだが。

階段は、意外にもすぐ終わりを告げた。

闇色で覚束なかつた足取りが、次第に七色に染まりゆく。

辿り着いたのは、踊り場のような円形状の地下室だった。その地面のほとんどを、虹色にたゆたう水溜りが占めていた。虹泉の原始なるもの。

「ほら、お前らも手を貸せ」

幻想なる光景に浸る間もなく、カズはそんな事を言つ。それは、ただただ、怖かつたからだ。

何か予感でもあるのか、噴出す不安は止まらなくて。

気を緩めれば今すぐ逃げ出したくなるような、そんな衝動に駆られていたからで。

「お、おひ

「……っ

タカはそれに戸惑い、トールはあからさまに渋面を浮かべていたけれど。

かといつてそれを拒否する明確な理由などあるはずもなく。円陣を組むよつこ、それぞれが手を繋いで。

「よし、行くぞ」

気がつけば先導する形となつたカズ。  
マーサーたちはそれに従つよつに泉の淵に立つ。

「そう言えればカズ、水は大丈夫なの？」

「あ？ ああ。水っぽく見えるけど別に濡れるわけじゃないしな。

平氣平氣

カズ自身、『火』<sup>カムラル</sup>の魔力がその身に纏める割合が強く、  
水 자체を苦手にしていたし、水の中に入る授業もそれが理由で辞  
退していた。

だが、それはカズ自身もそう思い込んでいた表向きで、真意は違  
う。

単純に水に濡れて着替える、肌を晒すような羽目になるのが嫌だ  
っただけだ。

事実、自分がだけの場所である浴室の浴室などでは、全く水を嫌悪  
することなどなかつたのだから。

そんな、カズ自身の言葉通り。

虹色のそれは濡れる事も呼吸を奪う事もなかつた。

そのまま四人は、互いを支えあつよつにして、虹の泉へ潜りゆく。  
そしてすぐ、濡れることも呼吸を奪われることもないその場所が、

通常あるべき世界とは大きく違つことを思い知らされるのだ。

まず、上下左右、天上天下の概念がそこにはなかつた。  
足を踏みしめる感覚も何もなく。

加えて視界は強烈な色合いを誇示する虹に阻まれ、ほぼ視界を奪  
われた状態だつた。

近くにいるはずの三人の姿すら視認できない。

繋がれた腕の肌色さえも、強烈な色の個性に埋もれている。  
カズ達にできることは、たゆたい流される事と。

「来る……っ」

聞くこと、話すことだった。

「何が来るつて？」

カズの真意を問い合わせとしたトールの言葉は。  
しかし新たに生まれた音によつてかき消される。

最初は小さな足音。  
次いで太鼓の音。  
岩壁を叩く音。  
ウォーハンマーを打ち鳴らす音。  
巨人の地団駄。

分発地震。

大気が割られ、壊れる音。

それは、クリッターが自身の存在を示し鼓舞する音だ。

初めて聞くはずなのに。なぜかカズはその事を知つていて。

その音を聞いた瞬間、しかし誰よりも早く反応したのは、マーサーだった。

初めに感じたのは、繫ぐ手」と引き倒されるマーサーからの力。無意識のままにそれに抵抗しようとしたが、身体は精神とは別になすがままで。

カズは勢いよく転んでしまった。

それでも両手を離さなかつたのは幸か不幸か。

生のぬくもりと共ににある枷は、カズがその場から逃れるのを許さない。

無残で残酷で悲惨な音と死の気配を、もろに享受してしまつ。

適度な弾力のある何かがすりつぶされる音。  
相応に硬いものが碎かれる音。

七色の視界を刹那一色に滲ませる、生ぬるい雨音。  
世界を覆うほどに大きく感じる、荒い息遣い。

捕食。

連想するはその言葉。

だが、耳を覆いたくなるその音は消えることなく、カズの心に楔打つ。

田の前の赤い闇の中で起きていることが信じられない。

想像したくもない。

カズは全てを拒絶するように、その赤い闇の奥へ奥へと意識を沈ませていって……。

( 第43話につづく )

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8669w/>

夜を駆ける～Hello my friend～

2011年12月26日18時51分発行